

前橋城三の丸遺跡

前橋地方・家庭裁判所増築棟建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘報告

2007

国土交通省関東地方整備局
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

前橋城三の丸遺跡

前橋地方・家庭裁判所増築棟建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘報告

2007

国土交通省関東地方整備局
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県庁北東の隣接地には明治以来、一時期を除く133年の長きに亘って裁判所が置かれています。この間いく度かの司法改革があり、現在の前橋地方裁判所・同家庭裁判所に至っているのでありますが、21世紀に入りました今日、裁判員制度という新たな司法制度改革が始まるうとしております。この制度は一般国民の司法参加という、我が国の司法制度に大きな変革をもたらすものであり、平成21年5月までに導入されることとなっております。このため、前橋地方裁判所でも、現在、施設増築の工事が進められているところであります。

ところでこの増築箇所（前橋城三の丸遺跡）は少なくとも中世末から前橋城の一角となっており、特に幕末竣工の再築前橋城時代には三の丸の一部として藩主の隠居所などとなっておりました。このため埋蔵文化財の記録保存のため発掘調査が行われたのでありますが、このたびその成果を埋蔵文化財発掘調査報告書としてまとめて刊行することとなりました。

前橋城三の丸遺跡の調査範囲は決して広いものではなく、加えて明治時代の裁判所旧庁舎の基礎が広範囲に残るなど、遺構の遺存状態は決して良いとは言えないものでしたが、調査面は3面を数え、古代末の水路、中世の水田や井戸、近世の建物、堀、井戸などの遺構を調査し、近世の陶磁器を中心に多数の出土遺物を得たのであります。その中には例えば江戸時代の障子堀のように話題となった遺構もありました。障子堀は本県では主に戦国時代の小田原北条氏に関連する遺構と認識されておりましたので、明確な江戸時代所産のものが発見されたことが注目されました。

このような調査成果が掲載された本報告書が、考古学や郷土史を研究される多くの県民の皆様に活用されることを期待しております。

最後になりますが、国土交通省関東地方整備局、同長野営繕事務所、前橋地方裁判所・家庭裁判所、群馬県教育委員会文化課、前橋市教育委員会文化財保護課、並びに関係者各位に厚く御礼申し上げます。また発掘調査及び整理業務に携わった関係者の労をねぎらい序とします。

平成19年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は前橋地方・家庭裁判所増築棟建設事業に伴う前橋城三の丸遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 前橋城三の丸遺跡は前橋市大手町に所在する。
3. 発掘調査及び整理事業は国土交通省関東地方整備局の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、群馬県教育委員会がその調整を行った。
4. 発掘調査の期間は次の通りである。
発掘調査 平成19年1月1日～平成19年2月28日
整理期間 平成19年7月1日～平成19年9月30日
5. 発掘調査体制
事務担当 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原 勉、西田健彦、笠原秀樹、石井 清、
國定 均、斉藤恵利子、須田朋子、今泉大作、柳岡良宏、栗原幸代、佐藤聖行、
今井もと子、若田 誠、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、武藤秀典
調査担当 石守 晃、新井 仁
6. 整理事業体制
事務担当 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原 勉、佐藤明人、笠原秀樹、石井 清、
斉藤恵利子、須田朋子、矢島一美、齋藤陽子、柳岡良宏、
今井もと子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典
整理担当 石守 晃
7. 本書作成の担当は次の通りである。
編 集 石守 晃
執 筆 遺物観察表のうち陶磁器所見の一部 大西雅弘
上記以外 石守 晃
陶磁器鑑定 大西雅弘
遺構写真撮影 発掘調査担当及び技研測量設計株式会社（航空写真撮影）
遺物写真撮影 佐藤元彦
整 理 作 業 田中富子、木原幸子、富所恵子、小嶋八重子、大森よしみ
金 属 器 処 理 関 邦一、小材浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子
機 械 実 測 田所順子、伊東博子、岸 弘子
8. 保管については、出土遺物は群馬県の所有に帰し、遺構実測図・遺構写真等は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の管理に於いて、共に群馬県埋蔵文化財調査センター内に収納される。
9. 本書の作成に於いては以下の方々にご協力・ご指導戴いた。記して感謝の意を表します。
(敬称略) 前橋地方・家庭裁判所、前橋市教育委員会、清心幼稚園、青木利文、小笠原良人、小島純一、
坂爪久純、藤岡一雄、前原 豊、茂木 渉、地元関係各位

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
- 2 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は“m”を用いた。
- 3 本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り
As-A：浅間山噴出A軽石（天明3年／1783）
As-B：浅間山噴出B軽石・火山灰（天仁元年／1108）
- 4 遺構実測図の縮尺は下記を基準としているが、例外としたものは各図に記載している。
区全体図 1／250 遺構位置図 1／800
礎石建物 1／60 溝 1／80 土坑・ピット・井戸 1／60
- 5 遺物実測図の縮尺は下記を基準としている。
土器・陶磁器等：甕・壺 1／4 碗・坏・皿等 1／3
石器・石製品等：石臼・こもあみ石等 1／4 3号建物礎石 1／8
金属製品：鎌等 1／3 釘等 1／2
- 6 土層注記中の土色には農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参考に記載している。
- 7 陶器のスクリーントーン（網掛け）は施釉範囲を示している。

目 次

口絵	
序	
例言 凡例	
目次	i
挿図目次	ii
表目次	ii
写真図版目次	iii
第1章 発掘調査の始まりとその経過	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 発掘調査の方法	3
第4節 土層の状態	4
第2章 遺跡を取り巻く環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 発見された遺構と遺物	9
第1節 明治時代建設の裁判所建物基礎	9
第2節 1面の遺構と遺物	10
(1面の調査と概要 10 / 礎石建物 11 / 井戸 13 / 遺物集中域 16 / 土蔵(明治期建物基礎) 19 / 遺構外の遺物 22)	
第3節 2面の遺構と遺物	24
(2面の調査と概要 24 / 礎石建物 25 / 溝 29 / 井戸 37 / 土坑とピット 40 / 竪穴遺構 46 / 石列 47 / 水田 48)	
第4節 2面を中心とした遺構外の出土遺物	50
第5節 3面の遺構	61
(溝 61)	
第4章 まとめ	65
第1節 概 要	65
第2節 4・5・9号溝(堀)について	65
おわりに	68

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第31図	5号溝出土遺物(その2)	35
第2図	増築予定地の試掘調査位置・平面・断面図	2	第32図	1号井戸と出土遺物(その1)	36
第3図	調査区位置図	3	第33図	1号井戸出土遺物(その2)	37
第4図	の1・2 前橋城三の丸遺跡の土壌堆積状況	4・5	第34図	2号井戸と出土遺物	38
第5図	前橋城三の丸遺跡周辺の地理的環境図	6	第35図	3号井戸	39
第6図	の1・2 遺跡分布図	7・8	第36図	3号井戸出土遺物	40
第7図	調査区付近の裁判所旧庁舎配置図	9	第37図	2面の土坑群(その1)	42
第8図	1面全体図	10	第38図	2面の土坑群(その2)	43
第9図	1号建物	11	第39図	2面の土坑群(その3)	44
第10図	3号建物	12	第40図	2面の土坑群と出土遺物(その4)	45
第11図	3号建物出土遺物及び礎石	13	第41図	2面の土坑群(その5)	46
第12図	4号井戸及び出土遺物(その1)	14	第42図	1号竪穴遺構と出土遺物	47
第13図	4号井戸出土遺物(その2)	15	第43図	南北石列遺構	47
第14図	4号井戸出土遺物(その3)	16	第44図	中世水田全景	48
第15図	2区遺物集中域(明治期廃棄坑) と出土遺物(その1、含周辺域)	17	第45図	2区2面上層の出土遺物(その1)	50
第16図	2区遺物集中域出土遺物(その2、含周辺域)	18	第46図	2区2面上層の出土遺物(その2)	51
第17図	3区土蔵基礎と出土遺物(その1)	19	第47図	2区2面上層の出土遺物(その3)	52
第18図	3区土蔵基礎出土遺物(その2)	20	第48図	2区2面上層の出土遺物(その4)	53
第19図	3区土蔵基礎出土遺物(その3)	21	第49図	2区2面上層の出土遺物(その5)	54
第20図	3区土蔵基礎出土遺物(その4)	22	第50図	2区2面上層の出土遺物(その6)	55
第21図	1面の遺構外出土遺物	23	第51図	2区2面上層の出土遺物(その7)	56
第22図	2面全体図	24	第52図	2区2面上層・東部の出土遺物(その8)	57
第23図	4号建物上位面及び出土遺物	25	第53図	3区2面上層の出土遺物(その1)	57
第24図	4号建物下位面及び掘り方断面図	26	第54図	3区2面上層の出土遺物(その2)	58
第25図	5号建物及び出土遺物	27	第55図	3区2面上層の出土遺物(その3)	59
第26図	6号建物及び出土遺物	28	第56図	3区2面上層の出土遺物(その4)	60
第27図	1～3号溝と出土遺物(その1)	30	第57図	3面全体図	61
第28図	1～3号溝出土遺物(その2)	31	第58図	の1・2 10号溝全体図	62～64
第29図	8号溝と1・8号溝出土遺物(その3)	32	第59図	近世前期の屋敷割り	65
第30図	4～7・9号溝と出土遺物(その1)	33・34	第60図	群馬県内の障子堀(その1)	66
			第61図	群馬県内の障子堀(その2)	67

表目次

表1	2面土坑一覧	41	表3	1面出土遺物一覧(その1)	69
表2	2面ピット一覧	41	表4	1面出土遺物一覧(その2)	70

表5 1面出土遺物一覧(その3)71
 表6 2面出土遺物一覧(その1)72
 表7 2面出土遺物一覧(その2)73

表8 2面出土遺物一覧(その3)74
 表9 2面出土遺物一覧(その4)75
 表10 2面出土遺物一覧(その5)76

写真図版目次

P L 1 2区1面全景/1号建物全景/1号建物掘り方断面
 P L 2 3区1面全景/3号建物全景/3号建物全景
 P L 3 3号建物 No.6 礎石下の状況/4号井戸磔埋め込み
 状況/4号井戸石組枠など/4号井戸全景/2区東
 部遺物集中域全景/2区東部遺物集中域東部遺物出
 土状況/2区東部遺物集中域中部遺物出土状況
 P L 4 2区東部遺物集中域中西部遺物出土状況/2区東部
 遺物集中域西部遺物出土状況/裁判所旧庁舎土蔵基
 礎遺物出土状況/土蔵基礎南西部遺物出土状況/土
 蔵基礎北西部遺物出土状況
 P L 5 1面出土遺物(その1:3号建物、4号井戸)
 P L 6 1面出土遺物(その2:4号井戸、遺物集中域、近
 代建物)
 P L 7 1面出土遺物(その3:遺物集中域、土蔵、近代建
 物)
 P L 8 1面出土遺物(その4:土蔵)
 P L 9 1面出土遺物(その5:土蔵)
 P L 10 1面出土遺物(その6:土蔵)
 P L 11 1面出土遺物(その7:土蔵、近代建物)
 P L 12 1面出土遺物(その8:近代建物、表土、全体)
 P L 13 2区2面全景/3区2面全景
 P L 14 4号建物全景/4号建物北列1号地形/4号建物北
 列2号地形/4号建物南列1号地形/4号建物南列
 2号地形/4号建物1号掘り方断面/4号建物7号
 掘り方断面
 P L 15 4号建物下層全景/5号建物1号地形/5号建物上
 層全景/5号建物下層全景/5号建物2号掘り方断
 面/5号建物下層全景
 P L 16 6号建物全景/1号溝全景/2号溝全景/3号溝全
 景/4号溝全景/4号溝全景/5号溝全景

P L 17 5号溝全景/5号溝障壁/6号溝全景/7号溝全景
 /8号溝全景/9号溝全景/1号竪穴遺構全景/1
 号井戸全景
 P L 18 2号井戸埋土断面/2号井戸全景/3号井戸埋土断
 面/3号井戸全景/2区西部の土坑群
 P L 19 2区東部の土坑・ピット群/1号土坑全景/3号土
 坑全景/6号土坑全景/7号土坑全景
 P L 20 9号土坑全景/10号土坑及び17・18号ピット全景/
 15号土坑全景並びに土層断面/17号土坑全景/18号
 土坑全景/19号土坑全景/20号土坑全景/7~11号
 ピット全景
 P L 21 12号ピット全景/13・14号ピット全景/24・25号
 ピット土層断面/24・25号ピット全景/26号ピット
 全景/南北石列全景/中世水田全景
 P L 22 2面出土遺物(その1:4~6号建物、1号溝)
 P L 23 2面出土遺物(その2:1~5号溝)
 P L 24 2面出土遺物(その3:5・8号溝、1号井戸)
 P L 25 2面出土遺物(その4:1~3号井戸、7・10・17
 ・20号土坑、2・13・17号ピット、2区2面上層)
 P L 26 2面出土遺物(その5:2区2面上層)
 P L 27 2面出土遺物(その6:2区2面上層)
 P L 28 2面出土遺物(その7:2区2面上層)
 P L 29 2面出土遺物(その8:2・3区2面上層)
 P L 30 2面出土遺物(その9:3区2面上層)
 P L 31 2面出土遺物(その10:3区2面上層)
 P L 32 2面出土遺物(その11:2・3区2面上層、2区2
 面東部、2区1面遺物集中域)
 P L 33 2区に於ける10号溝全景/3区北端部の10号溝/3
 区中部の10号溝/3区南部の10号溝

第1章 発掘調査のはじまりとその経過

第1節 調査に至る経過

1 前橋地方裁判所と増築計画

群馬県前橋市大手町には前橋地方裁判所・家庭裁判所がある。その始めは明治5年（1872）8月設置の群馬裁判所に遡るが、同裁判所は翌年9月に熊谷裁判所群馬区裁判所となり、12月に高崎に移設となる。再びこの地に裁判所が設置されるのは3年後の明治9年（1876）12月。熊谷裁判所前橋支廳の設置であるが、前橋支廳は同14年（1881）10月前橋始審裁判所となり、前橋治安裁判所も併設される。同23年（1890）8月、始審裁判所は前橋地方裁判所、治安裁判所も前橋区裁判所と改称する。戦後、昭和23年（1948）5月に前橋簡易裁判所、翌24年1月に前橋家庭裁判所が併設され現在に至っている。

一方、裁判所庁舎は当初旧前橋城の建物を修繕して使っていたが、やがて庁舎が新築、増築される。その時期は、民地買収や官有道路編入、寄付によって用地入手がなされた後の明治14年と同20年頃と推測されるが、これら（旧）庁舎は昭和46年（1971）12月竣工の今の本庁舎新築に伴って解体されている。

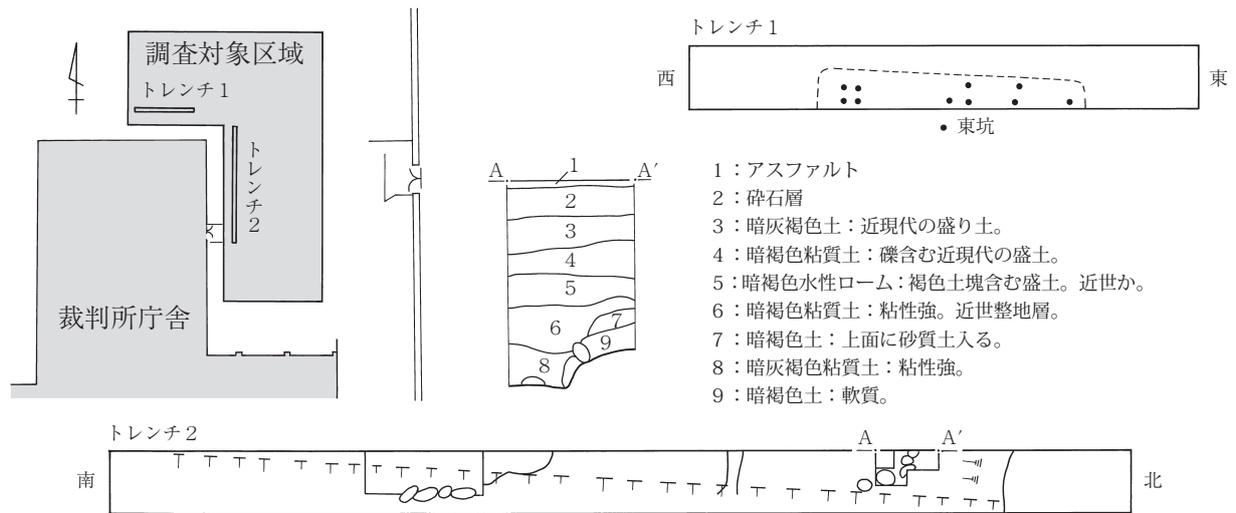
尚、平成8年（1996）6月に新庁舎が竣工している。

ところで平成16年（2004）5月、「裁判員の参加する刑事裁判に関する法律」（平成16年法律第63号）が成立した。所謂裁判員制度であるが、同制度は平成21年5月までに導入され、前橋地方裁判所（以下「前橋地裁」とする）でも裁判員用法廷の増築が計画されることとなったのである。



第1図 遺跡位置図（群馬県図：S=1/1200000 位置図：国土地理院「前橋」を加工。手前S=1/35000 設定）

第1章 発掘調査のはじまりとその経過



第2図 増築予定地の試掘調査位置・平面・断面図（試掘報告書より抜粋）

2 発掘調査に至る経過

前橋地裁は平成17年11月、この増築計画を群馬県教育委員会文化課（以下「県文化課」とする）に伝達し、埋蔵文化財の状況を問い合わせている。このとき県文化課は当該地が周知の文化財包蔵地（前橋市－00303:中世前橋城、同－00546:近世前橋城）であると答え、その取り扱いを協議している。明けて平成18年2月、前橋地裁は県文化課に試掘調査を依頼し、県文化課は同月これを実施して、対象地に近世2面の文化層からなる遺構を確認したこと、発掘調査の必要があることを報告している。

そして同年8月、前橋地裁に代わり増築に関する

支出委任工事を担当することとなった国土交通省関東地方整備局（以下「整備局」とする）営繕部建築第1課と県文化課との間で当該遺跡の取り扱いについての協議が行われ、同10月、整備局より県文化課に埋蔵文化財発掘調査の依頼がなされた。県文化課はこの調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に委託することとし、同11月、遺跡名を「前橋城三の丸」として関連の手続きに入り、同12月に整備局長野営繕事務所、前橋地裁、事業団で事前協議を行っている。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査経過の概要を以下に記す。

1月

- 4日 安全柵設置、アスファルト除去等開始。
- 5日 挨拶回り。
- 6日 表土掘削開始。現地協議（整備局長野営繕事務所（以下「長野営繕」とする）、前橋地方裁判所、事業団）。
- 10日 2区1面遺構確認作業開始（16日まで）事前作業完了。
- 12日 3区1面遺構確認作業（18日まで）。

- 15日 表土掘削完了、搬出作業。2区1面遺構掘削開始。測量基準点設置。
- 16日 2区1面遺構確認作業完了。
- 17日 3区1面遺構掘削・記録作製開始。
- 18日 3区1面遺構確認作業完了。見学者2名。
- 19日 現地協議（長野営繕、前橋地裁、事業団）。
- 24日 昼休みを利用し裁判所職員見学。
- 25日 整備局五十嵐氏、森設計士視察。清心幼稚園教諭見学打合せで来跡。見学者2名。
- 26日 2・3区1面全景写真撮影。個別遺構・セ

- | | |
|---|--|
| <p>クッション写真撮影。清心幼稚園園児見学。</p> <p>29日 2・3区2面への機械掘削、遺構確認作業開始。文化課右島主幹ら来跡。</p> <p>30日 2・3区1面記録作業完了。</p> <p>2月</p> <p>1日 文化課職員来跡。</p> <p>2日 2区2面遺構掘削開始。長野営繕谷川所長・村上監督官視察。</p> <p>5日 3区2面遺構掘削及び2・3区2面遺構記録作製開始。清心幼稚園栗原園長見学。</p> <p>8日 現地協議（長野営繕、前橋地裁、事業団）で第3面発見等による期間延長を協議。</p> <p>9日 上毛新聞社取材。</p> <p>16日 前橋地裁大橋裁判所所長、山口補佐、岡野係長、清心幼稚園栗原園長来跡、見学。</p> | <p>19日 空撮準備・清掃。清心幼稚園年長組見学。</p> <p>20日 空中写真撮影、空中測量。全景・個別写真撮影。読売・毎日・上毛新聞取材。</p> <p>21日 古井戸掘削、2・3区3面への機械掘削開始。産経新聞取材。県文化課職員、前橋市教育委員会前原・小島両係長、一般市民ら見学。</p> <p>22日 2・3区3面遺構掘削、記録。現地協議（長野営繕、前橋地裁、県文化課、事業団）。</p> <p>23日 井戸等を除き2・3面の調査ほぼ終了。</p> <p>24日 引越作業開始。</p> <p>26日 埋戻し作業開始。井戸掘削・記録作製。</p> <p>3月</p> <p>1日 撤収並びに残務。</p> <p>12日 地下埋設物埋設位置表示作業。</p> |
|---|--|

第3節 発掘調査の方法

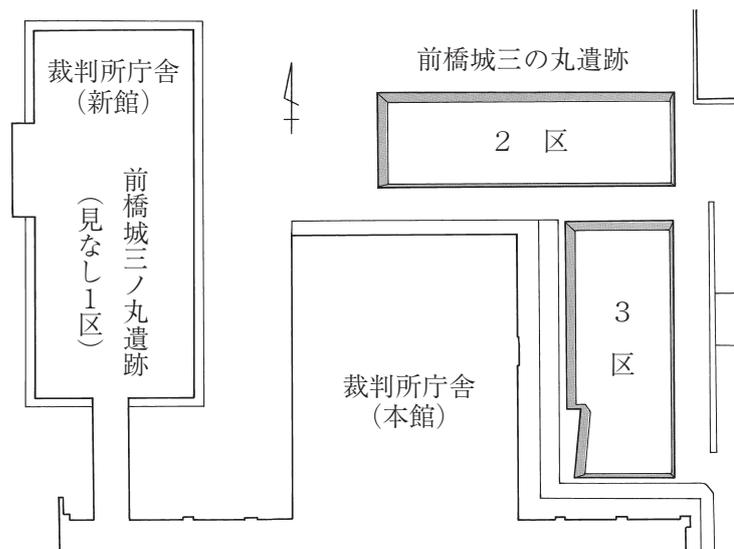
1 区の設定

調査区域には6筋の電気・上下水道の埋設があったが、一部を除き移設ができなかったため未調査区域が発生した。特に裁判所庁舎本館北縁に沿う上下水道埋設箇所は幅広いこともあり、調査区が南北に分割されることとなった。このため北側の調査区域を「2区」、南側の調査区域を「3区」と呼称することとした。

尚、「2区・3区」として「1・2区」としなかったのは、今回調査区の西側に近接する裁判所庁舎新館の敷地が平成6年度に「前橋城三ノ丸遺跡」として発掘調査されているが、この前橋城三ノ丸遺跡と本遺跡（「前橋城三ノ丸遺跡」）が同一遺跡であり、「の」と「ノ」の違いはあるにせよ遺跡名称がほぼ同一であることから、今後の混乱を避けるため、敢えて前橋城三ノ丸遺跡を「1区」と見なし、今回調査区を「2区」、「3区」としたのである。

2 遺跡略号・遺構番号と注記

- ① 本遺跡の遺跡略号は「MJ3」である。
- ② 遺構番号は調査区及び確認面の別に係わりなく遺構の種別毎に通し番号で付している。
- ③ 尚、出土遺物は取り上げの都合上、区に於ける位置、方向等を記載したものもある。



第3図 調査区位置図 (S=1/1000)

3 掘削と断面観察

- ① 表土及び調査面間の層の掘削は、調査の効率化を図るため掘削機械を使用した。
- ② 遺構の掘削は極力人力で行ったが、礫等の取り外しには掘削機械を併用することもあった。
- ③ 遺構断面の観察は適直行った。

4 記録

- ① 遺構等は記録は測量と写真撮影によった。
- ② このうち平面測量は航空・地上測量を併用し、測量成果はデジタル化し、1/40と1/100の全体図の1/40部分図を打ち出し、図を作成した。

- ③ 断面図は手実測で、1/20図として作図した。
- ④ 実測図には遺跡名、図名称・縮率・レベル高・実測者等を併記した。
- ⑤ 写真撮影はブローニの銀映写真及びデジタル写真を併用し、空中写真撮影も実施した。

5 出土遺物

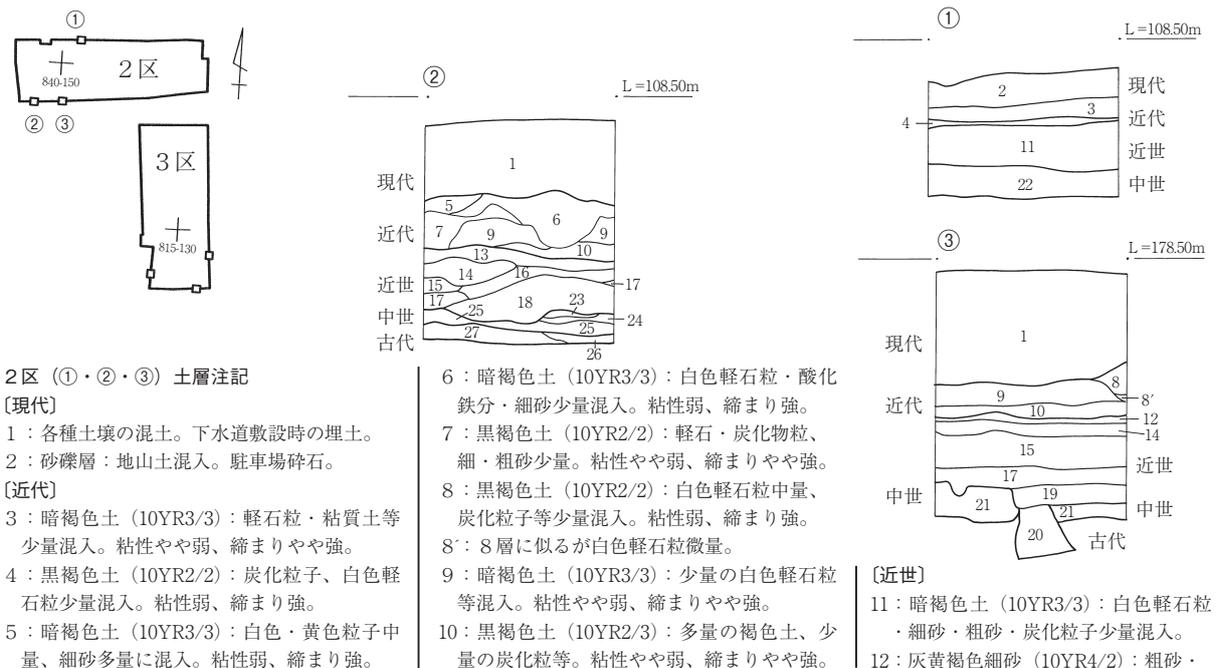
- ① 出土遺物は出土位置を記録し、必要に応じて写真撮影を行って取り上げ、遺構毎、種別毎に分別して保管した。
- ② 出土遺物の洗浄及び注記は、調査終了後委託し、或いは整理作業に入ってから実施した。

第4節 土層の状態

本遺跡では所謂標準土層を把握することはできなかった。これはAs-A・As-Bといったテフラの有無やガラスの混入で当該層の時期を把握できるケースもあったが、本遺跡の土壌が古代以来近似した性質を持つもので、一方同時期であっても地点地点で異なる堆積状況を示して時期毎の土層を標識化ができる状態になかったためである。また近代や一部近世の造成等の痕跡も広範囲に及び、且つ近現代の庁舎

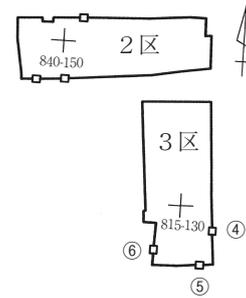
改築時の廃材処理の大小のゴミ穴がそこそこに見られたことも、その確認を難しくしたのである。

第4図に6ヶ所の土層堆積状態を図示し、土層注記を一部割愛して掲載した。このうち2区の①・②と3区の①・②地点は近代建物の外、2区の③と3区の③地点は内側に当たる地点のものであるが、先に述べたように地点地点で様相は異なるものの、こうした土層の観察から堆積土は、1) 現裁判所庁



第4図の1 前橋城三の丸遺跡の土層堆積状況 (2区)

舎建設時以降の現代の埋め土、2) 旧裁判所庁舎建設時の造成や基礎に伴うものを中心とした近代の土壌、3) 近世以前の土壌に大別することはでき、後者については地点によって近世・中世・古代に分層できるケースもあり、中世、古代の土壌は本遺跡の中にあつては近似した性格を示すものであつた。



3区 (④・⑤・⑥) 土層注記

〔現代〕

- 1: アスファルト: 厚約7cm。
- 2: 碎石層: 40-0mm。
- 3: 明黄褐色ローム: 黒褐色土塊混入。
- 4: 明青灰色細砂。
- 5: 3層土・碎石・河床礫混土層: 黒褐色土多く混入。
- 6: 40-0mm碎石層。
- 7: 黒褐色土: 川原石・炭化物・建築廃材等含む。裁判所新築時の客土。

〔近代〕

- 8: 黒褐色土: 川砂・小礫・炭化物等混入し、やや粘性あり。
- 9: 川原石・川砂層: 利根川のものか。
- 10: 黄褐色土: 碎石・灰黄色土塊混入。粘性弱。
- 11: オリーブ褐色土・橙色ローム・As-A混黒色土の混土: 粘性あり。
- 12: 暗灰黄色土: As-A・11層土小塊や多く混入。
- 13: 褐灰色土: 灰色・浅黄色ローム塊や多く、As-A含む。
- 14: 黒褐色土: 煉瓦・ローム粒・漆喰粒・炭化物粒含む。
- 15: 褐色土: 明黄褐色ローム・炭化物粒混入。粘性あり。
- 16: 灰黄褐色土と灰黄色・浅黄色ロームの混土: 黒褐色土塊混入。粘性弱。部分的にAs-A混入。
- 17: 灰黄褐色土: 瓦・炭化物等やや多、ガラス等も入る。粘性やや弱。

〔近世〕

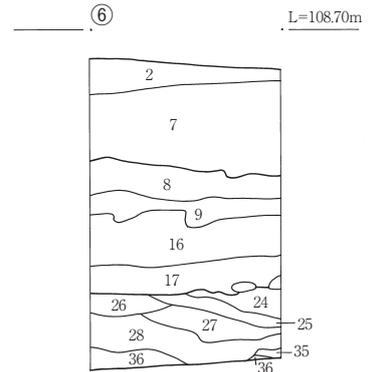
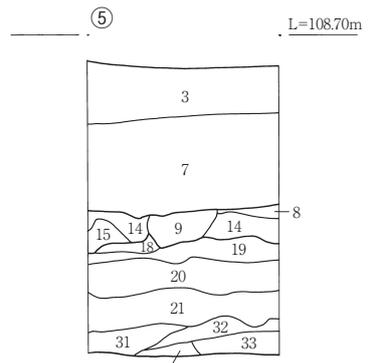
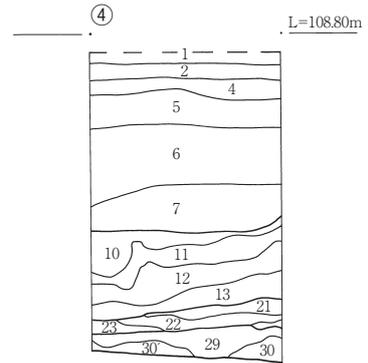
- 18: 褐灰色土: 25層土・As-C(か)等弱

(2面標準土層続き)

- 13: 暗褐色土 (10YR3/3): 白色軽石粒微量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 14: 黒褐色土 (10YR3/2): 白色軽石粒・黄色粒子・炭化粒子少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 15: 黒褐色土 (10YR3/2): 灰黄褐色粘質土塊多量に混入。粘性弱、締まり強。
- 16: 暗褐色土 (10YR3/3): 黄色粒子・細砂等少量混入。粘性弱、締まり強。
- 17: 黒褐色土 (10YR3/2): 細・粗砂、炭粒少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 18: 暗褐色土 (10YR3/3): 白色細粒・炭化粒子少量混入。粘性弱、締まり強。

干混入。

- 19: 灰黄褐色土: にぶい黄褐色シルト等混入。部分的に酸化鉄。粘性ややあり。
 - 20: にぶい黄褐色土: 少量のAs-Aと炭化物粒・小礫含む。粘性やや弱。
 - 21: 暗黄褐色土: 灰黄色シルト小塊等混入。微量のAs-A混入。粘性見られる。
 - 22: 灰黄褐色土: 少量のAs-A等と部分的に明褐灰色シルト小塊入。粘性やや欠。
 - 23: 褐灰色土: にぶい黄色ロームと黒褐色土の小塊混入。
 - 24: 黒色に褐灰色入る粘質シルトの混土。
 - 25: にぶい黄褐色土: 若干の礫・にぶい黄褐色土・24層土粒混入。粘性やや欠。
 - 26: 灰黄褐色土: にぶい黄橙・浅黄色シルト小塊等混入。部分的に酸化鉄沈着。
 - 27: 灰黄褐色土: にぶい黄橙色土粒と細砂若干混入。粘性ややあり。
 - 28: 灰黄褐色土: 26層土粒・As-C少量。
- 〔中世〕
- 29: 褐色土: ローム塊とAs-B火山灰入。
 - 30: にぶい黄褐色土: 明褐色ロームとAs-B混黒褐色土塊、As-B混入。
 - 30': 30層土に似るがローム少ない。
 - 31: 黒色土と褐灰色粘質土の混土。
 - 32: 灰黄褐色土: 黄褐色土粒と多量の31層土と褐灰色土混入。粘性あり。
 - 33: 灰褐色土: 細砂・32層土と灰黄褐色土粒若干混入。粘性あるも砂質。
 - 34: にぶい黄褐色土: 粘性やや弱。
- 〔古代〕
- 35: 褐灰色土混土: 酸化鉄多く沈着。粘性あり。
 - 36: 黄灰色粘質シルト: 細砂混入。



- 25: 暗褐色土 (10YR3/3): 多量のAs-B、少量の酸化鉄混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 〔古代〕
- 26: As-B: 暗褐色 (10YR3/3)。粘性弱、締まりやや弱。
 - 27: 黒褐色土 (10YR2/3): 白色・黄色細粒少量混入。粘性・締まりやや強。

第4図の2 前橋城三の丸遺跡の土壌堆積状況 (3区)

第2章 遺跡を取り巻く環境

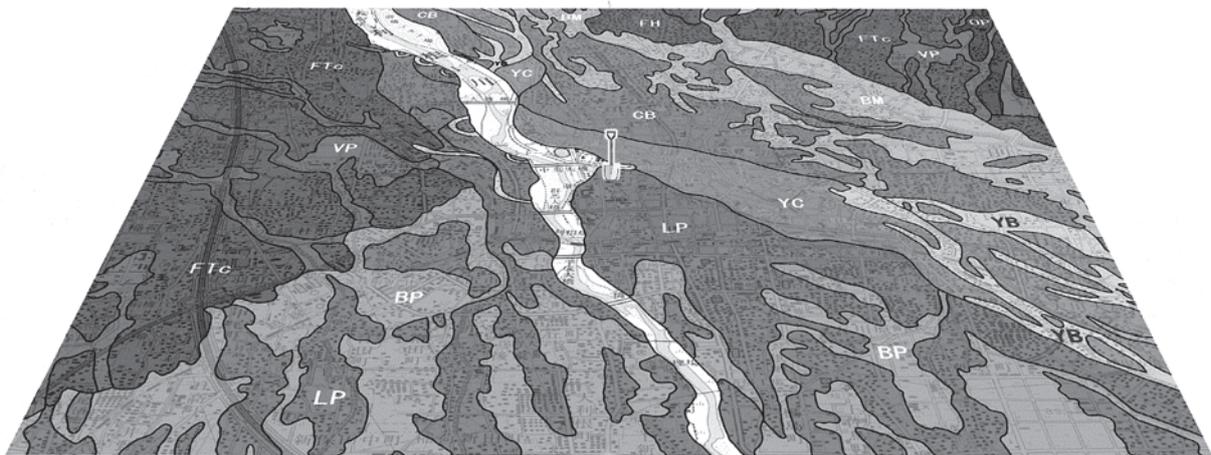
第1節 地理的環境

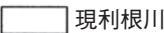
前橋城三の丸遺跡は群馬県の中央やや南寄りに位置し、県庁のある前橋市中心部に在って、前橋地方・家庭裁判所の敷地内に所在している。本遺跡付近は所謂官庁街の一角にあり、群馬県庁が南西200mの至近距離に、また前橋市役所が南方400mに在り、群馬県庁の昭和庁舎や群馬会館といった近代の歴史的建築物も見られる。また官庁の他にも利根川沿いには比較的大きな公園地である前橋公園があり、国道50号線に続く県庁前通り付近には各種のビルやマンションが建ち、一方では周囲には閑静な住宅街も広がっている。

本遺跡は台地上に立地する。本遺跡の東及び南方には極く弱い緩傾斜が見られはするものの概ね平坦な土地が広がっている。一方、西側350m程の所を利根川が南流し、断崖を形成して西岸の一带とを画している。利根川は15世紀に入ってから変流を始め17世紀には現在の位置にほぼ移ったと想定されている河川だが、元々は本遺跡の北西で流路を東に転じていた。本遺跡の北側300m程からは本遺跡の

北側500m程に東流する広瀬川に向かって土地が低くなっているが、これは旧利根川の名残であり、この低地部分は400～500m幅で東方に伸びている。

ところで本遺跡が乗る台地は凡そ2.5万年前頃に形成された浅間山起源の前橋台地である。前橋台地は前橋砂礫層上に形成された扇状地形で、本遺跡付近では15m程の層厚を測るものである。前橋台地は扇状地(BP)と後背湿地(LP)に分けられるが、本遺跡は前者に乗っている。また本遺跡の北東には赤城山(火山)、北西には榛名山(火山)という何れも更新世に形成された火山があるが、本遺跡に近いその裾部には扇状地(FTc)や谷底平野・後背湿地(VP)が形成され、赤城山麓には大胡火砕流堆積面(OP)も見られる。また上述の旧利根川の流路と赤城山の間には広瀬桃ノ木低地帯が在り、完新世に形成された河成段丘の旧中州(YC)や後背湿地(BM)、旧利根川が形成した広瀬川低地帯の旧中州(YC)や後背湿地(YB)を見ることができる。



OP 大胡火砕流堆積面	LP 前橋・伊勢崎台地の後背湿地	YC 広瀬川低地帯の旧中州
FTc 扇状地	FH 扇状地	YB 広瀬川低地帯の後背湿地
VP 谷底平野・後背湿地	CB 河成段丘(旧中州)	 現利根川
BP 前橋・伊勢崎台地の扇状地	BM 河成段丘(後背湿地)	

第5図 前橋城三の丸遺跡周辺の地理的環境図

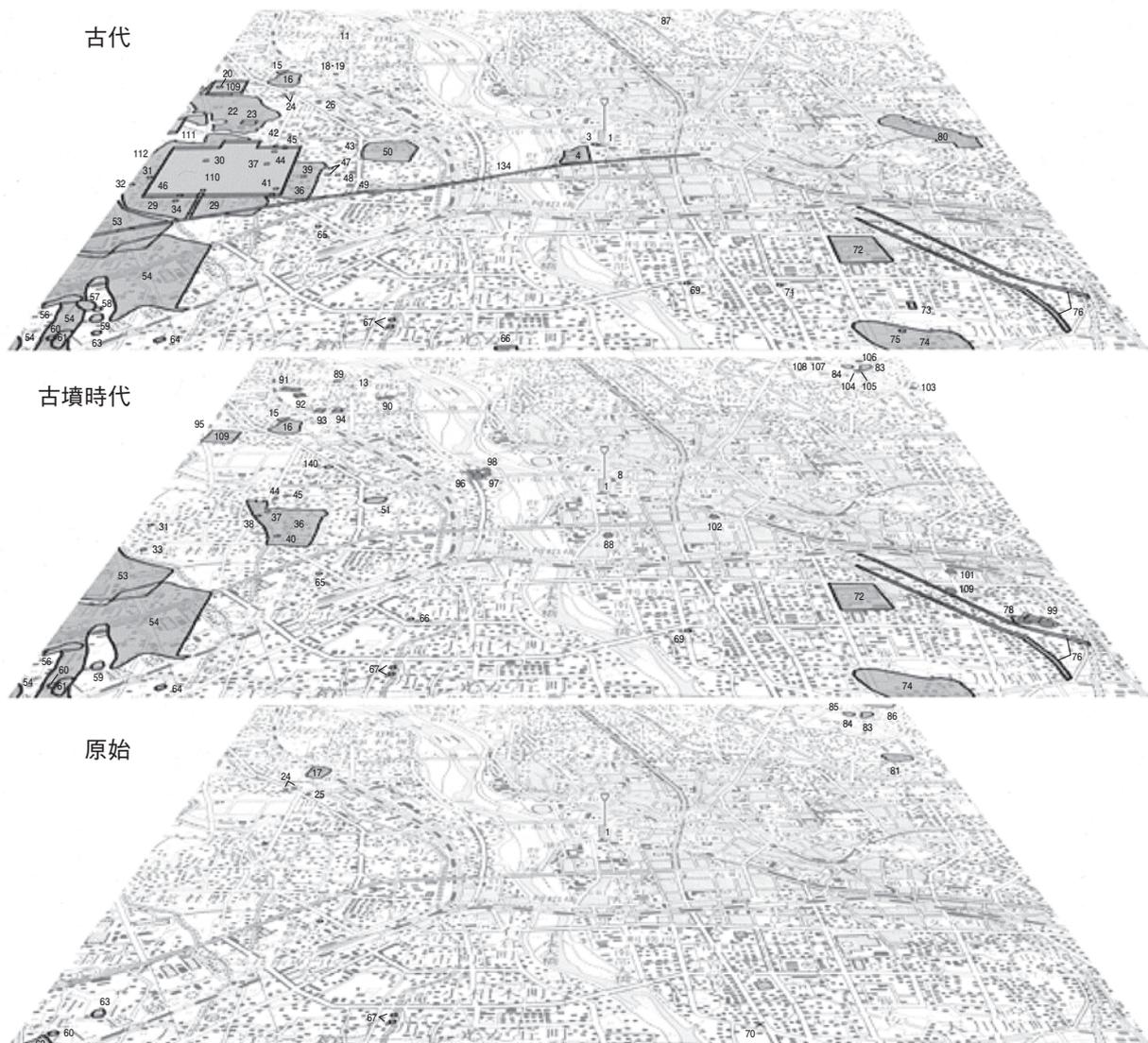
第2節 歴史的環境

第6図の1・2は本遺跡を中心に11.1482km四方の遺跡分布状況を5時期に分けて示したものである。全体として中世まで利根川の流路であった広瀬川低地帯に遺跡の分布が少なく、調査例が少ない本遺跡南部の前橋台地上にも遺跡の分布は少ない。

さて図示した範囲で旧石器時代の遺跡の分布は知られていない。また縄文時代の遺跡は赤城山麓・榛名山麓及びこれに続く地域に分布が見られる。弥生時代の遺跡は南西隅の国指定史跡日高遺跡(62)周辺地域に集落や水田遺跡の分布が見られる。

古墳時代の遺跡は分布域を広げている。古墳は二子山古墳(99)など旧利根川右岸沿いに見られるが、本遺跡の西側から北西に掛けては6～7世紀造営の総社古墳群があり、前方後円墳の王山古墳(96)・二子山古墳(91)、方墳の愛宕山古墳(92)、宝塔山古墳(93)、蛇穴山古墳(94)の大型古墳が見られる。

古代の遺跡の分布も広範囲に及ぶが、特に本遺跡西部は古代上野国の中心部に遺跡も多く、上野国府(112)、上野国分寺、同尼寺(111)、山王廃寺(109)があり、推定東山道(134)も見られる。



第6図の1 遺跡分布図(その1 原始～古代)

第2章 遺跡を取り巻く環境



- 1 前橋城三ノ丸遺跡 2 厩橋城、前橋城 3 前橋城三ノ丸遺跡 4 前橋城遺跡 5 前橋城水曲輪遺跡 6 前橋城車橋門 7 前橋城郡代町遺跡 8 前橋城北郭 9 前橋城水曲輪内遺跡 10 厩橋城下之城 11 若宮遺跡 12 稲荷山遺跡 13 大小路山遺跡 14 城川遺跡 15 村東遺跡 16 大屋敷遺跡 17 昌楽寺廻村東遺跡 18 野馬塚道東遺跡 19 稲荷塚道東遺跡 20 山王廃寺 21 北原分中塚 22 総社稲荷塚大道西遺跡 23 稲荷塚大道北遺跡 24 昌楽寺廻向遺跡 25 産業道路東遺跡 26 稲荷山北遺跡 27 鎌倉室町 No.16 遺跡 他 28 東国分元屋敷遺跡 他 29 上野国府跡 30 国府蒼海城跡 31 屋敷遺跡 32 草作遺跡 33 染谷川遺跡 34 天神遺跡 35 国府・蒼海城跡 36 元総社神明遺跡 37 屋敷Ⅱ遺跡 38 元総社寺田遺跡 39 大友屋敷遺跡 40 寺田遺跡 41 神明東遺跡 42 閑泉明神北遺跡 43 閑泉樋北遺跡 44 閑泉樋遺跡 45 閑泉樋南遺跡 46 上野国府跡 47 堰越遺跡 48 大友屋敷遺跡 49 樋越遺跡 50 大友城 51 長尾氏遺跡 52 大友遺跡 53 弥勒遺跡 54 日高5遺跡 55 金尾城 56 05H01 遺跡 57 05H02 遺跡 58 05C05 遺跡 59 05H03 遺跡 60 05C03 遺跡 61 05H04 遺跡 62 日高遺跡 63 05C06 遺跡 64 05H09 遺跡 65 元総社稲葉遺跡 66 赤烏遺跡 67 箱田市前遺跡 68 箱田上境遺跡 69 生川遺跡 70 南京安寺遺跡 71 西天神遺跡 72 文京町 No.1 遺跡 73 天川原東ノ下遺跡 74 六供遺跡群 75 六供下堂木遺跡 76 女堀 77 二子山前遺跡 78 県立文書館遺跡 79 寄居遺跡 80 三俣城之内遺跡 81 上沖五反田遺跡 82 寄居遺跡 83 西堀遺跡 84 南灰俵遺跡 85 南灰俵遺跡 86 南田之口遺跡 87 青柳寄居遺跡 88 龍海院古墳 89 稲荷山古墳 90 遠見山古墳 91 総社二子山古墳 92 総社愛宕山古墳 93 宝塔山古墳 94 蛇穴山古墳 95 作兵衛塚 96 王山古墳 97 大山陪塚(其一) 98 大山陪塚(其二) 99 二子山古墳 100 カロウト山古墳 101 不二山古墳 102 前橋市9号墳 103 上沖上ノ山古墳 104 南橋1号墳 105 南橋2号墳 106 南橋4号墳 107 南橋9号墳 108 南橋11号墳 109 山王廃寺 110 上野国分尼寺 111 上野国府 112 欽禅順喜和尚経塚 113 元景寺経塚 114 勝山城 115 村山城 116 大友城 117 石倉城 118 蒼海城 119 金尾城 120 中尾城 121 天川寄居 122 萩の城 123 清王寺の寄居 124 三俣の寄居 125 三俣城 126 時沢の遠堀 127 青柳寄居 128 総社城 129 八日市場城 130 龍海院酒井彈正墓地 131 力田遺愛碑 132 東山道(国府道) 133 あづま道 134 国府道 135 沼田往還 136 佐渡奉行道 137 古河街道 138 稲荷山古墳

第6図の2 遺跡分布図(その2 中世・近世)

中世の遺跡分布の特徴は集落・生産遺跡の他に城館址(山崎一氏の縄張り図をトレースして示した。)の分布が広く見られることである。このうち城郭では上野守護代総社長尾氏の本拠である蒼海城(119)、その挟撃のため長野氏が築いた厩橋城(2、当初の縄張りを想定して図示)、厩橋城への付城として武田信玄が築いた石倉城(118)がある。また主要街道のあづま道(135)、国府道(136)も見られる。

近世では厩橋城を改築した前橋藩の前橋城(4)があり、その東には街路に沿って城下町が形成されるが、その南北に武家屋敷が散在して見られる。また近世前葉の総社藩由来の遺跡では、当初の城であった八日市場城(131)、新たに築城した総社城(130)があり、天狗岩用水の開削などを行った領主秋元氏を領民が顕彰した力田遺愛碑(133)が遺る。この他佐渡奉行道(138)等幾つかの街道も在る。

第2節 1面の遺構と遺物

1 1面の調査と概要

1面は幕末築城の再築前橋城関連の遺構確認面であったが、引き続き近代にも使用された面であったため、近代建物の基礎なども多く表出した。また2面の調査進行に伴って、地点によっては近代建物建設時に大々的な土壌の入れ替えのあったことも確認された。また前述のように建物解体時に掘削された大型のごみ穴も散見され、近世遺構の遺存状態は不良であった。

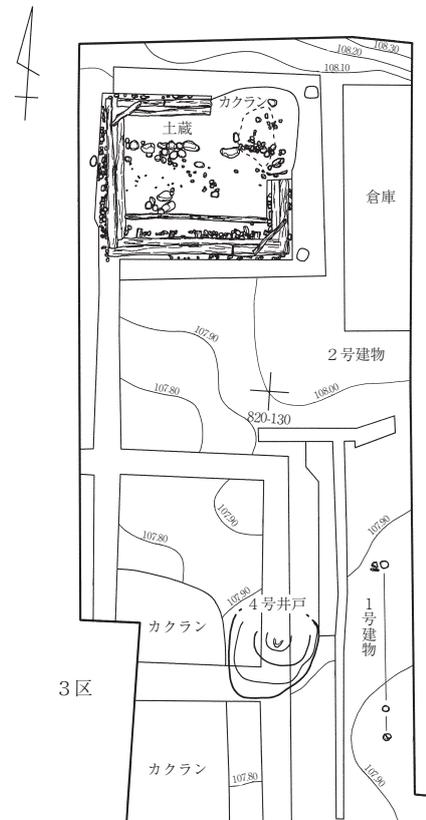
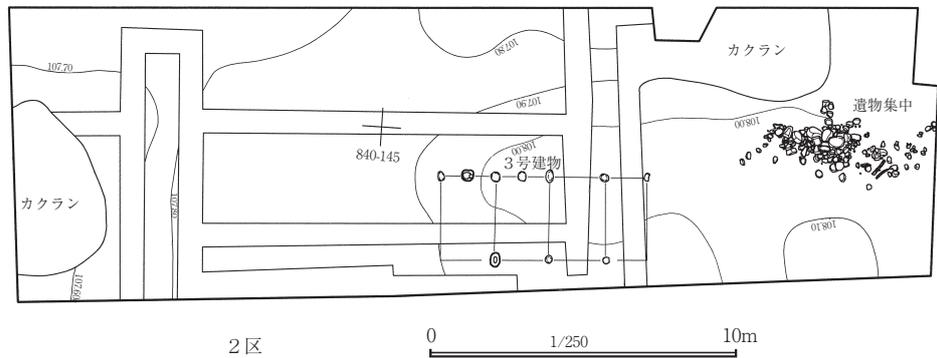
ところで結果として近代と判断されることとなったのではあるが、1面の調査では近代遺構群に少なからず翻弄されることとなった。例え

ば2区北部の附属舎の軸方向や北側輪郭が先行する再築前橋城の建物のそれと近似していたこと、初め一部だけ現れた附属舎西寄りの基礎上位砂礫層が、前橋市教育委員会が古地図と合わせた（前橋市観光協会1989）近世前期前橋城内の水路位置とほぼ一致したこと、3区北寄りの土蔵に係わる配石の走行のうち一筋が東に接する煉瓦建物基礎と一致し、一筋が一致しなかったため、後者が近世に遡ると見られたことから当初近世遺構と疑ったのである。しかしこれらは前橋地方裁判所より御提供頂いた旧庁舎の建物配置図との照合によって近代の所産と確認されたのであるが、2区東端部に現れた砂利道は当該配置図との照合でも近世の所産と認識されたものの、その後走行が変ずることが分って近代の所産と判断できたこともあった。

1面の遺構としては礎石建ちの建物2棟、井戸1基があった。このうち井戸（4号井戸）は2面で調査された5号溝（堀）の南端部にあり、調査の都合

上最終段階になって確認された遺構である。

また2面の調査に入ってから確認された、何れも近代の2区東部の遺物集中域と3区の土蔵の基礎部分からの出土遺物には近世に遡るものも多く見られた。近世に近い時期の遺物であるため、無論近代に入ってからの使用も考慮されたが、再築前橋城時代使用と推察されるものも見られたことから報告に加えることとした。



第8図 1面全体図

2 1号建物 (第9図 PL1)

概要 本建物は3区南東部に所在するが、1列分の一部を確認できたに過ぎなかった。

本建物は位置的に近代の検察庁分室建物の可能性も有するが、礎石が3区近代の煉瓦建物や渡廊下のそれより一回り小さいことなどから近代に属さないものと現状では判断している。

本建物は後述するように礎石に地形も施さない簡便な基礎構造であるため、母屋のようなものではなく小屋等の簡易な建物と考慮される。

遺物 日本型の軒丸瓦が得られた。

時代 出土遺物も見られたが、上記の礎石規模と確認層位から近世末期の所産と認識される。

規模 全長：6.0 m

構造 本建物では3箇所の礎石が確認された遺構であるが、礎石列1列の一部を認めたに過ぎないため、全容は詳らかにできなかった。

礎石は径20～25cmの河床礫を用い、断面観察を行った礎石2では漆喰や炭が礫際に入るものの、何れも地形は施されずに、造成面に埋め込むように直に設置されている。尚、調査時点の所見としては礎石に柱の当り痕等は認められず、下位層の塑性変形も認められない。

近接する南側2箇所の礎石1・2の柱間は91cm、折中尺の半間であり、礎石2と北側の礎石3との心々間距離は475cm、同じく3間半を25cm程上回るものであった。

3 2号建物 (第10・11図 PL2・5)

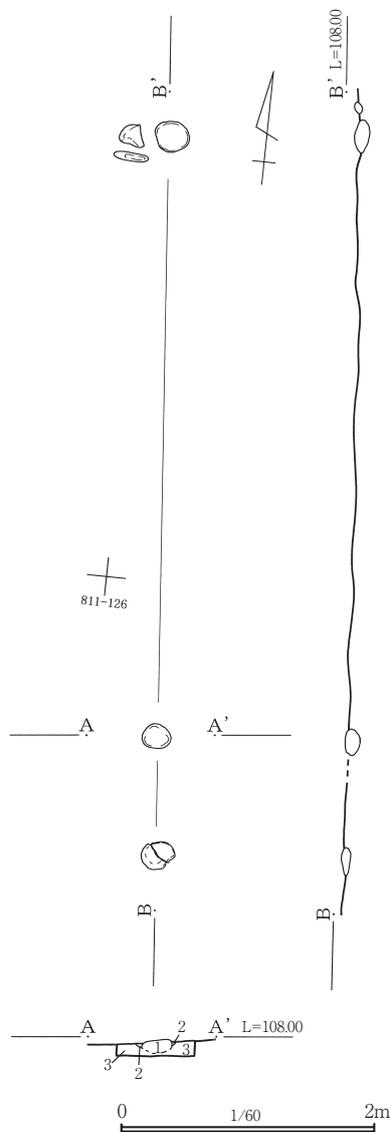
概要 本建物は2区中南部に位置する。2列の礎石列遺構として調査した。南に伸びる可能性があり、東西方向には遠心するものと想定されるもので、全体を確認したものではなかった。

本建物は裁判所旧庁舎のうち附属舎の基礎に並行して在ったが、礎石が1号建物と同様に旧庁舎の礎石に対して小さいこと、大規模な附属舎の基礎に隣接していて附属舎に使用されたとは考えにくいことから、異なる時期のものとして判断した。尚、三の丸御殿建物の輪郭図に照らしてその軸方向は一致している。

本建物の種類は明らかでないが、礎石に明確な地形を伴わないことから簡易な建物であったと思慮される。

遺物 本建物には7個の礎石(3～9)が遺り、こも編み石(1)、敲石(2)も見られた。

時期 上記の礎石の規模と確認層位か



(礎石掘り方覆土)

1：炭と灰白色漆喰(10YR8/1)の混土。

2：黒色土(7.5YR2/1)：粘性やや有り、縮まる。

(近世整地層)

3：黒褐色土(10YR3/1)：何れも径4mm以下の漆喰・炭化物粒・橙色土粒若干混入。粘性ややあり、縮まる。

第9図 1号建物

第3章 発見された遺構と遺物

ら推して、現時点では近世末期の所産と認識している。

規模 全体：7.0 × 3.2m

建物規模：675 × 276cm

桁間：① 176 ~ 189cm (平均：180.5cm)

② 84 ~ 96cm (平均：90.5cm)

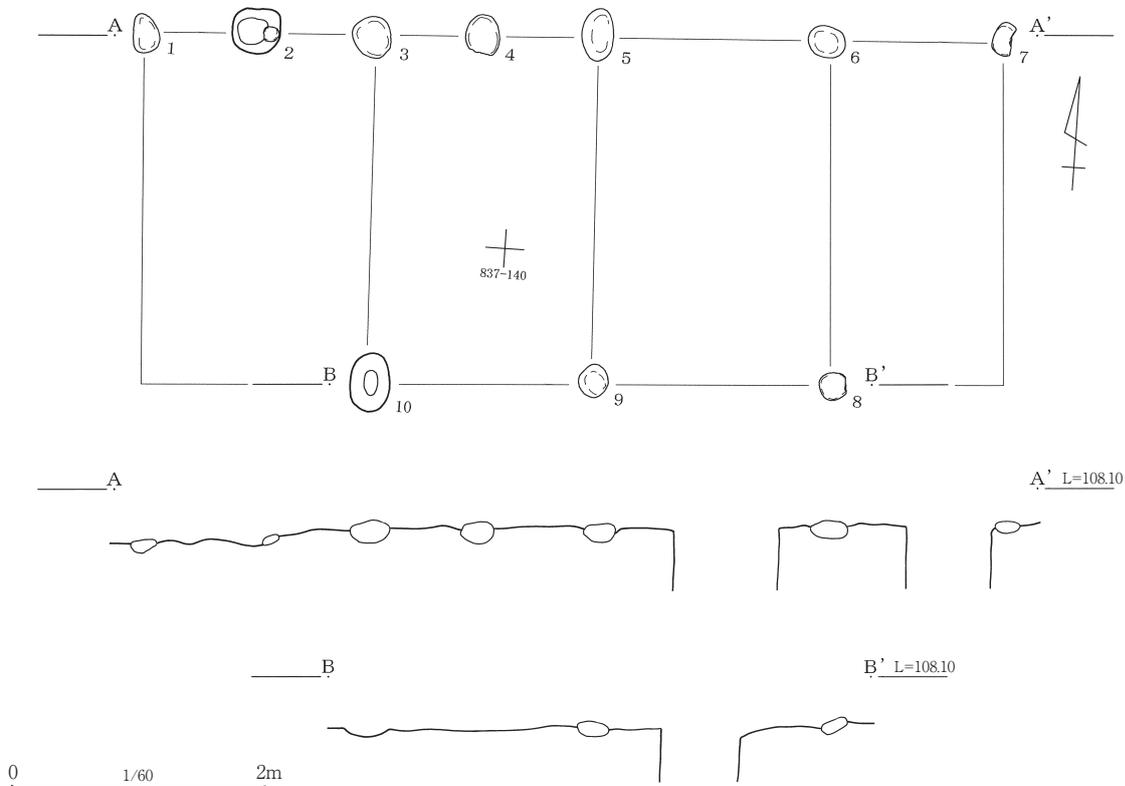
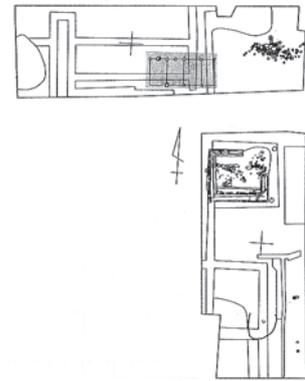
梁間：270 ~ 272cm (平均：271.3cm)

構造 本建物は東西に棟方向を有すると見られる建物跡で北列に礎石6個と礎石の抜き取り痕1箇所、南列に礎石2個と礎石の抜き取り痕1箇所が残る南北2列の礎石列として見られ、梁間1間型の建物として把握されている。しかし本建物は更に東西に延伸し、南側に広がる可能性もあって、全容を把握することはできなかった。

礎石は礎石1と礎石3の間に在る抜き取り痕の外周に小礫が据えられてはいたが、1号建物と同様に地形は施されず、整地面に埋め込むように直に据えられていたものの、何れの礎石についても埋め込みのための掘削等の痕跡は特に認められなかった。

柱間は桁間では長短の2種類があり、北列西寄りに短いものがまとまって在る。このうち長尺のものは抜き取り痕も含め180.5cm、1間幅、短いものは平均90.5cm、半間幅で、梁間は平均271.3cm、およそ1.5間幅である。従って桁間は折中尺1間を基本として一部半間に礎石を据え、梁間1間半を用いた建物と認識され、確認範囲では4 × 1間の建物ということになる。

また何れの礎石についてもその表面には径8.6 ~ 11.5cm (平均10.1cm)の柱の当たり痕が確認されている。この当たり痕には一部はつり痕が残るものも見られたが、礎石3が円柱の当たり痕である以外は角柱の当たり痕で、太さが概ね3 ~ 4寸の柱材を用いたことが確認されている。



第10図 3号建物

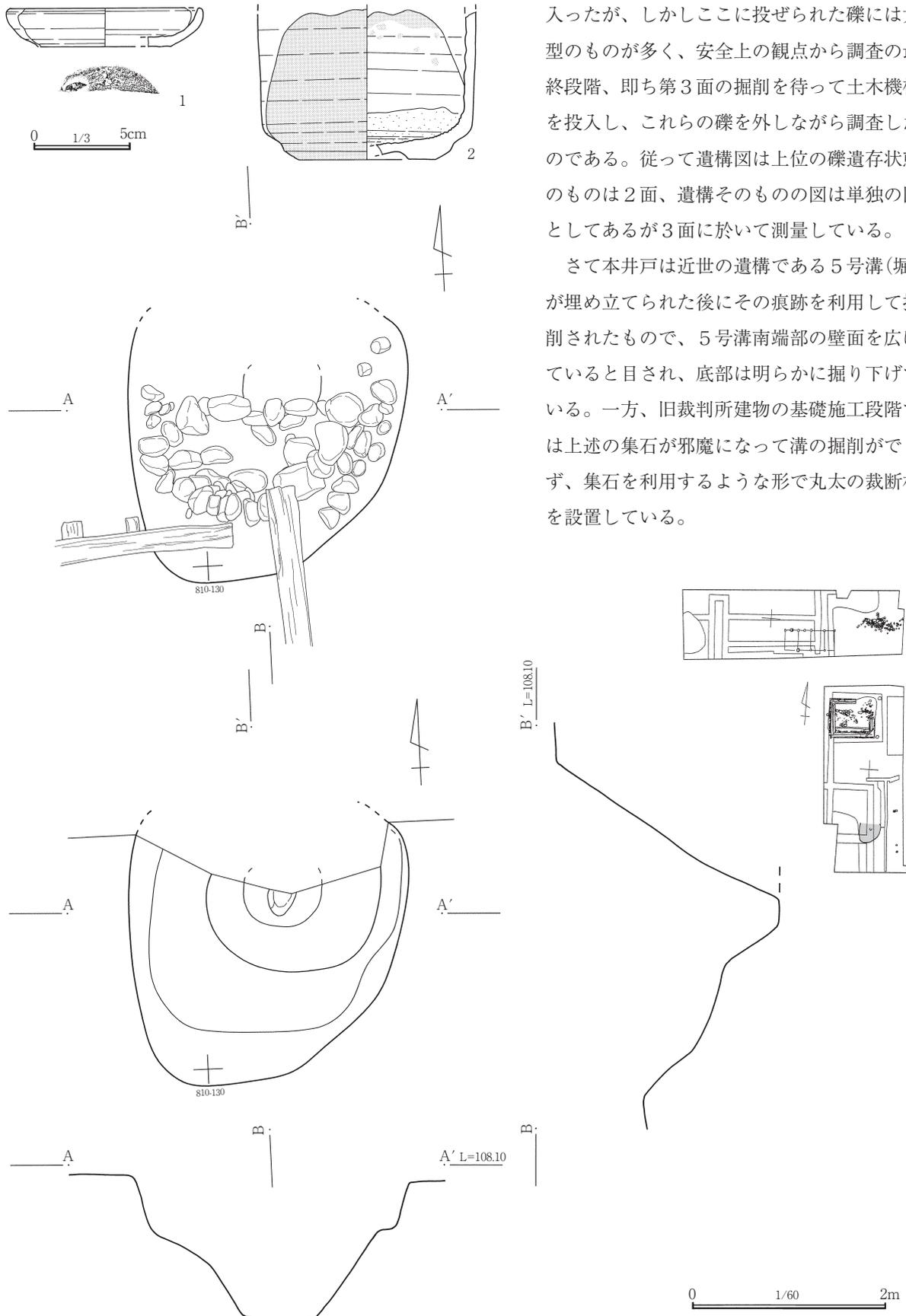
4 4号井戸 (第12～14図 PL3・5・6)

概要 本井戸は3区南部に所在する。本井戸の北側は、3区のやや南寄りに在る下水道の敷設による調査不能区域に入っており、また当該区域が埋土主体のため法面を設けて掘削したため、北寄り1/3程を調査することができなかった。

さて本井戸は当初2面の遺構である4号溝掘削中に、4号溝の東側に集石遺構として確認されたものである。その上面の記録を行った後一部礫の除去に



第11図 3号建物出土遺物及び礎石 (礎石の縮尺は1/8)



入ったが、しかしここに投げられた礫には大型のものが多く、安全上の観点から調査の最終段階、即ち第3面の掘削を待って土木機械を投入し、これらの礫を外しながら調査したのである。従って遺構図は上位の礫遺存状態のものは2面、遺構そのものの図は単独の図としてあるが3面に於いて測量している。

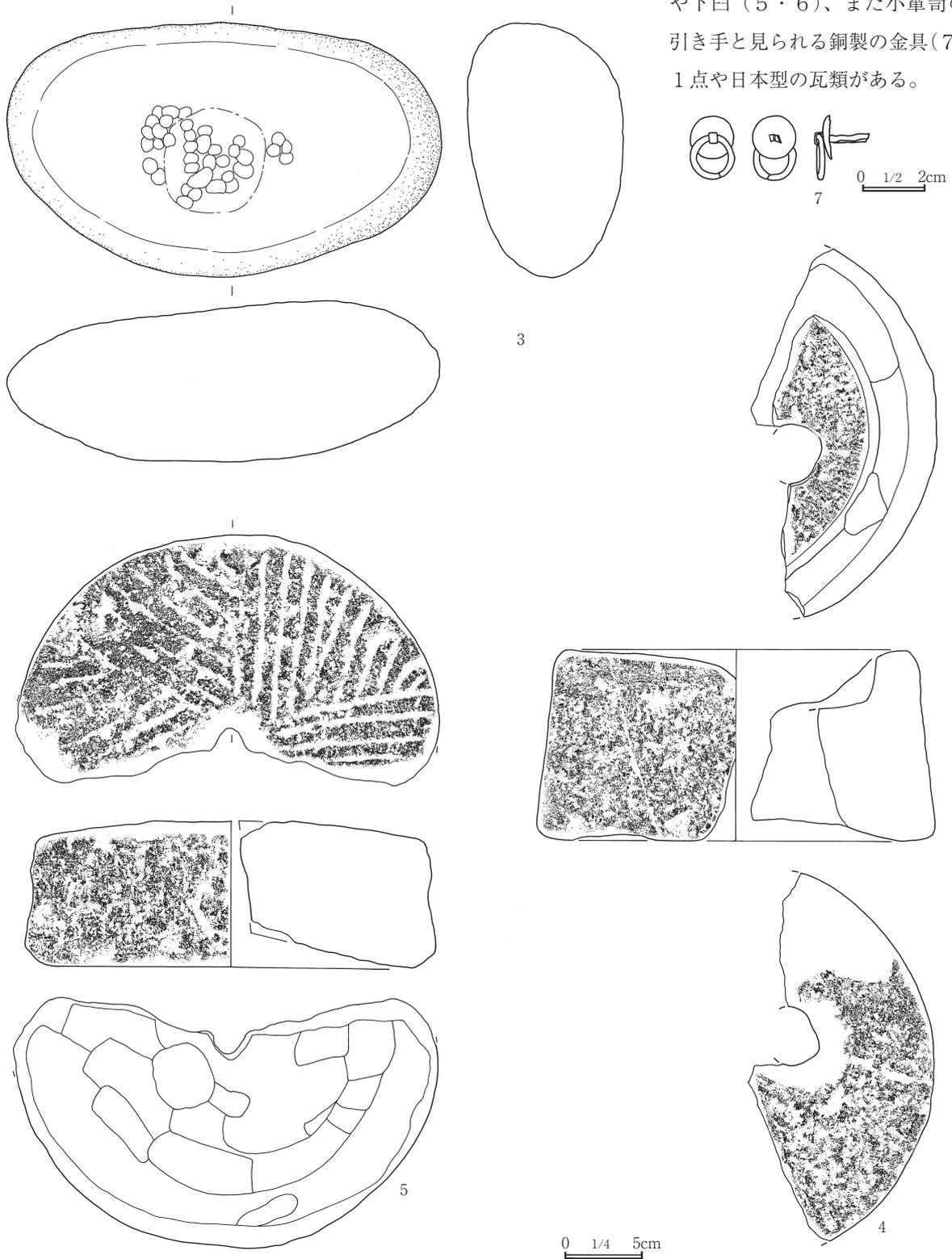
さて本井戸は近世の遺構である5号溝(堀)が埋め立てられた後にその痕跡を利用して掘削されたもので、5号溝南端部の壁面を広げていると目され、底部は明らかに掘り下げている。一方、旧裁判所建物の基礎施工段階では上述の集石が邪魔になって溝の掘削ができず、集石を利用するような形で丸太の裁断材を設置している。

第12図 4号井戸及び出土遺物(その1)

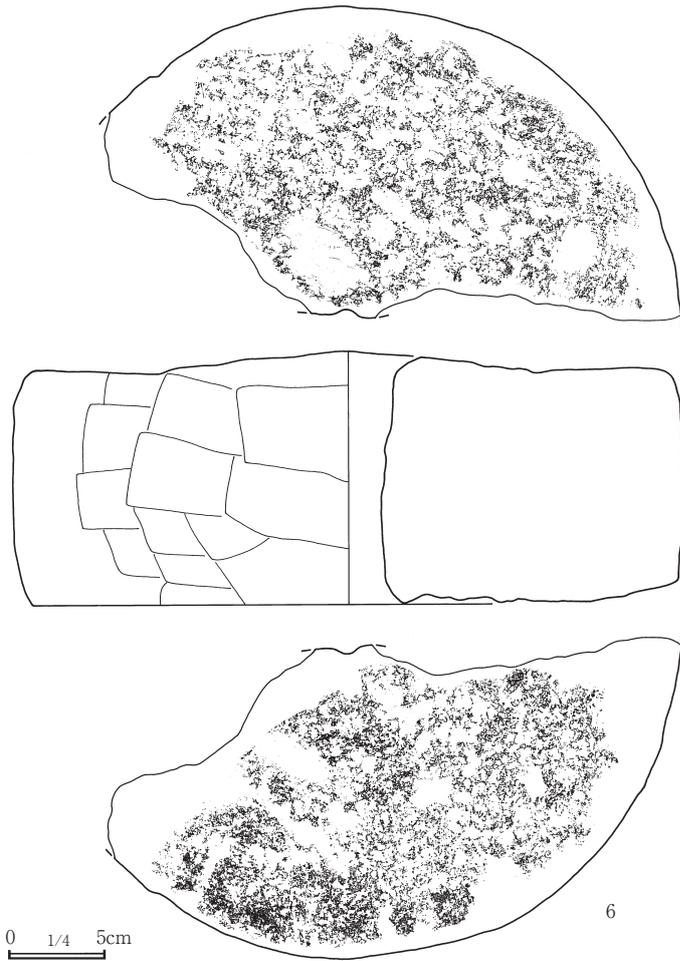
また湧水層は確認できなかったが、隣接する4・5号溝（堀）の覆土中を通水する地下水を後述のように組まれている石組を通して染み込ませ井筒部に

溜めたものを使用したものと思慮される。

遺物 出土遺物にはかわらけ（1）、香炉か火入れと見られる陶器片（2）、礎石（3）、石臼の上臼（4）や下臼（5・6）、また小簞笥の引き手と見られる銅製の金具（7）1点や日本型の瓦類がある。



第13図 4号井戸出土遺物（その2）



第14図 4号井戸出土遺物（その3）

時期 上記の新旧関係及び出土遺物から推して、本井戸は江戸時代後期、周辺地の土地利用に鑑みれば恐らくは再築前橋城時代の所産と把握される。

規模 径：288 × (266) cm

深さ：143cm 底径：80cm

構造 本井戸は途中若干の段差を伴うが、挿鉢型の井戸である。

5号溝（堀）の壁面を切り、堀底を突き抜けて掘削されている。上位の集石の状況と併せて、段差部分に石垣が廻らされていたことが確認される。石垣に使用された礫は人頭大から長径が50、60cmあるようなものまで使用され、大きさによって異なるが、3～4段が積まれていた。

尚、前述のように湧水層は確認できず、あぐり等も形成されていなかった。

5 遺物集中域（明治期廃棄坑）

（第15・16図 P L 3・4・6・7）

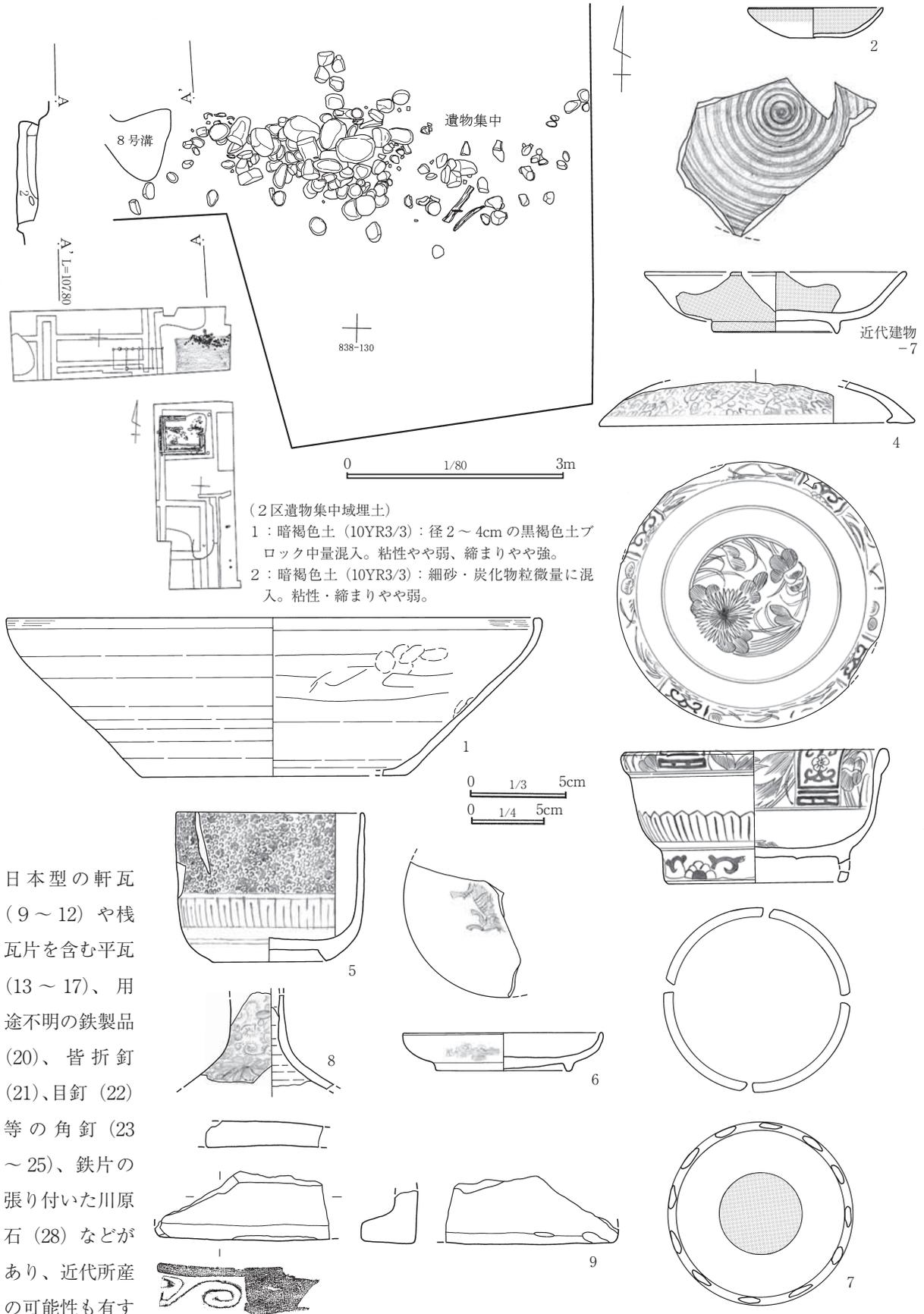
概要 前述のように2区東部1面では砂利道を検出した。2面の掘削段階で、この砂利道の下位層にあつては東部南半が大きく削平されていることを確認した。この削平の範囲は調査区外にも広がるため全体は確認できなかったが、第15図に示したように削平面北部西寄りを中心に大型のものを含む川原石のまとまりが在り、その周辺部に近世陶磁器が分布し、また少量ではあるが木材片も出土したのである。

尚、調査に当たって近代所産のものは調査対象外になっていたため、出土遺物も大型のものを除いて図化せず、取り上げも一括とした。第15図に示したのは整理段階で航空写真から起こし直したもので、個々の遺物の出土地点は記載化は不十分である。

当初この削平範囲と出土遺物は近世の所産と認識し、礫も石垣を崩したものと見ていたが、ガラスやボタン等が出土するに至って近代に埋められたものであることが判明した。

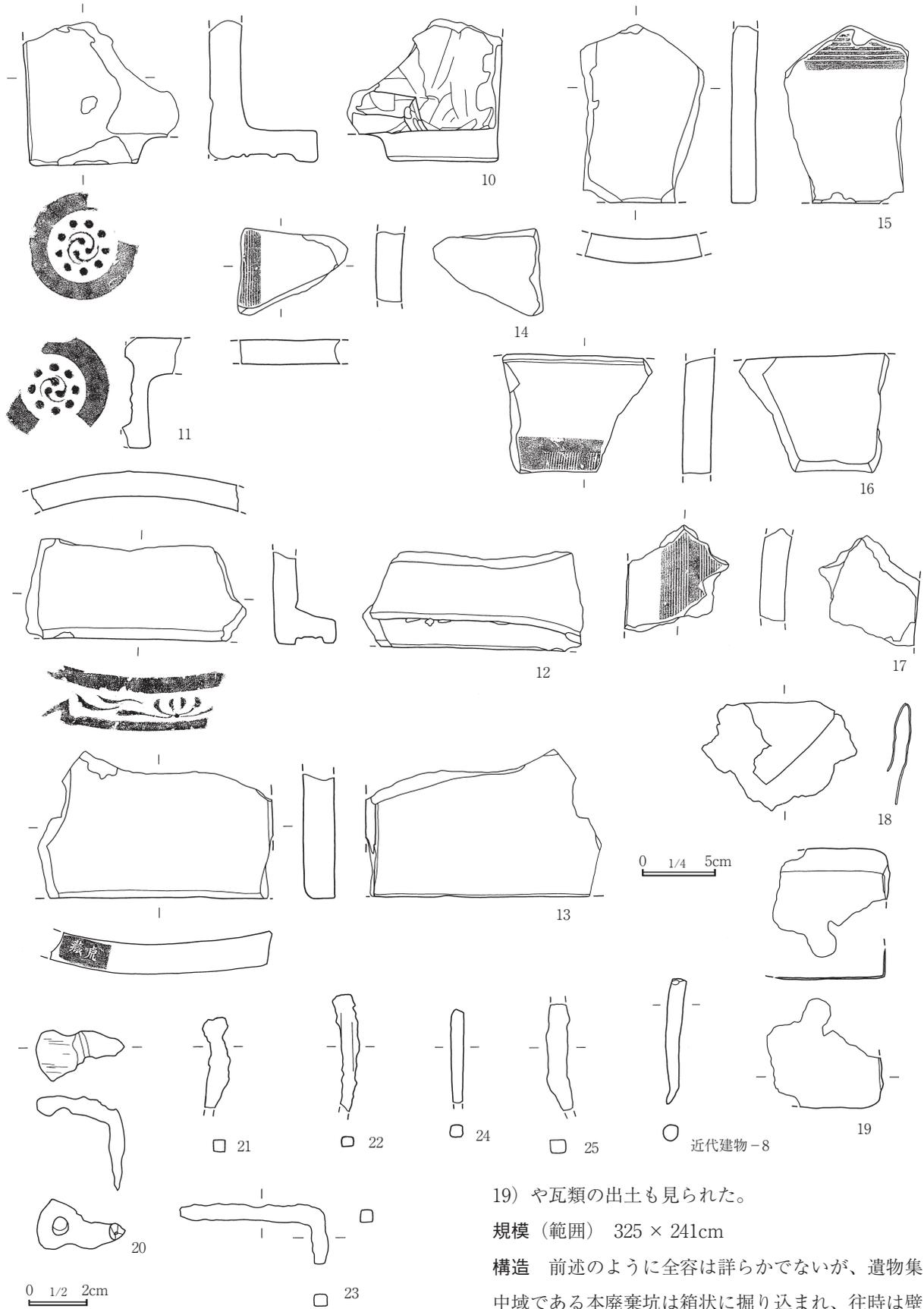
更にこの掘り込みは位置的に裁判所旧庁舎や現庁舎に直接伴うものではなく、一方新庁舎建設時の廃材投棄坑に見られるような煉瓦等が全く見られないことから、調査段階では旧庁舎建設時に於ける廃材等の投棄坑であろうと判断したのである。しかし整った掘削形態や後述の2面8号溝の存在から、寧ろ近世に在った池等の遺構を、旧庁舎建設に伴って埋め立てたものである可能性が思慮される。

遺物 本遺物集中域からの出土遺物は掘削部北縁近くやや西寄りに集中している。出土遺物には軟質陶器鍋（1）や磁器蓋物（5）、陶磁器片やガラス片、ボタン等の近代所産のものも見られたが、近世の所産の遺物が過半を占め、陶器の灯明皿（2）、磁器の蓋（4）・皿（6）・盃洗（7）・壺（8）、何れも



日本型の軒瓦 (9~12) や棧瓦片を含む平瓦 (13~17)、用途不明の鉄製品 (20)、皆折釘 (21)、目釘 (22) 等の角釘 (23~25)、鉄片の張り付いた川原石 (28) などがあり、近代所産の可能性も有する鉄板2 (18・

第15図 2区遺物集中域 (明治期廃棄坑) と出土遺物 (その1、含周辺域)

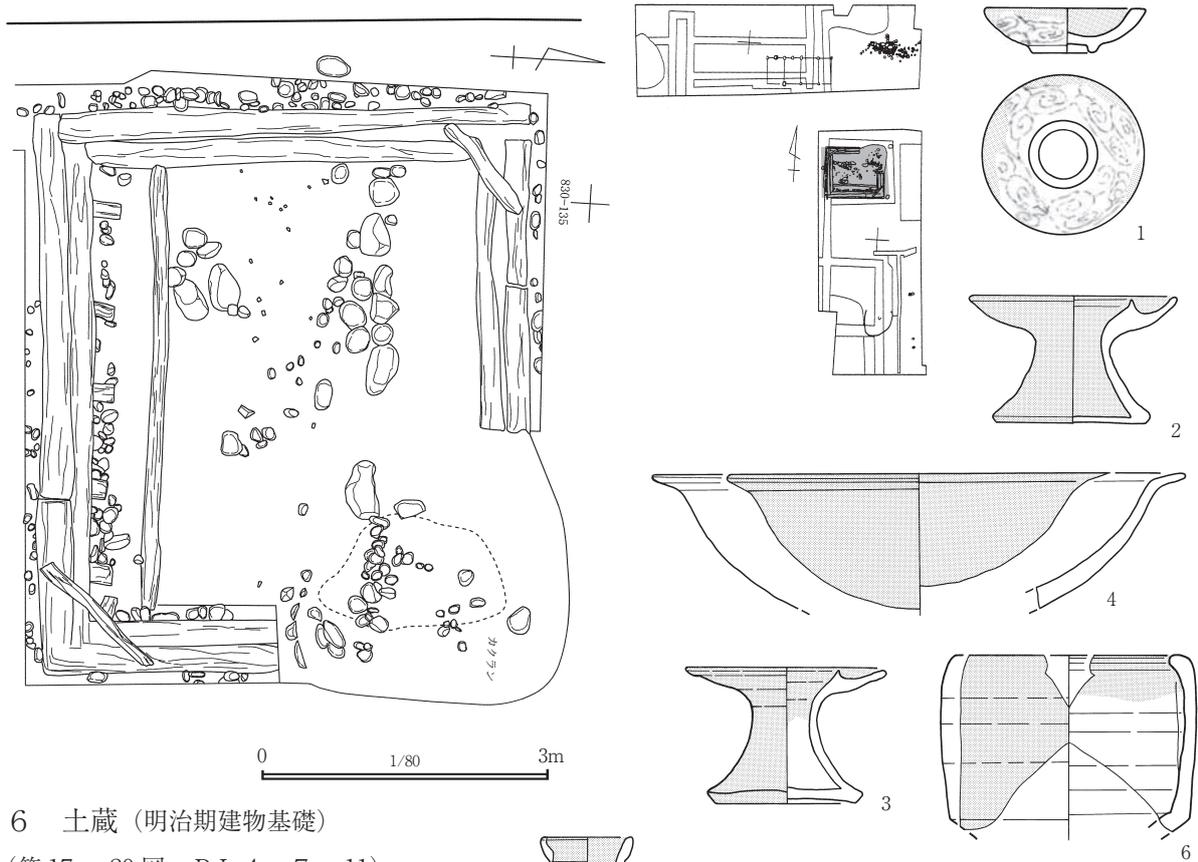


第16図 2区遺物集中域出土遺物（その2、含周辺域）

19) や瓦類の出土も見られた。

規模（範囲） 325 × 241cm

構造 前述のように全容は詳らかでないが、遺物集中域である本廃棄坑は箱状に掘り込まれ、往時は壁面を石組みで補強していた可能性が窺われる。



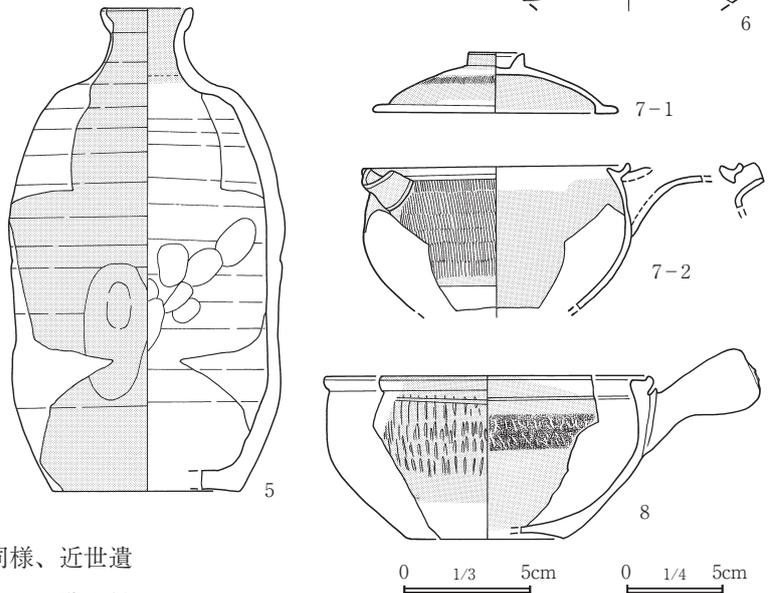
6 土蔵（明治期建物基礎）

（第17～20図 PL4・7～11）

概要 3区には裁判所旧庁舎の土蔵基礎が残っていた。この基礎の中程の掘り込みには砂が投入されており、この砂層中から多くの陶磁器の他、金属製品や竹などが出土した。この掘り込みの出土遺物には近世のものも多く、北側の石列と併せて近世に遡る可能性を考えた。その可能性は残るものの、概ね近代の遺構と判断した。

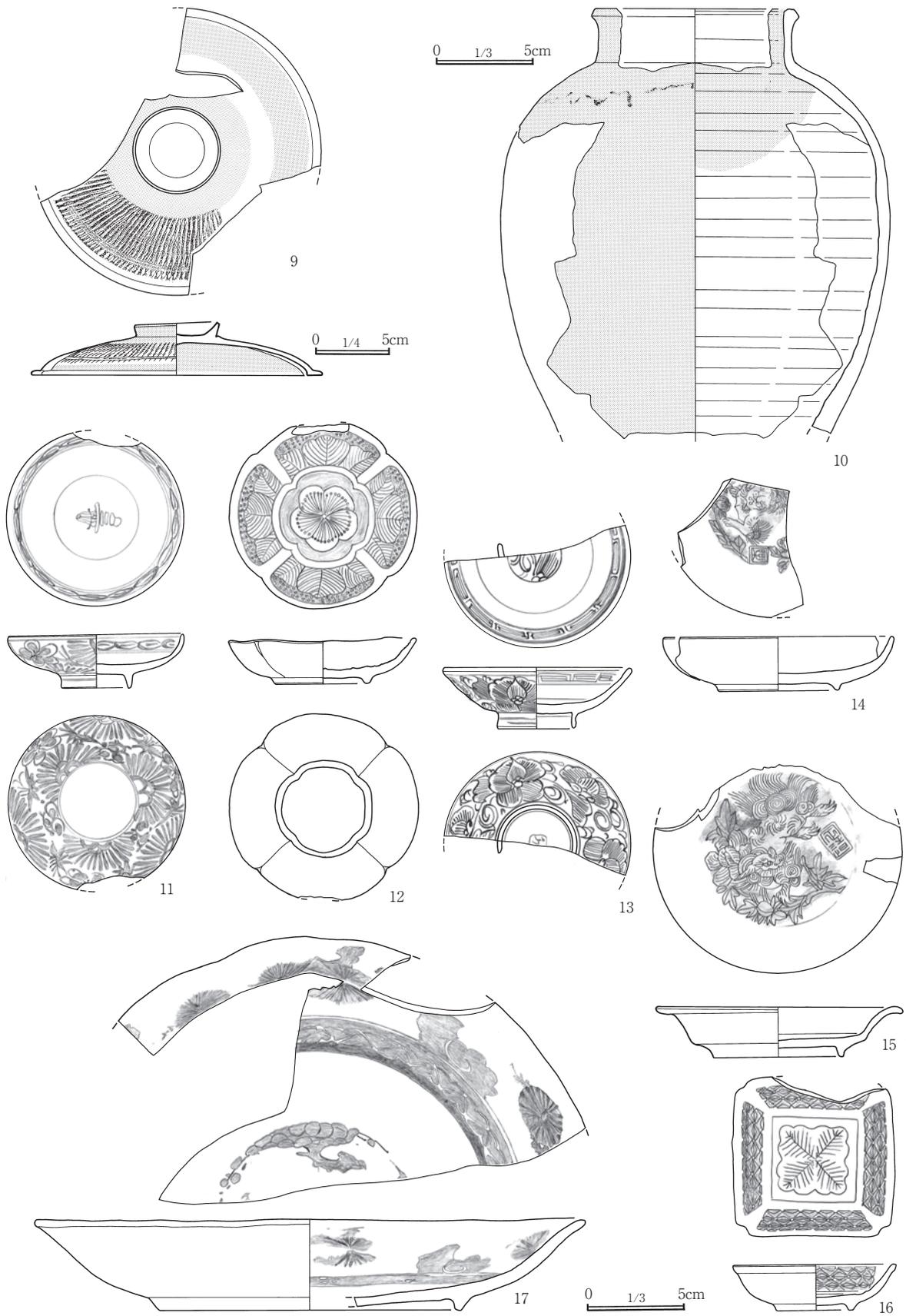
このため本遺構も2区の遺物集中域同様、近世遺構と一括で図化は行ったが、図化は大きめの礫や材木に留め、特に陶磁器類は図化しなかった。第17図の遺構平面図は最下層に近い段階のもので、整理段階で航空写真から起こし直したものである。遺物そのものも一括で取り上げたため、多くの遺物の出土地点は特定できない状態にある。

遺物 本土蔵からは磁器の碗(18)や湯呑茶碗(22)、石版の破片(40)、陶磁器片(42～50)やガラス片

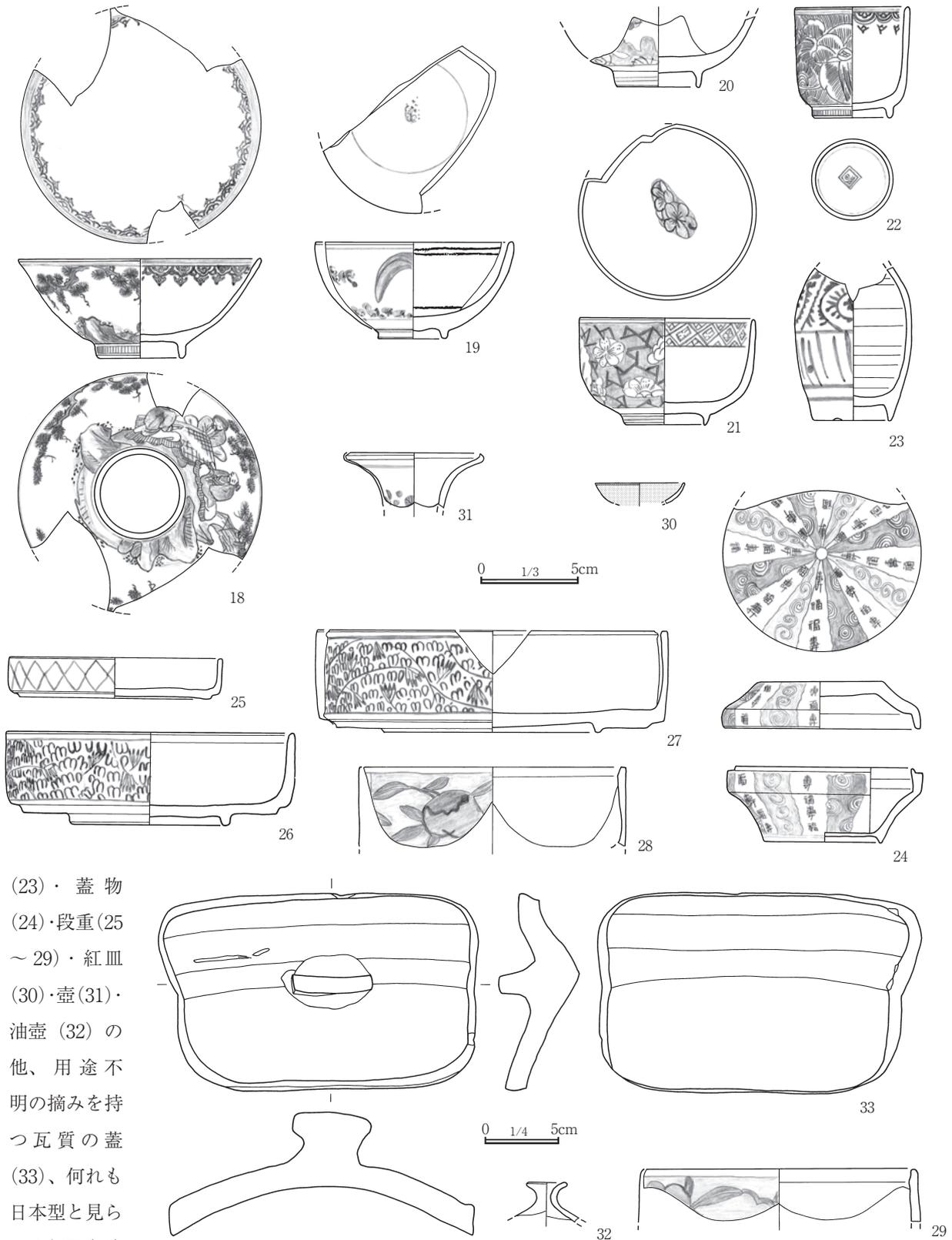


第17図 3区土蔵基礎と出土遺物（その1）

(51～56)、金具(57・58)、針金(59・60)、ボタン、種子(61)、木片(62)といった明治期の遺物と共に近世所産と認められる陶器の紅皿(1)、灯明受台(2・3)・鉢(4)・徳利(5)・火入れと思われるもの(6)・雪平鍋と蓋(7)・雪平鍋(8)、土鍋蓋(9)・壺(10)、磁器の皿(11～17)・碗(19～21)・御神酒徳利



第18図 3区土蔵基礎出土遺物（その2）

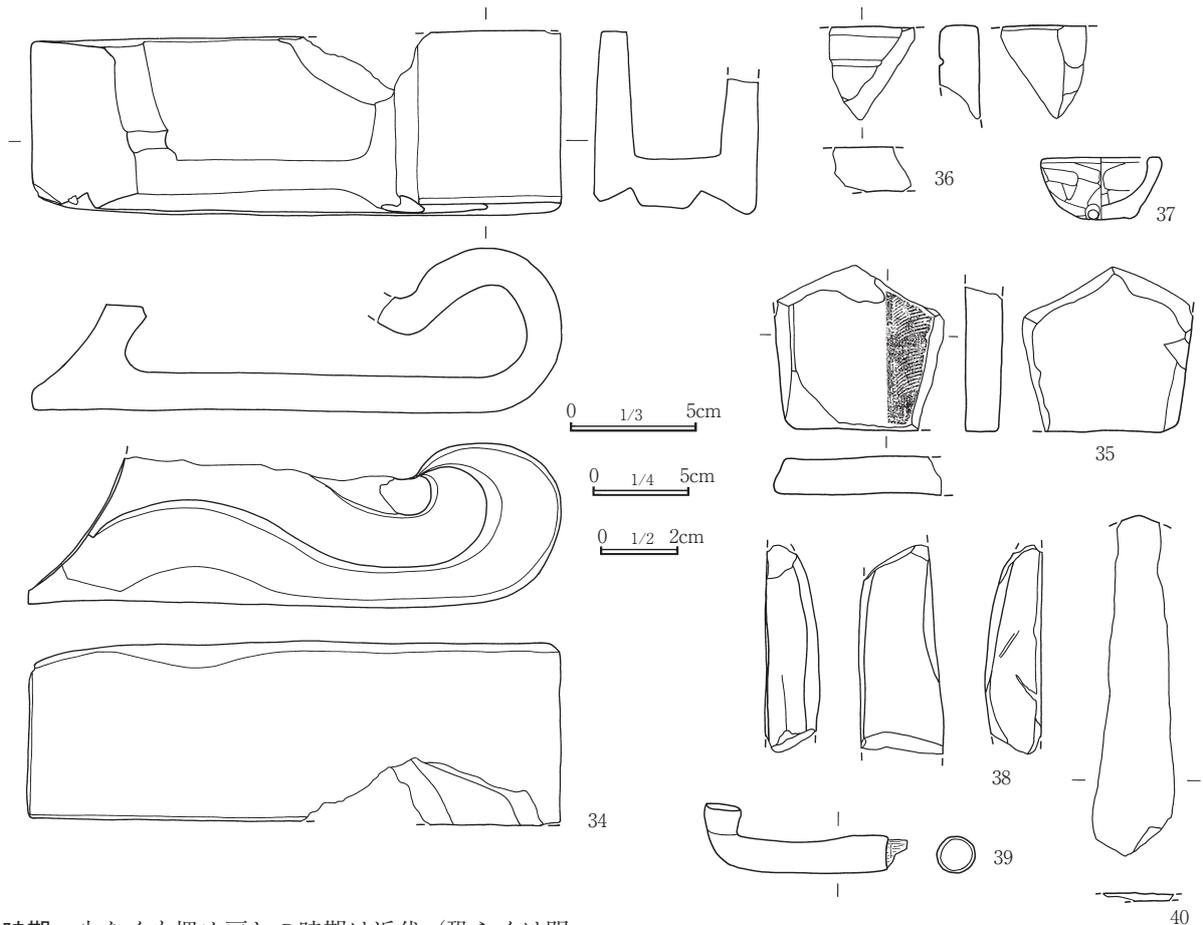


(23)・蓋物
 (24)・段重(25
 ~ 29)・紅皿
 (30)・壺(31)・
 油壺 (32) の
 他、用途不
 明の摘みを持
 つ瓦質の蓋
 (33)、何れも
 日本型と見ら
 れる軒瓦(34)
 や平瓦 (35)・

第19図 3区土蔵基礎出土遺物(その3)

36)、ミニチュア土器(37)や砥石(38)、煙管の雁首(39)の出土が見られた。この他、時期は特定で

きなかったが、サザエの蓋(41)等の自然遺物の出土も見られた。



第20図 3区土蔵基礎出土遺物（その4）

時期 少なくとも埋め戻しの時期は近代（恐らくは明治13年頃）であるが、図示した遺物の多くは近世後期以降の所産である。

構造 近世遺物を出土した本土蔵は明治時代の所産なのでその構造は特に述べないが、近世所産の可能性を有する以下について述べておきたい。

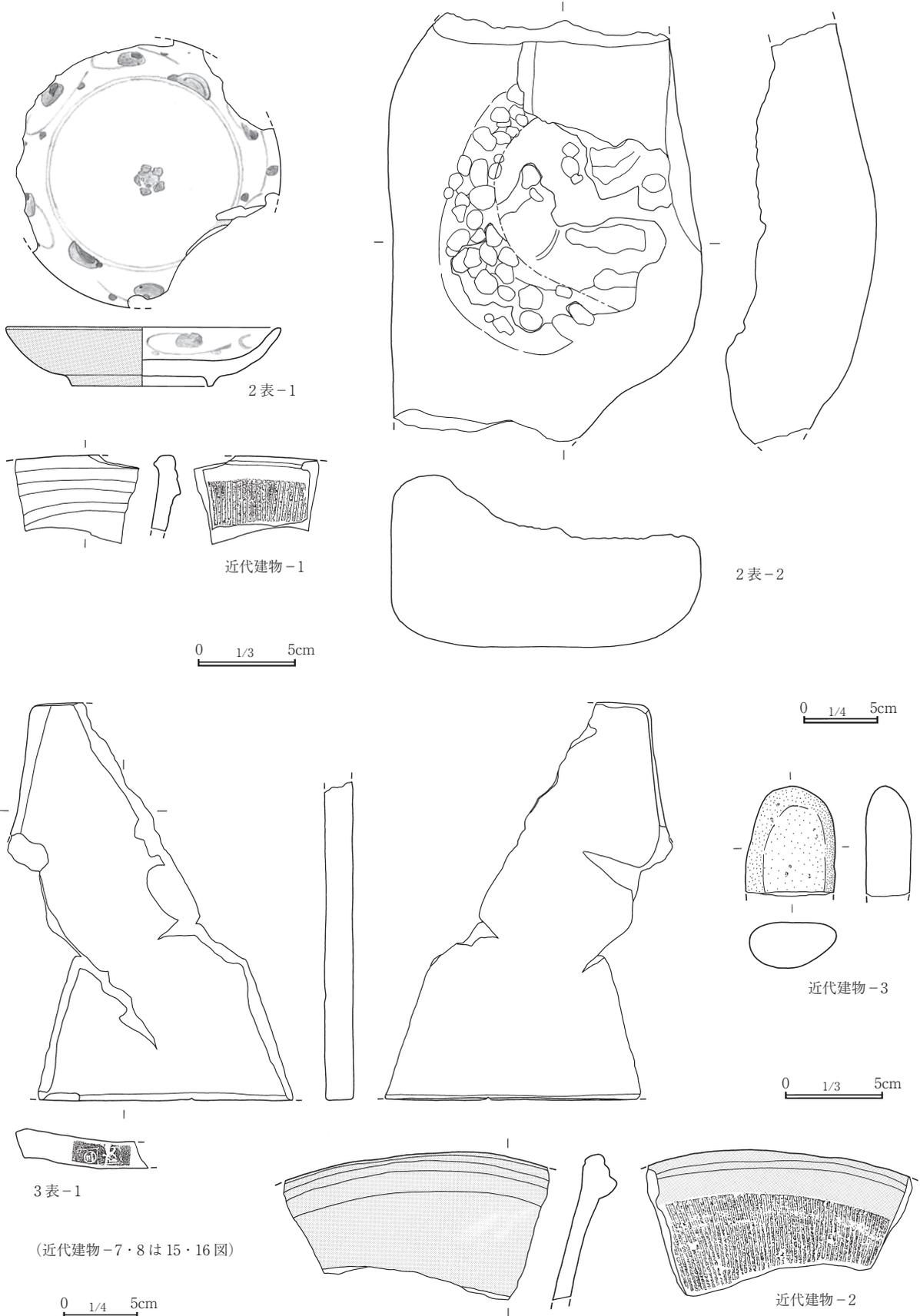
遺物は45cm程の深さに掘り窪められ、前述のように砂が埋め込まれた中混入していたものであった。この掘り込みの東・南・西は土蔵基礎の布掘りによって壊されていたが、北側は土蔵基礎から100cm程の範囲で土壌を残してから掘り込んでおり、掘り込み斜面の西寄りには石組みの痕跡のような川原石のまとまりも見受られた。この痕跡は試掘調査時に近世溝の可能性を疑っていたものであるが、面的に広げてみると掘り込みや石組の形状がはっきりしなかったため、明確な遺構としては捕えられなかったのである。しかしこの掘り込みは平成6年度調査域（見なし1区）で確認された上幅3m程で石垣を伴う21号溝の延長部とほぼ断定できるものであった。

尚、21号溝は幕末～近世初頭の所産と報告されているが、古地図の観察から明治20年以前の裁判所敷地を画するものの可能性も有するものである。

7 遺構外の出土遺物（第21図 P L 11・12）

概要 繰り返しになるが1面に属する遺構等には2面調査時確認のものもあるが、これらを含む1面の遺構外出土遺物はさして多いものではなかった。

遺物 1面に於いては近代から現代に至る時期の陶磁器や旧庁舎の廃材である煉瓦、石材、ガラス等々が散見された。これらの中には明治時代の建物基礎に混入した陶器挿鉢（近代建物-1・2）・皿（近代建物-7）、磨石（近代建物-3）、角釘（近代建物-8）があり、確認面で表面採集された或いは表土からの出土遺物には2区で得られた陶器皿（2表-1）や凹石（2表-2）、3区で得られた平瓦（3表-1）などが見られた。



第21図 1面の遺構外出土遺物

第3節 2面の遺構と遺物

1 2面の調査と概要

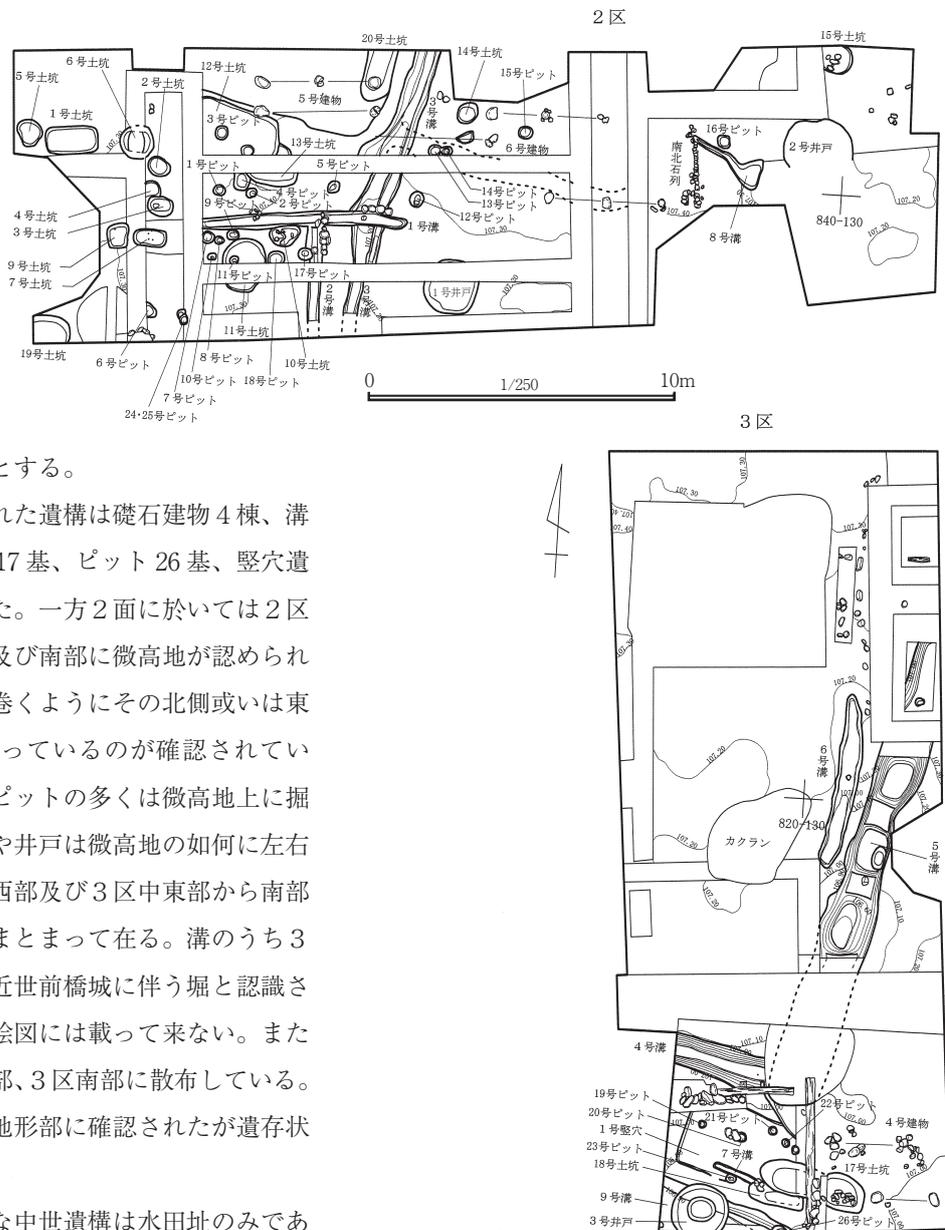
2面は中近世面である。残念ながら近代の建物基礎や現代の廃棄坑によって比較的広範囲で確認面が壊されていたものの、2区中西部と3区の南半部を中心に遺構を確認している。しかし礎石建物の遺構が2面への掘削途中に確認されたように、厳密には1面と2面の間に幾つかの使用面が存在したようではある。しかし乍ら発掘調査に於いて面的にこれらを確認することはできなかった。またこの礎石建物については2面の遺構として報告し、片や調査の都合上3面の調査に於いて記録化の図られた2、3の遺構についても2面の遺構として報告することとする。

2面で確認、調査された遺構は礎石建物4棟、溝9条、井戸3基、土坑17基、ピット26基、竪穴遺構1基、水田址であった。一方2面に於いては2区西南部と3区の中西部及び南部に微高地が認められた。この微高地を取り巻くようにその北側或いは東側に浅い低地部が広がっているのが確認されている。遺構のうち土坑、ピットの多くは微高地上に掘削されている。また溝や井戸は微高地の如何に左右されないが、溝は2区西部及び3区中東部から南部にかけての区域に概ねまとまって在る。溝のうち3区の大型のもの3条は近世前橋城に伴う堀と認識されるものであるが、城絵図には載って来ない。また井戸は2区東部と中南部、3区南部に散布している。水田址は2区北部の谷地形部に確認されたが遺存状態はあまりよくない。

これらのうち明らかな中世遺構は水田址のみであるが、土坑のうち長方形プランのものは中世に遡る

可能性を有するものの、他の遺構は何れも近世の所産と認識される。

尚2面の遺構図であるが、原図段階では2面の遺構やAs-B散布面との重複があるため、裁判所旧庁舎基礎について一括図化されているが、やや煩雑になるため、細部に於いては一部矛盾も生じるようになってしまいが、一部を除き本報告書ではその輪郭を直線的に示すに留めている。



第22図 2面全体図

2 4号建物 (23・24図 PL 14・22)

概要 本建物は3区南端部に位置し、後述のB棟は3号井戸や17号土坑より新しい。

本建物は南北2列からなり、南列が北列より1m程東にずれる位置関係から南列(A棟)、北列(B棟)の2棟に分離される。A棟は1列1間のみ、B棟は4間相当の1列を確認したに過ぎず、A棟は北東側に、南列の建物は南及び東西双方に延伸する可能性を有する。

A棟・B棟共に上下2層に遺構が確認され、上下層とも同じ位置に在るため、造成工事を挟んだ比較的長期間での使用が窺われる。

遺物 本建物からは17世紀段階の陶器皿(1)、角釘(2・3)などが出土している。

時期 本建物の時期は詳らかでないが、1面と2面の間に確認されたことから近世の所産と認識されるが、再築前橋城築城以前の所産であるものの、他遺構との新旧関係から、近世前橋城破却以降のものである可能性が高いものと思われる。

規模 A棟 長さ:3.0m 柱間:2.3m

B棟 長さ:6.4m

柱間:約1.9m

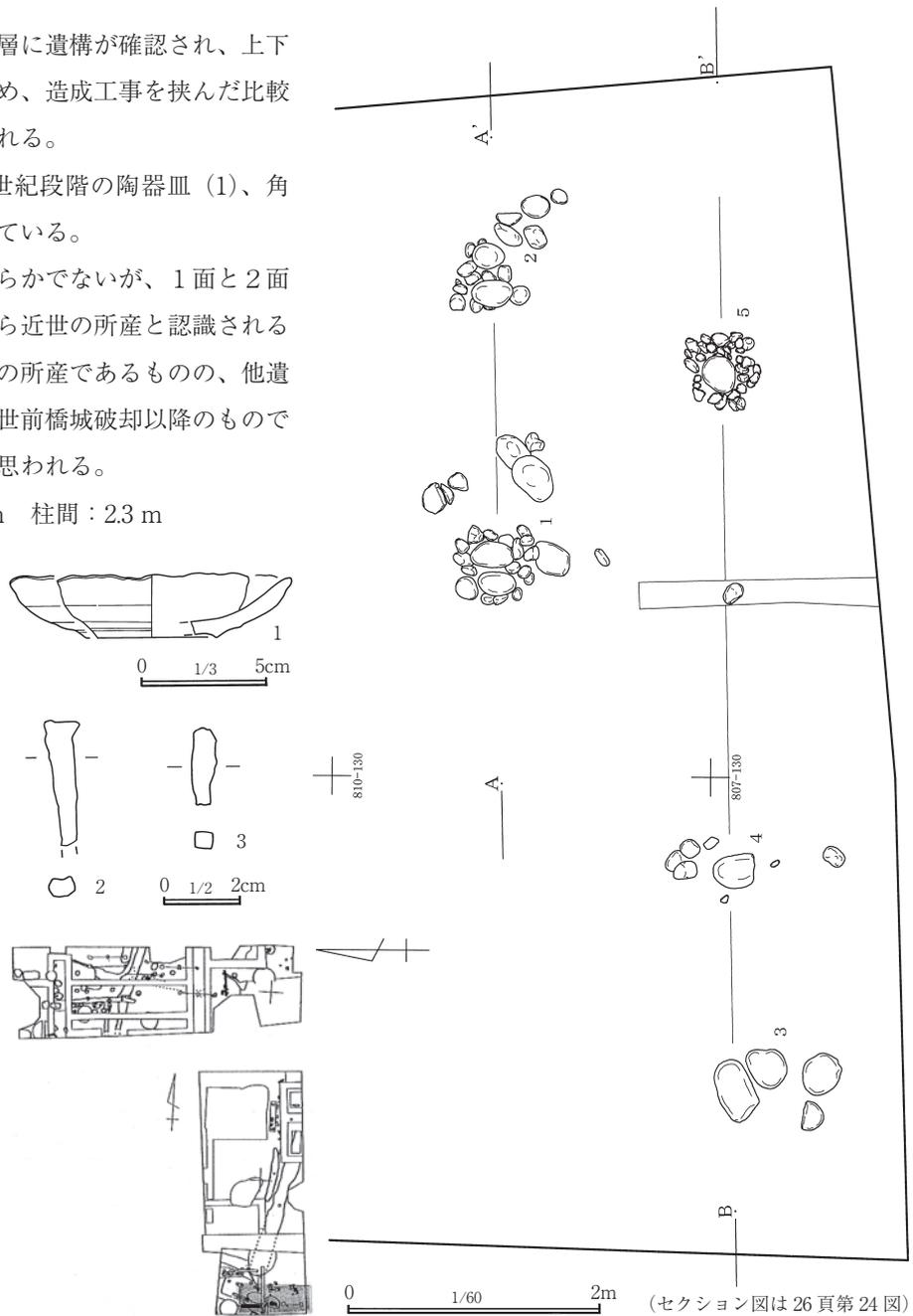
構造 A棟、B棟は共に上述のようにその一部を調査できたに過ぎないため、全容は詳らかでない。礎石は残されていなかったが、掘削途中で河床石を集めた地形が確認された。

A棟の2箇所及びB棟の東側2箇所の柱位置については、この地形の30~40cm下にA棟では古い段階の集石による地形が、B棟では地形を伴わない礎石が遺存していた。

3 5号建物 (25図 PL 15・22)

概要 本建物は2区西寄り北端部に位置する。後述の6号建物と南東部で重複する可能性を有するが、新旧関係は特定できなかった。

本建物も4号建物と同様に1・2面の中位層中に検出された。南北2列の基礎列として確認されたが、建物の一部を確認したに過ぎない。また南北列が近接した位置に在ることから縁側部分と思われる。一



第23図 4号建物上位面及び出土遺物

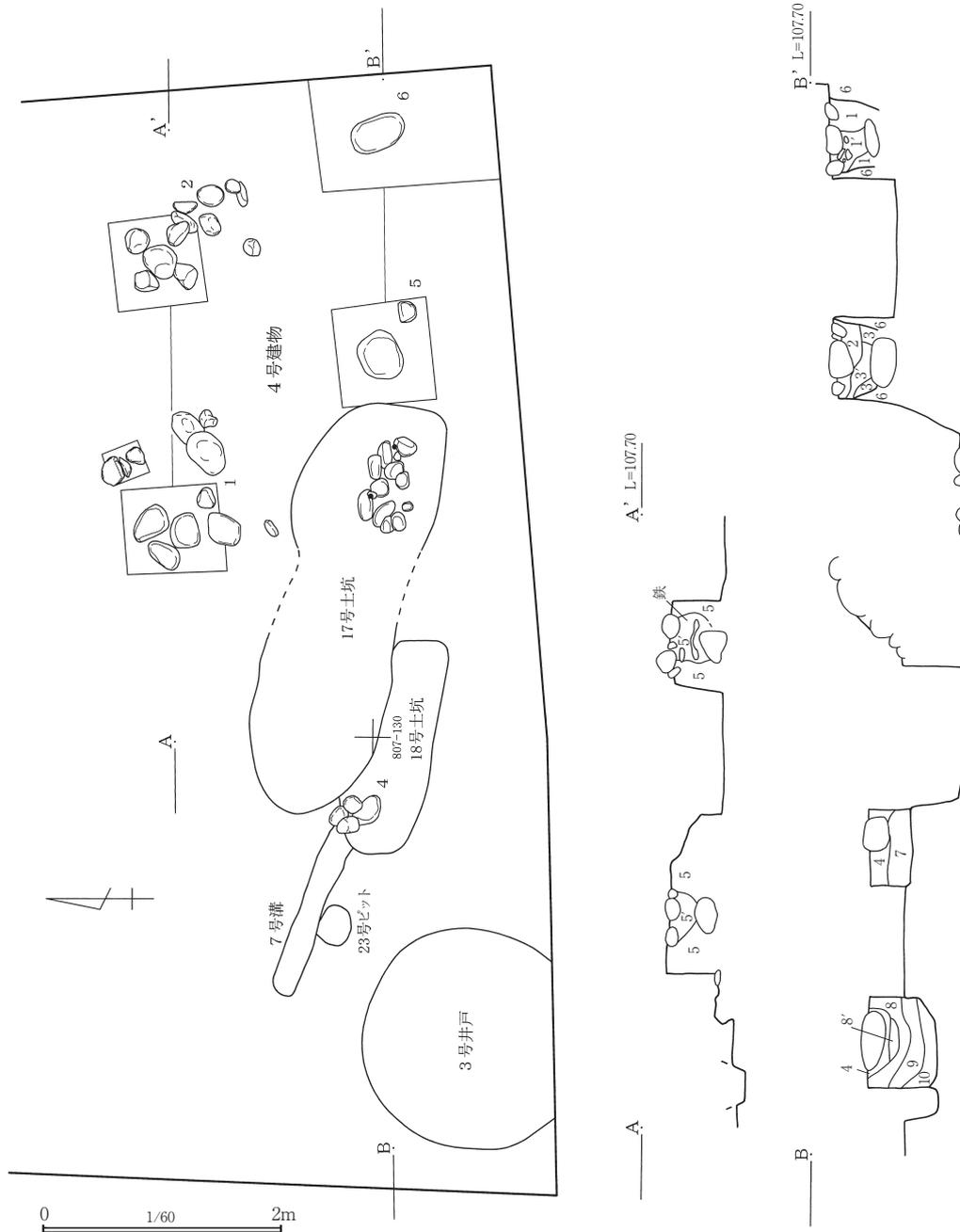
第3章 発見された遺構と遺物

方北列では上下2層の遺構面が確認されたが、面的に重なることと併せて、連続的且つ長期間の使用が窺われる。尚、上下層間に造成は施されていない。

遺物 本建物からは角釘2本（1・2）が出土し、図示すべきものはなかったが陶磁器類も見られた。

時期 本建物は近世の所産と想定されるが、その時期は詳らかで

ない。また後述するように本建物は当初礎石を伴うものの掘立柱建物であったものが礎石立ちの建物に変化している。現時点で明確な画期は捕えられていないが、本県における掘立柱建物から礎石建物への変化は18世紀の中頃には完了していることから、近世前橋城時代の所産、即ち17世紀～18世紀中頃の所産ではないかと考えられる。



(上位地形掘り方覆土)

- 1：黒褐色土（10YR2/3）：粘質土ブロック・細砂少量混入。粘性弱、締まりやや強。
- 1'：黒褐色土（2.5Y3/1）：3層土が変色したものの。
- 2：暗褐色土：細砂・酸化鉄分・白色細粒少量混入。粘性弱、締まりやや強。
- 3：黒褐色土（10YR2/3）：細砂・白色細粒微量に混入。粘性やや弱く締まり強。

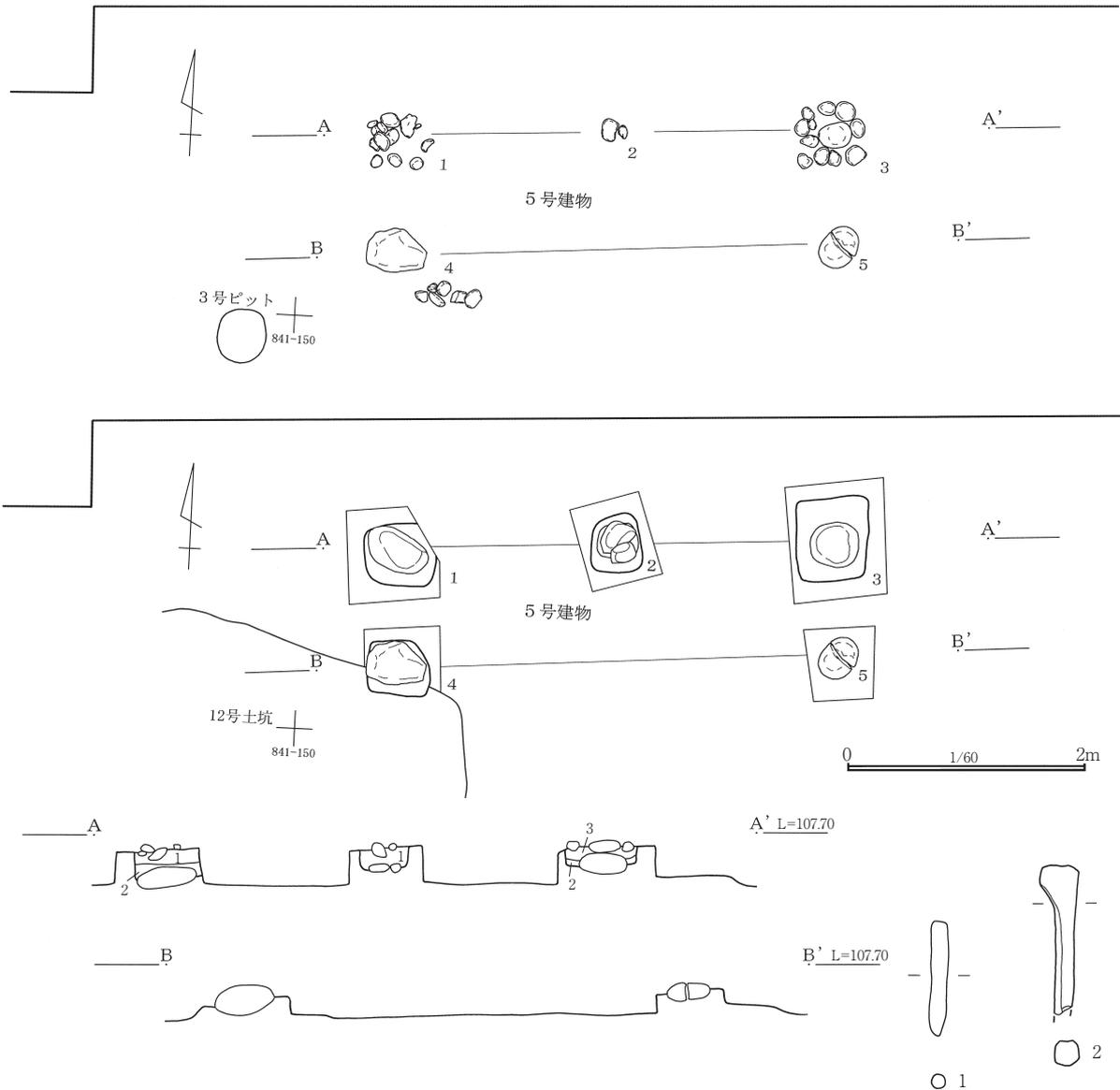
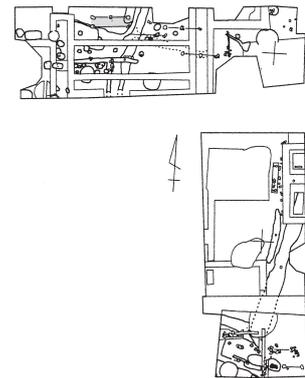
- 3'：黒褐色土（2.5Y3/1）：変色した3層。
- 4：黒褐色土（10YR2/3）：酸化鉄分・細砂少量混入。粘性弱、締まり強。
- 5：暗褐色土（10YR3/3）：細砂・白色軽石・炭化物粒少量混入。粘性弱、締まり強。
- 5'：黒褐色土（2.5Y3/2）：変色した5層。
- 6：黒褐色土（10YR2/3）：細砂・白色細粒微量に混入。粘性弱、締まりやや強。
- 7：黒褐色土（10YR2/3）：酸化鉄分・白色軽石粒少量混入。粘性やや弱、締まり強。

- 8：暗褐色土（10YR3/3）：径1～3cmのにぶい黄褐色粘質土ブロック極多量（50%）に混入。粘性やや強、締まり強。
- 8'：黒褐色土（2.5Y3/2）：変色した8層。
- 9：黒褐色土（10YR3/2）：白色軽石粒少量混入。粘性やや弱、締りやや強。
- 10：黒褐色土（10YR3/2）：径1～2cmの灰黄褐色土ブロック中量混入。粘性・締りやや強。

第24図 4号建物下面面及び掘り方断面図

規模 全体：425 × 152cm
 建物規模：374 × 96cm
 桁間：182 ~ 185cm (平均：183.5cm 南列
 含み：185.25cm)
 梁間：95 ~ 97cm (平均：96.0cm)
 柱穴1 径：(61) × 53cm 深さ：24cm
 柱穴2 径：44 × 51cm 深さ：18cm
 柱穴3 径：62 × 74cm 深さ：16cm
 柱穴5 径：53 × 47cm 深さ：(9) cm

構造 本建物は一部の調査に留まり、全容は不明である。
 南北2列があり、南列中位は欠失するが、2 × 1間分を調査した。東西の桁間は約1間、南北の梁間は約半間である。



(上下位礎石間埋土)
 1：暗褐色土 (10YR3/3)：黒褐色土ブロック多量に、酸化鉄分・細砂・炭化物粒少量混入。粘性弱、締まりやや弱。

2：黒褐色土 (10YR2/3)：細砂・酸化鉄分少量混入。粘性弱、締まりやや弱。

3：暗褐色土 (10YR3/3)：細砂・酸化鉄分・炭化物粒少量混入。粘性弱、締まり強。

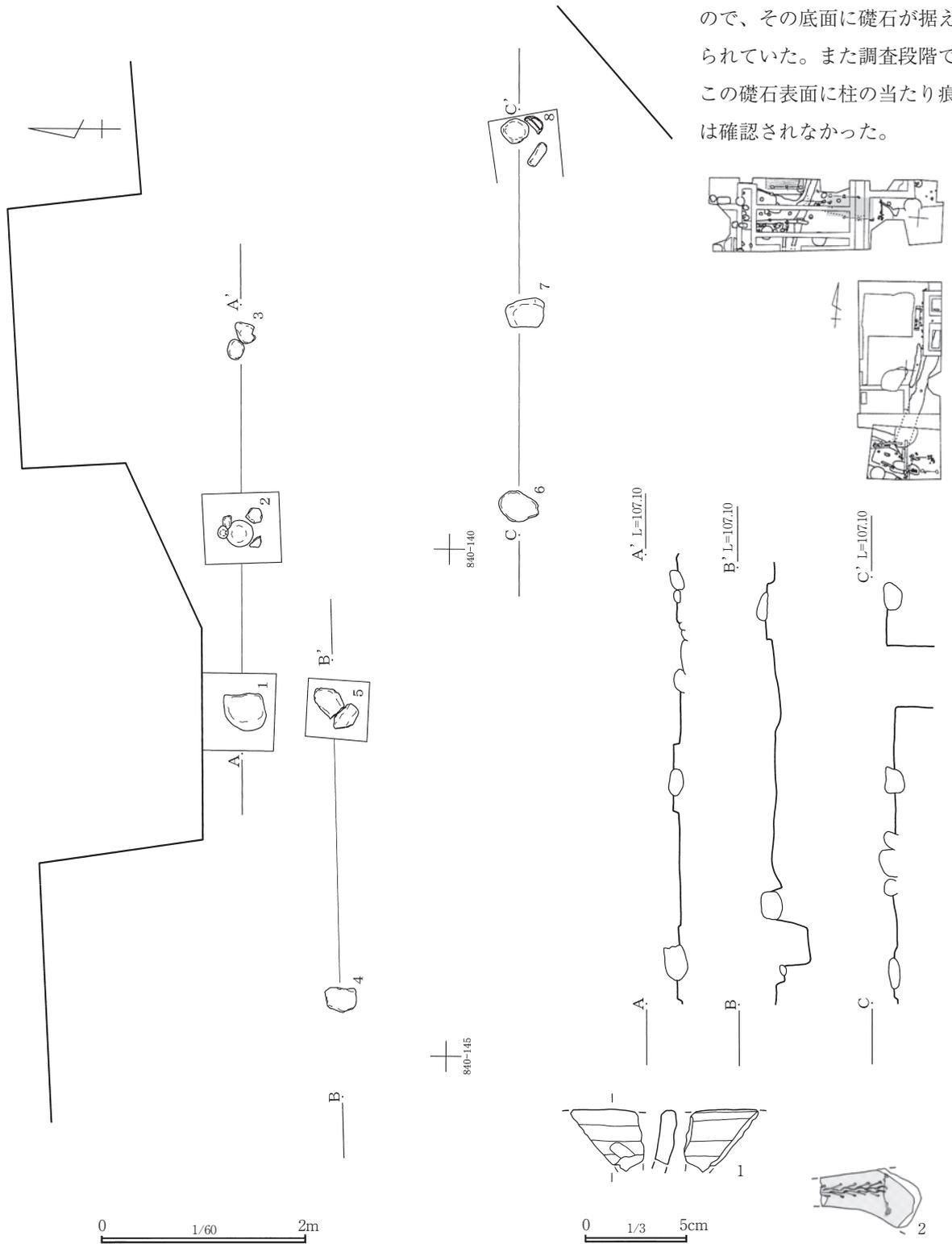
第25図 5号建物及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

さて北列の遺構は上下に分かれる。上位遺構の礎石は失われ、地形が残されていた。東西の地点1・3では、3の中央の礫がその可能性を持つものの、河床礫を1段だけ円形に集石した地形を見ることが

できた。また地点2は残欠を見るだけだったが、同様の構造と想定される。

一方下位層は北列の上位層基礎直下の3箇所と南列西側の地点4に方形プランの柱穴が掘削されたもので、その底面に礎石が据えられていた。また調査段階でこの礎石表面に柱の当たり痕は確認されなかった。



第26図 6号建物及び出土遺物

4 6号建物 (第26図 PL16・22)

概要 本建物は2区西寄り北端部、5号建物の南東に掛かるように位置する。5号建物と重複する可能性も有するが、新旧関係は特定されなかった。

本建物も4・5号建物同様1・2面の間に発見、調査されたが、確認位置はそれぞれの下位遺構に相当する。また3列共に東または西方向に延伸する可能性が高く、従って全容は詳らかにできなかった。

尚、本建物は3列の礎石列からなるが、南列は北・中列より25cm程東にずれるため別遺構の可能性を有する。また本建物の種別は特定できなかったが、北列と中列は近接するため縁の可能性を有する。

遺物 本建物からは軟質陶器播鉢(1)、陶器製のレンゲの柄(2)等陶磁器類の出土が見られた。

時期 本建物は近世の所産とできるだけ細かい時期は特定できなかったが、確認位置から推して近世中期以前の所産と推定される。

規模 全体：900×324cm

建物規模：854×272cm

桁間：190～292cm(平均：213.4cm)

長尺：292cm 短尺平均：193.75cm

梁間：北・中列間：92cm

北・南列間：274～280cm(平均：277cm)

構造 本建物は上述のようにその一部を調査できたに過ぎず、全容は詳らかではない。また南列は別遺構の可能性を有するが、ここでは一括して報告する。

本建物は北列で2間、中列で1間、南列で2間が在ったが、北列の礎石1と中列の礎石5、北列の礎石2と南列の礎石6、同じく礎石3と礎石7が対応する。従って確認できた建物規模は桁行4間で北側に縁側を有する梁間1間の建物ということになる。縁の幅は半間、建物の梁間は1間半、桁間は西際は1間半、他は1間相当となる。

礎石は礎石1・4・6・7のように単独のもの、礎石5のように2つの礫からなるもの、礎石2・8のように複数の礫が残るがそのうち中心のものがそれと見なされるものがあつたが、何れも地形は伴わない。礎石3は小型の石で不明確である。

5 2区の溝群

(第27～29図 PL16・17・22・23)

概要 2区2面に於いては区西部に1～3号溝、東部に8号溝の4条の溝遺構を確認、調査した。

このうち1号溝と2・3号溝は重複するが、何れも明確な新旧関係は特定できなかった。尚、1・2号溝は発掘調査時の観察所見から同時期のものと判断される。8号溝は後述の南北石列遺構に切られる。

また各溝の掘削意図は特定できなかったが、3号溝は掘り直しと通水の可能性を有し、8号溝は第2節に述べた遺物集中域の削りこみを池と想定するならば、これへの通水路であつた可能性が考慮される。

遺物 各溝から陶磁器・瓦等の出土が見られたが、1号溝からは近現代の軟質陶器鉢(1)や近世の陶器皿(2)、冠瓦(3)、軒丸瓦(4)、丸瓦(5～7)、棧瓦(8)、砥石(9)、角釘(10)、鉄製吊手(11)、不明鉄製品(12)、2号溝からは磁器仏飯器(1)、鎌(2・3)、角釘(4)、3号溝からは軟質陶器壺壺(1)、8号溝からは磁器皿(1)の出土が見られた。

時期 本溝群は近世の所産である。このうち1号溝は出土遺物から推して近代に下る可能性があり、2号溝も同時期と認識される。3号溝は走行の方向から後述の5号溝と同じ近世前・中期の可能性を有するが、8号溝の時期は特定できなかった。

規模 1号溝 長さ：6.7m 幅：52cm

深さ：20cm

2号溝 長さ：(3.7)m 幅：59cm 深さ：24cm

3号溝 長さ：(10)m 幅：46～153cm

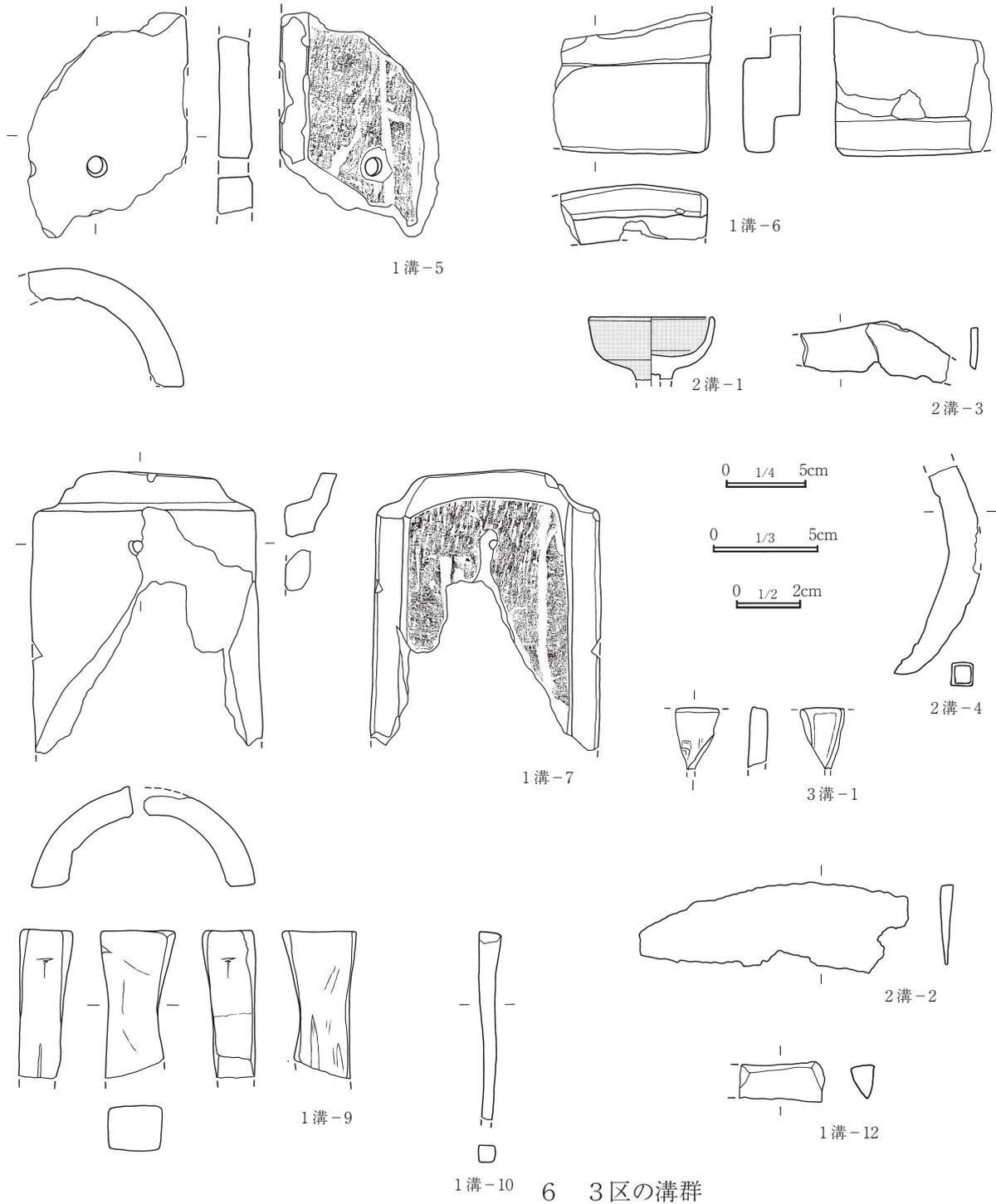
深さ：17cm

8号溝 長さ：2.6m 幅：24cm 最大幅106cm

深さ：4～25cm

構造 1号溝の主軸は北に対して凡そ267°、2号溝は同じく357°、3号溝は12°、8号溝は302°を向く。また走行は1・2号溝は直線的で、3号溝も直線的だが弱くくの字に屈曲し側縁には揺らぎがある。8号溝も直線的だが、南東端部で三角形に広がりを持つ。

掘削形態は何れも箱掘状である。



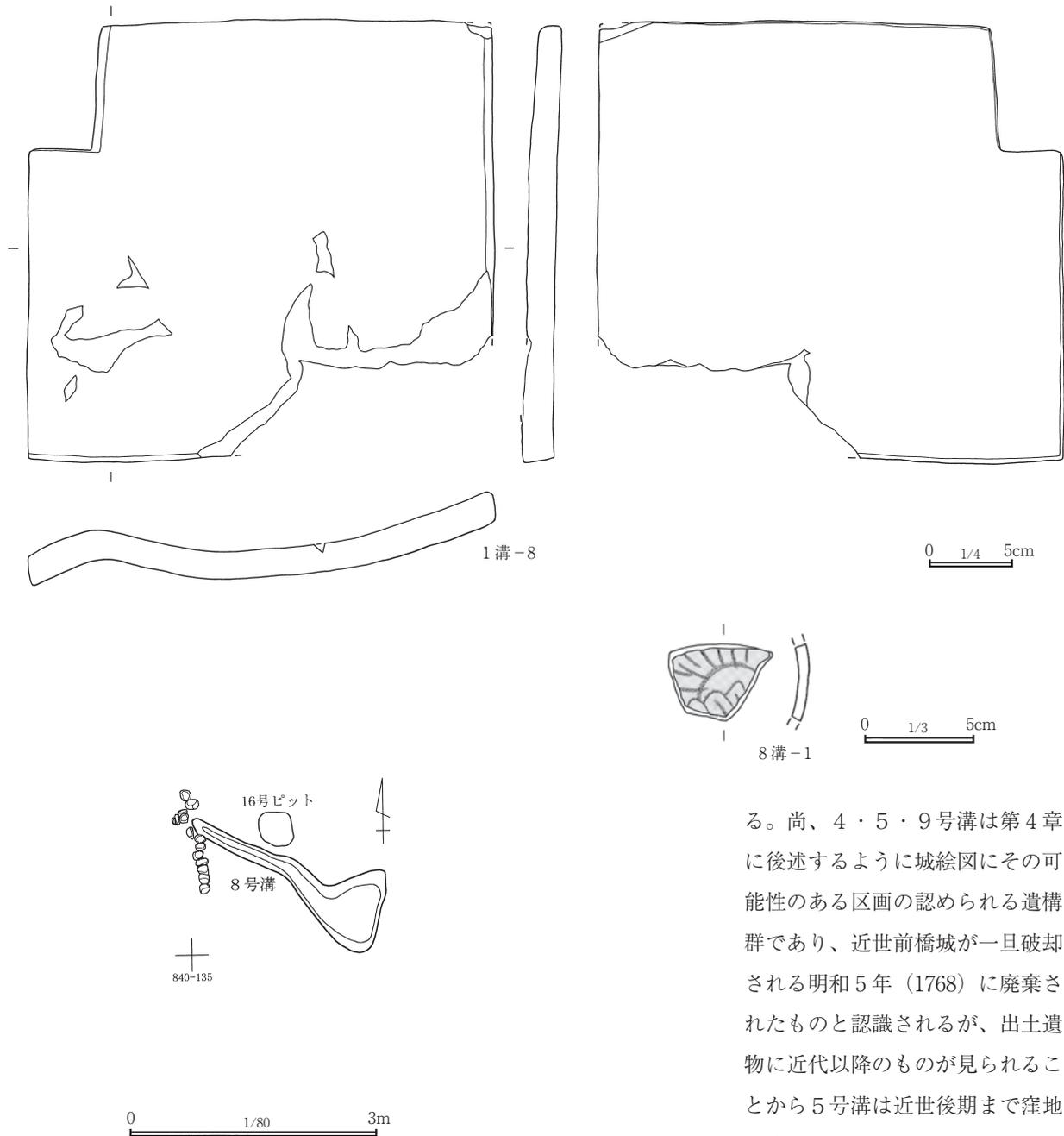
6 3区の溝群

(第30・31図 P L 16・17・23・24)

概要 3区2面では4条の溝遺構を確認・調査した。

このうち4・5号溝は交点に4号井戸が入るため明瞭ではないが、L字状に配置することから並存したものと解釈している。また7号溝は18号土坑と重複するが新旧関係は不特定。南端の9号溝は後述の3号井戸及び26号ピットに切られている。

第28図 1～3号溝出土遺物 (その2)

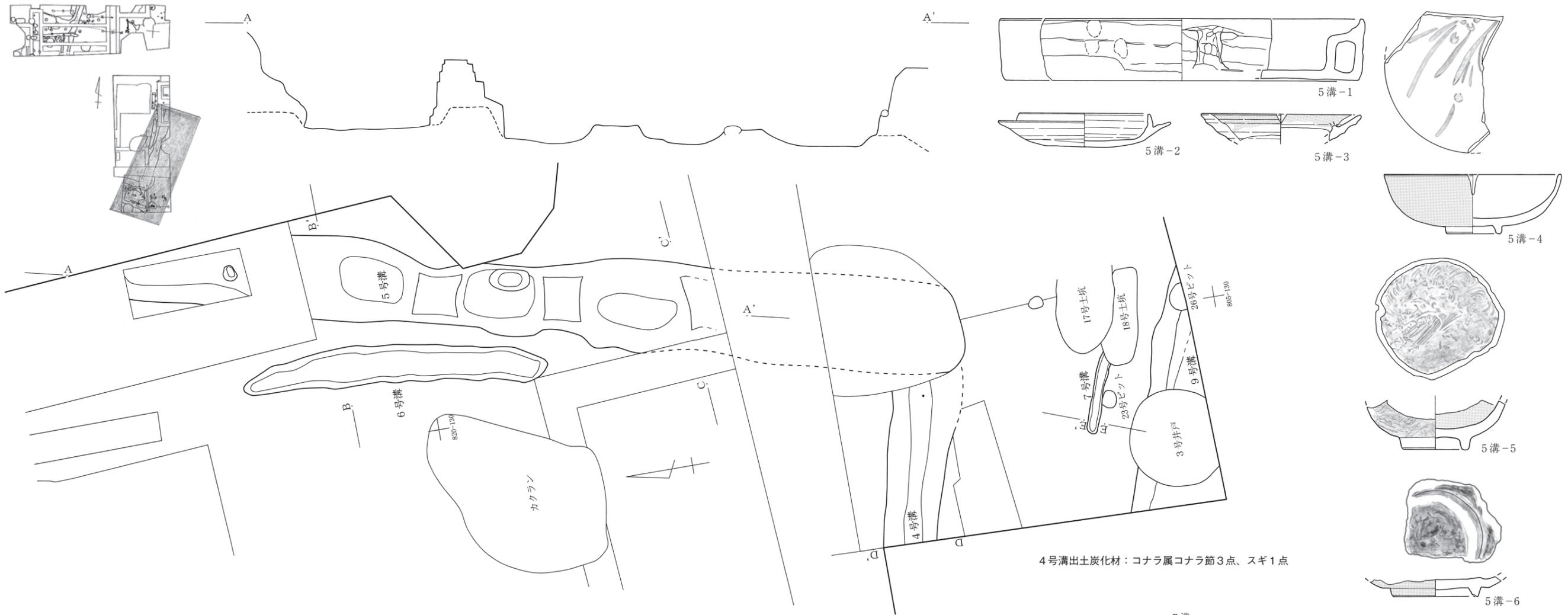


第29図 8号溝と1・8号溝出土遺物（その3）

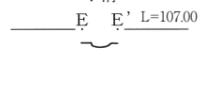
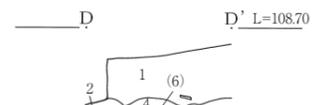
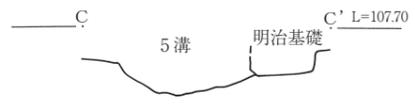
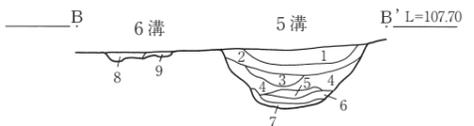
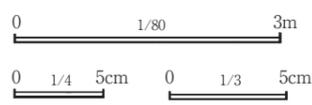
本溝群のうち6号溝は微高地と低地との境に在るが掘削意図は不明。7号溝も掘削意図は特定できなかった。4・9号溝は形態的に堀と認められ、5号溝は障子堀であった。また4・9号溝は3.6m（2間）の間隔を以て並行に在るが、9号溝は4号溝の東端より東に伸びて喰い違いになっている。また4・9号溝の間は通路になっていた可能性が想定され

る。尚、4・5・9号溝は第4章に後述するように城絵図にその可能性のある区画の認められる遺構群であり、近世前橋城が一旦破却される明和5年（1768）に廃棄されたものと認識されるが、出土遺物に近代以降のものが見られることから5号溝は近世後期まで窪地が残ってゴミ捨てに利用された可能性が考えられる。

遺物 本溝群のうち6・7号溝からの出土遺物は認められなかったが、4号溝からはかわらけ（1）、陶器灯明皿（2）、磁器蓋物（3）、8号溝からは磁器皿（4）などの出土が見られた。特に5号溝では中央部の障壁と障壁の間に投棄されたような土器溜りがあり、ここを中心に多数の出土遺物が得られた。この中には磁器鉢（20）や土瓶の蓋（31）、磁器壺（21）のように近現代の遺物も混入し



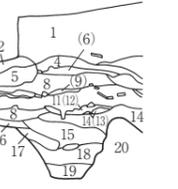
4号溝出土炭化材：コナラ属コナラ節3点、スギ1点



【B-B'】
 (5号溝覆土)
 1：暗褐色土 (10YR3/3)：白色軽石粒・炭化物粒・酸化鉄分・礫中量混入。粘性やや弱、縮まりやや強。
 2：黒褐色土 (10YR2/3)：白色軽石粒・炭化物粒少量混入。粘性・縮まりやや弱。
 3：暗褐色土 (10YR2/3)：白色軽石粒・炭化物粒少量、細砂中量混入。粘性弱、縮まりやや強。
 4：黒褐色土 (10YR2/3)：白色軽石粒・炭化物粒少量混入。粘性縮まりやや弱。

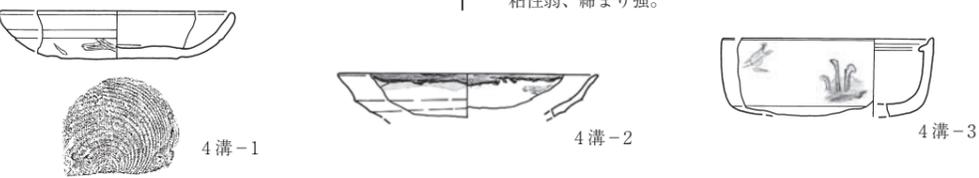
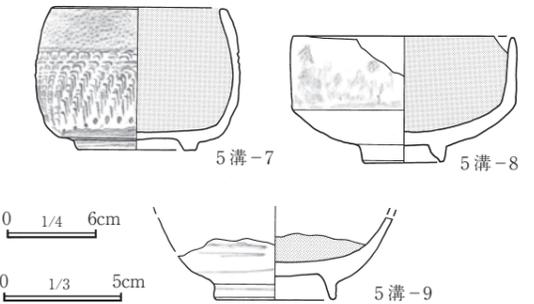
5：黒褐色土 (10YR2/2)：白色軽石粒・酸化鉄分微量に混入。粘性やや強、縮まりやや弱。
 6：黒褐色土 (10YR2/2)：灰黄褐色地山層土ブロック少量混入。粘性縮まりやや強。
 7：黒褐色細砂層 (10YR2/2)：粘性弱、縮まりやや強。
 (6号溝覆土)
 8：黒褐色土 (10YR2/3)：白色軽石粒・黄色粒少量混入。粘性弱、縮まり強。
 9：黒褐色土 (10YR3/2)：白色軽石粒中量混入。粘性弱、縮まり強。

【D-D'】
 (現代埋土)
 1：黒褐色土 (7.5YR3/2)：明黄褐色ローム (10YR7/6)・川原石・建築廃材含む。
 (近代埋土、旧裁判所本館基礎)
 2：川原石(拳大以下)と川砂層：利根川のものか。
 3：径25mm以下の川原石と川砂層。
 4：黒褐色土 (7.5YR3/2) に7層土等入るブロック混土。
 5：にぶい黄褐色土 (10YR4/3)：As-A混入。粘性やや弱。
 6：灰黄褐色土 (10YR5/2) と浅黄色ローム (2.5Y7/4) のブロック混土：黒褐色土 (10YR3/1) ブロック混入。粘性弱。部分的にAs-A含む。
 7：灰黄褐色土(10YR5/2)：褐灰色土 (10YR4/2) 小ブロックと若干のにぶい黄褐色ローム (10YR6/4)・黒褐色土 (10YR3/1) ブロック、僅かの焼土と小礫含む。粘性弱やや砂質。
 8：灰白色 (10YR7/1) 主体のシルトブロック含む褐灰色土 (7.5YR4/1)：粘性弱。微量のAs-A混入。シルト面に酸化鉄吸着。

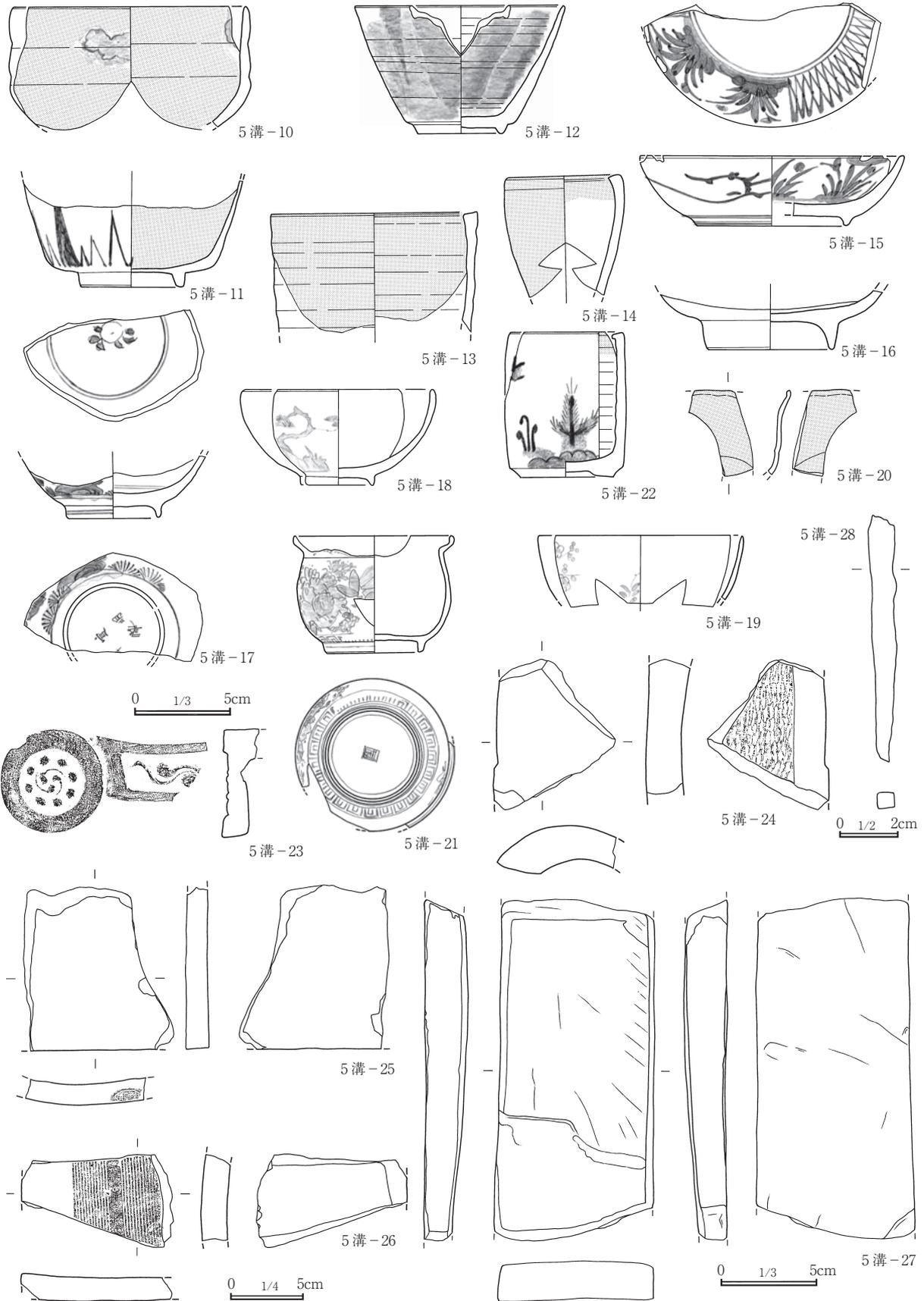


9：灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)：川砂多く含み、炭化物・漆喰混入。
 10：明褐色シルト (7.5YR7/1)：焼土・炭化物粒・9層土のまとまったブロック含む。

11：灰黄褐色土 (10YR5/2)：瓦・炭化物やや多く混入。焼土・ガラス等も入る。粘性やや弱。
 12：褐色土 (10YR4/4)：明黄褐色ローム (10YR6/8) 含み、炭化物粒若干混入。粘性あり。
 13：にぶい黄褐色土 (10YR6/3)：As-C(か)多くブロックで混入。
 14：灰黄褐色土 (10YR4/2)：明黄褐色ローム (10YR6/8) 含み、炭化物粒若干混入。
 15：黒褐色土 (10YR3/2)：にぶい黄褐色土 (10YR4/3) と少量のAs-C(か)混入。粘性あり。
 16：黒褐色粘質土(10YR3/2)：ローム粒・As-C(か)若干混入。



第30図 4～7・9号溝と出土遺物(その1)



第31図 5号溝出土遺物(その2)

第3章 発見された遺構と遺物

ていたが、軟質陶器内耳鍋 (1)、陶器の灯明皿 (2・3)・皿 (4～6)・碗 (7～10)・鉢 (11・12)・甕 (13)・火入れと思われるもの (14)、磁器の皿 (15～17)・碗 (18・19)・鉢 (20)・火入れ (22) の他、軒平瓦 (23)、丸瓦 (24)、平瓦 (25・26)、砥石 (27)、角釘 (28) の出土が見られ、アワビ (29) やサザエの蓋 (30) といった貝殻も見られた。

時期 本溝群の各溝は近世の所産と見られるが、6・7号溝の時期は特定できなかった。一方4・5・9号溝は、再築前橋城以降の区画と走行が異なることから前橋城破却以前の所産と判断されるが、5号溝の出土遺物から再築時代まで遺構の残っていた可能性も考慮される。

規模 4号溝 長さ：3.3 m 幅：125cm
深さ：51cm

5号溝 長さ：16.0 m 幅：179cm 深さ：74cm

6号溝 長さ：5.8 m 幅：77cm 深さ：18cm

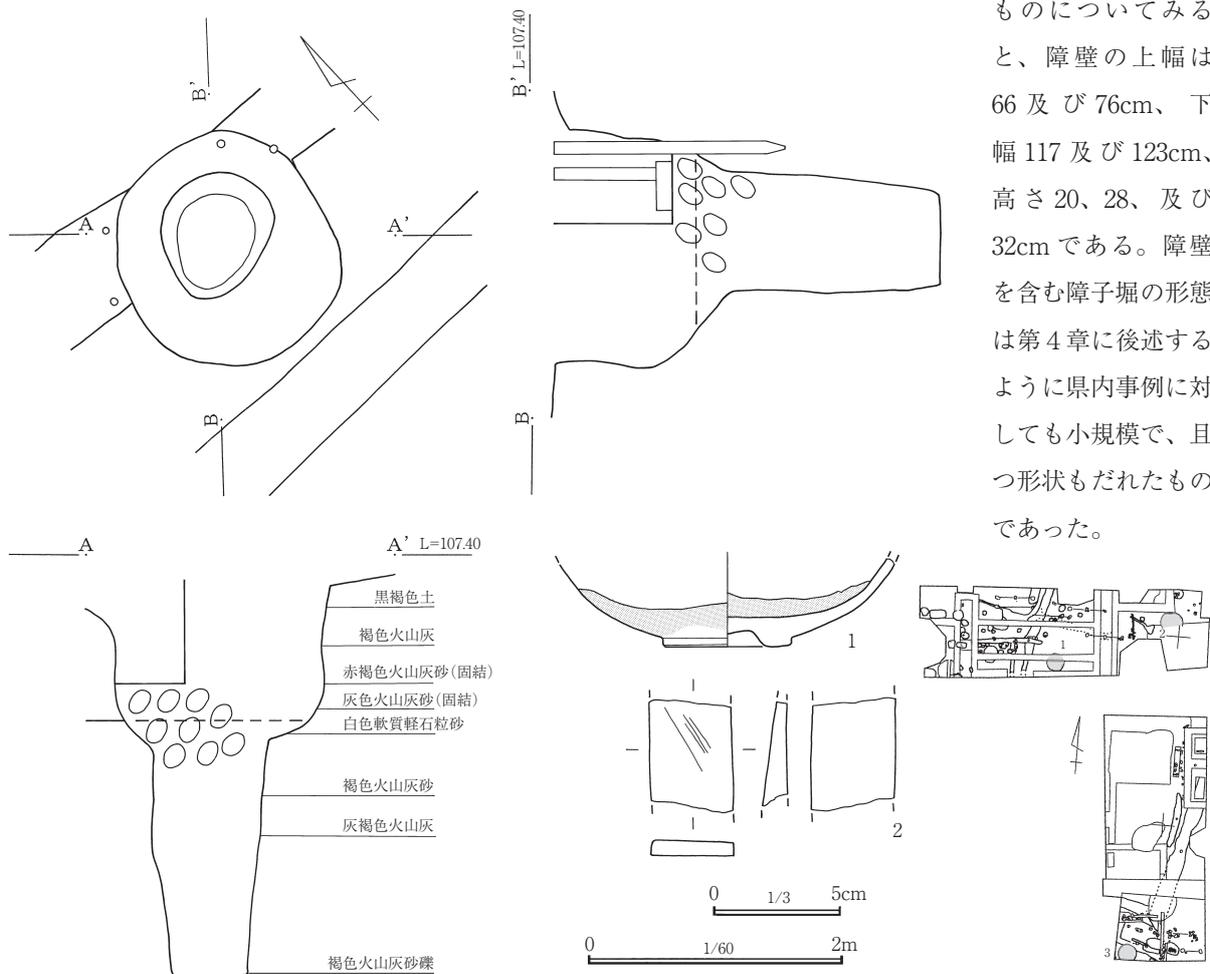
7号溝 長さ：1.5 m 幅：23cm 深さ：5cm

9号溝 長さ：4.8 m 幅：(176)cm 深さ：45cm

構造 走行の方向は北に対して4号溝で284°、5号溝で16°、6号溝で9°、7号溝で291°、9号溝で290°を測り、4・5・9号溝は直線的、6・7号溝は緩やかな弧を描く走行を見せる。

掘削形態は4・6・7・9号溝は箱状を呈し、特に4号溝の底面は平坦であった。一方5号溝は1列の障子堀であった。障壁はその全体や一部が確認されたものが南寄りに3箇所、障壁の始まりを窺わせるものが北側の煉瓦基礎の南側と5号溝北端部の2箇所に確認された。南寄り4号井戸の掘削によって失われていて不明だが、南端より約5mの地点から推定位置も含めると280cm、244cm、236cm、436cm程のところに障壁が作られている。明確な

ものについてみると、障壁の上幅は66及び76cm、下幅117及び123cm、高さ20、28、及び32cmである。障壁を含む障子堀の形態は第4章に後述するように県内事例に対しても小規模で、且つ形状もだれたものであった。



第32図 1号井戸と出土遺物 (その1)

7 1号井戸 (第32・33図 PL 17・24・25)

概要 本井戸は2区中南部に位置する。

3面の10号溝と重複し、これを掘り込んで作ら

れているが、一方本井戸の上位北寄りには裁判所旧庁舎附属舎の基礎と重複して、これに壊されている。また同建物基礎に伴って杭が深く打設されており、

本井戸の東壁には打設された杭が喰い込むように残されていた。

本井戸の湧水層は確認面下2.1mより下位に堆積が認められた褐色火山灰砂礫層である。尚調査時点の湧水量は1分あたり15リットルを測るものであった。

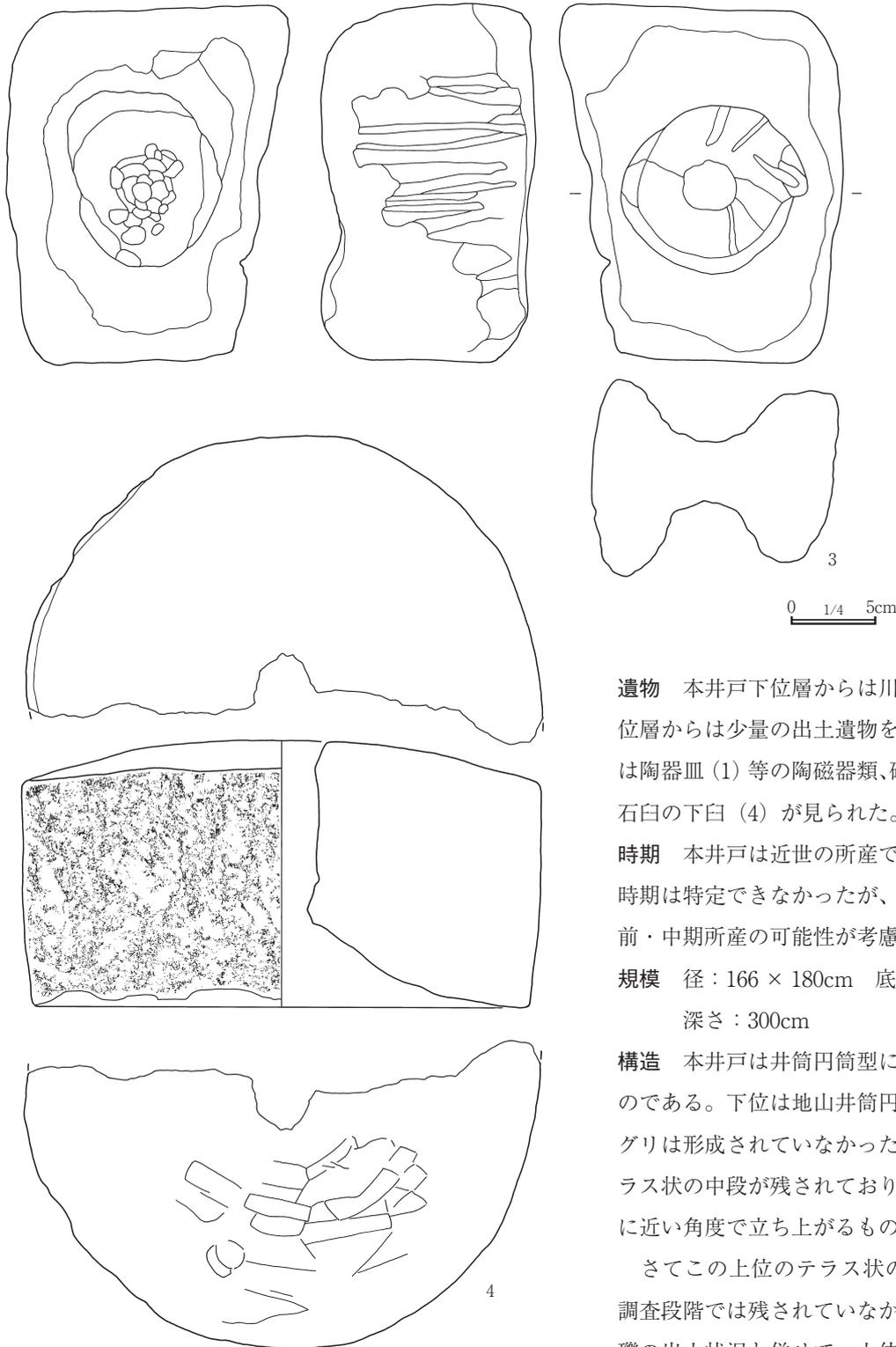
遺物 本井戸下位層からは川原石が出土し、上位層からは少量の出土遺物を得たが、この中には陶器皿(1)等の陶磁器類、砥石(2)、凹石(3)、石臼の下臼(4)が見られた。

時期 本井戸は近世の所産である。また細かい時期は特定できなかったが、出土遺物から近世前・中期所産の可能性が考慮される。

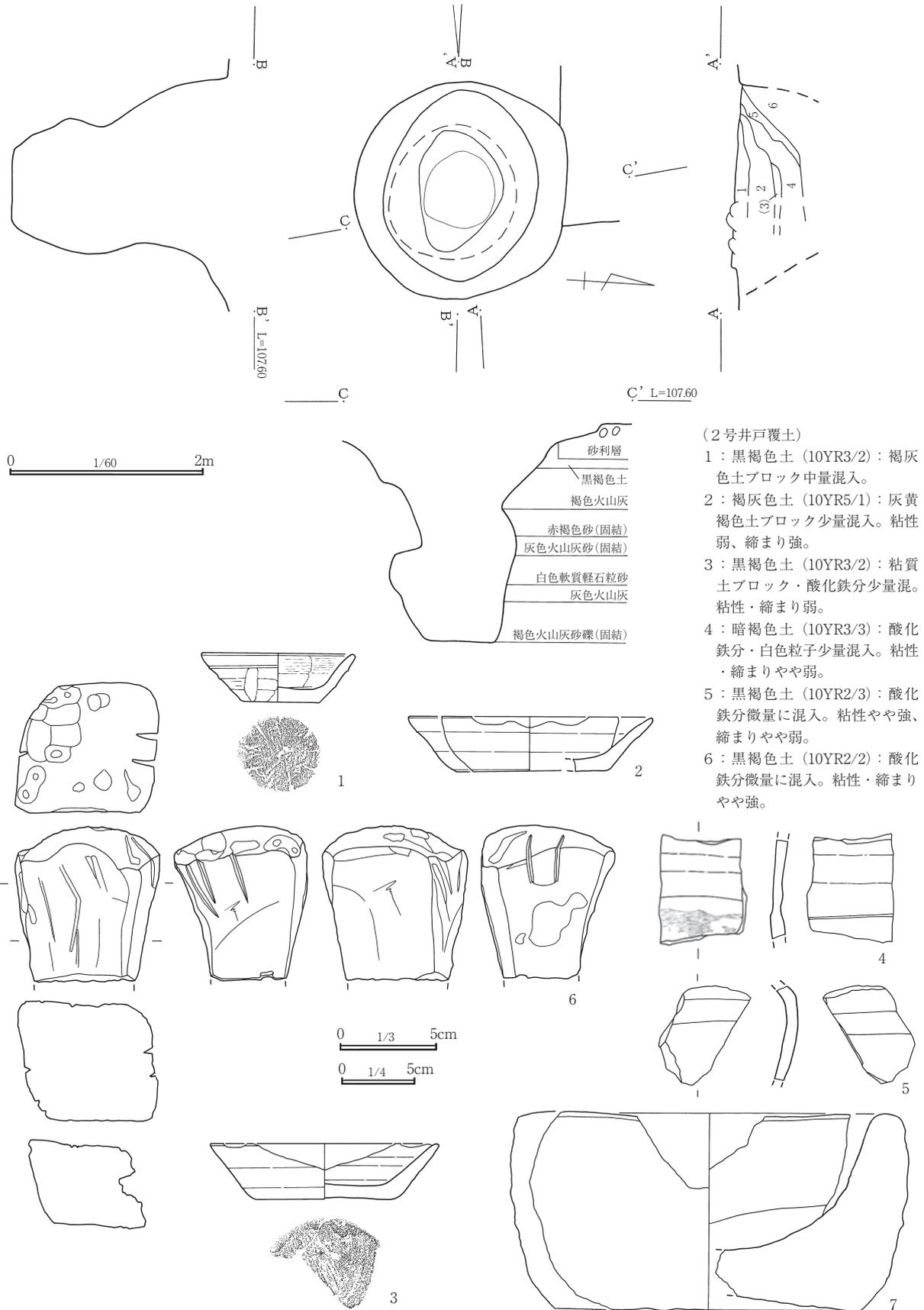
規模 径：166×180cm 底径：76×61cm
深さ：300cm

構造 本井戸は井筒円筒型に含まれる形式のものである。下位は地山井筒円筒形であるが、アグリは形成されていなかった。また上位にはテラス状の中段が残されており、上位壁面は垂直に近い角度で立ち上がるものであった。

さてこの上位のテラス状の形態については、調査段階では残されていなかったが、下位層の礫の出土状況と併せて、上位には石積みが施されていたことが想定されるものであった。



第33図 1号井戸出土遺物(その2)



第34図 2号井戸と出土遺物

8 2号井戸 (第34図 P L 18・25)

概要 本井戸は2区東部に確認された。

本井戸上面には1面の遺物集中域の遺物や川原石等が乗っており、これらの除去後に確認された遺構である。

本井戸の湧水層は1号井戸と同様、確認面より1.9m下位のレベルに堆積が確認された褐色火山灰砂礫層であり、調査時の湧水量は1分当たり1リットルであった。尚、底面から30cm程の高さまでは自然の埋土と認められる黒褐色砂質土の堆積が確認され、井戸換え前に埋められたことが確認されるものであった。

また、東壁面が突出する形態から、跳ねつるべが用いられたものと判断される。

遺物 本井戸の出土遺物にはかわらけ(1~3)、軟質陶器鉢(4・5)、磁器、ほうろく鍋、砥石(6)、石鉢(7)などがあったが、かわらけは上位層、石鉢は下位層からの出土であった。

時期 本井戸は出土遺物から中世段階の所産と判断される。

規模 径：225 ×

215cm

底径：78 × 72cm

深さ：222cm

構造 本井戸は大まかには地山井筒朝顔型に分類される形態の井戸である。

(近世整地層か)

1：暗褐色土(10YR3/3)：酸化鉄・炭化物粒少量。粘性やや弱、縮まりやや強。／

2：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：酸化鉄・黄褐色土ブロック中量、白色軽石粒少量混入。(3号井戸覆土)

3：黒褐色土(10YR3/2)：酸化鉄、炭化物・白色軽石粒少量混入。粘性やや弱、縮まりやや強。／

4：黒褐色土(10YR3/2)：白色軽石粒少量。粘性やや弱、縮まりやや強。／

5：黒褐色土(10YR3/1)：白色軽石粒微量。粘性やや強、縮まりやや弱。／

6：黒褐色土(10YR3/2)：灰黄褐色土小ブロック中量混入。粘性・縮まりやや強。／

7：黒褐色土(10YR3/2)：灰黄褐色土小ブロック、炭化物・白色軽石粒少量混入。粘性・縮まりやや強。／

8：黒褐色土(10YR3/2)：酸化鉄少量混入。粘性・縮まりやや強。／

9：暗褐色土(10YR3/3)：酸化鉄分中量混入。粘性・縮まり強。

全体的なプランは円形をなすが、跳ねつるべを使用したようで、中位の壁面が抉られて東に広がり、平面的には水滴に近い楕円形を呈していた。

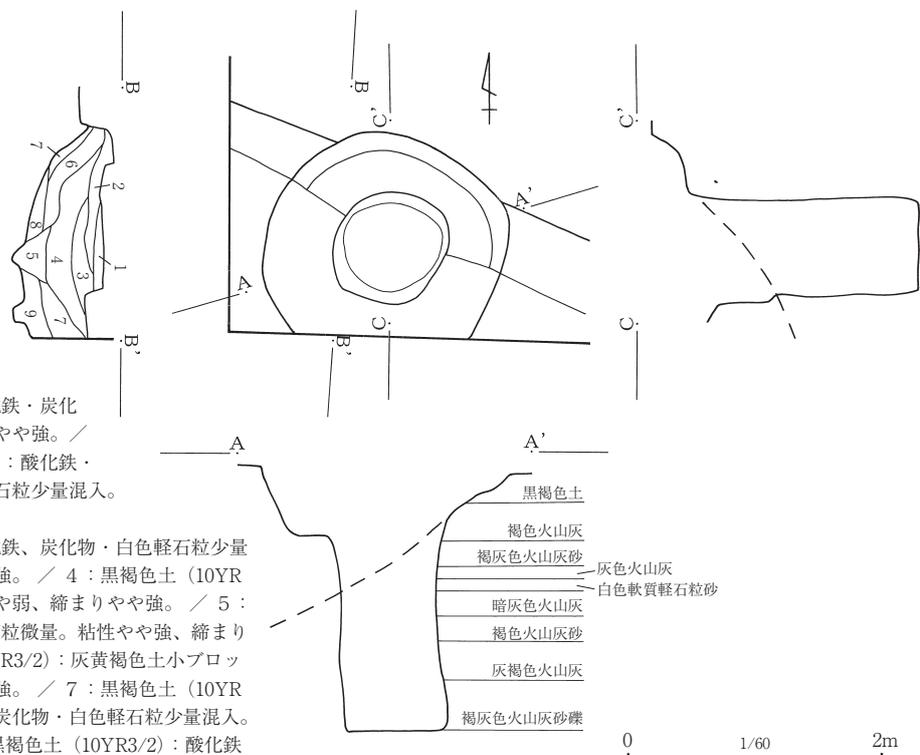
また底面は平底で、底面から高さ40cm、60cm、100cmの辺りには高さ50~80cm、奥行き30cm以内のアグリが形成されていた。アグリは使用時点での水位を示しているが、この高さの異なるアグリの遺存によって、季節による水位の上下が窺われるのである。

9 3号井戸 (第35・36図 P L 18・25)

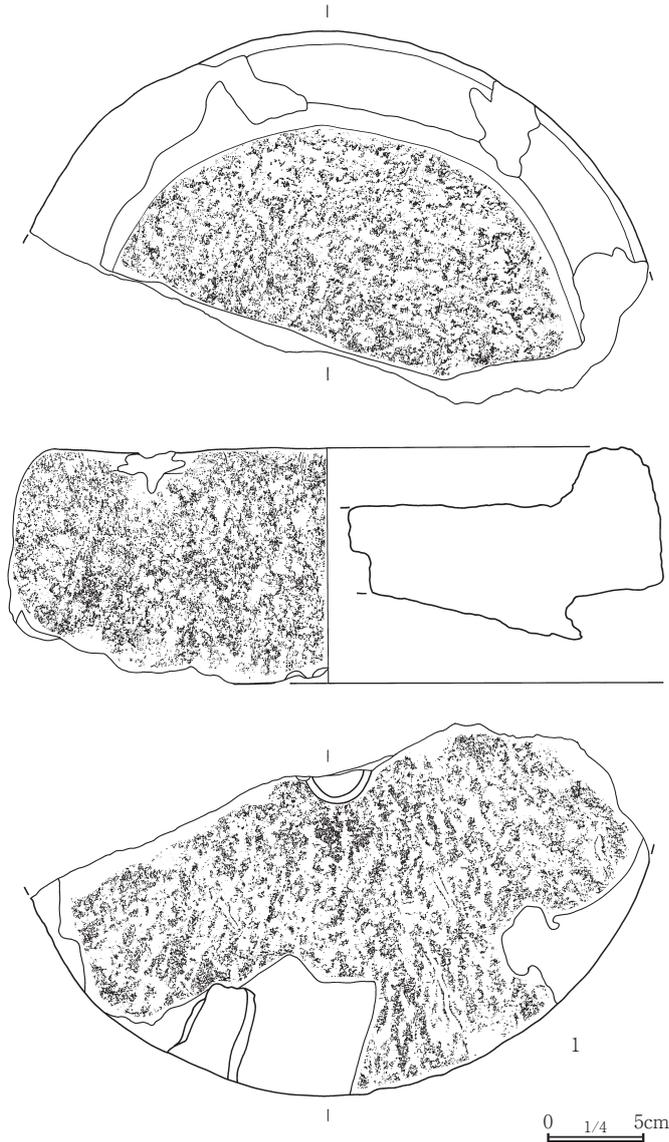
概要 本井戸は3区南端部に位置する。当初16号土坑としたが、掘削途中で井戸であると判明した。

本井戸は南の一部が調査区外に出ている。また本井戸は前述の9号溝と重複するるのであるが、これを切っており、本井戸の方が新しい。

本井戸の湧水層は1・2号井戸と同様、確認面より1.7m下の地山層である褐色火山灰砂礫層であるが、調査時点での湧水量は1分当たり1リットルの噴出量を測っている。



第35図 3号井戸



第36図 3号井戸出土遺物

遺物 本井戸の出土遺物はさしてなかったのであるが、上位層からは石臼(1)の上臼が出土している。また井戸掘削時の所見によると下位層からはタガの破片が出土した記録が残っているが、整理時点では確認できなくなっている。

時期 本井戸は近世の所産ではあるものの、細かい時期は特定できなかった。しかし近世前・中期の堀と見られる9号溝を切っていることから、本井戸は近世前橋城が一旦破却された明和5年(1768)以降の所産と判断されるものである。

規模 径：182×(179)cm 底径：76×72cm
深さ：210cm

構造 本井戸は地山井筒円筒型を呈する。

プランは円形に近い隅丸方形を呈するが、底面のプランは円形に近い楕円形状をなす。

また井筒部下位には若干の膨らみが見られるものの、アグリとは認められるような形状のものではなかった。

10 2面の土坑とピット群

(第37～41図 PL 18～22・25)

概要 2面に於いては土坑18基、ピット26基を確認、調査した。

このうち2区西部は土坑・ピットの集中域で、1～13号土坑、1～4・6～11・17・18・24・25号ピットの土坑13基、ピット14基が集中的に見られた。2区中部は西部近接部に分布が見られ、14・20号土坑、5・12～15号ピットの土坑2基、ピット5基が確認された。これに対して2区東部での分布は希薄で、15・17号土坑、16号ピットが僅かに確認できたに過ぎなかった。一方、3区は南西部に集中的な分布が見られ、17・18号土坑と19～23・26号ピットがあった。しかし3区他区域では土坑、ピットを確認することはできなかった。

本土坑・ピット群では幾つかの重複関係が見られたのであるが、3号土坑が4号土坑、17号土坑が18号土坑を切り、一方11号土坑は11号ピットに切られ、8号ピットが7・9号ピットに切られる他、14号ピットが13号ピット、24号ピットが25号ピットを切っていた。また他種類の遺構との重複では、26号ピットが堀遺構である9号溝を切っていたのであるが、10号土坑が1号溝、17号ピットが2号溝、19～23号ピットが1号堅穴建物、23号ピットは7号溝と重複関係にあるもの新旧関係を特定することはできなかった。

一方これらの土坑、ピット群の掘削意図については、26号ピットが建物の柱穴と認識される他は特定できなかった。尚、長方形に類するプランの土坑

は中・近世にかけて比較的多く見られ、特に中世屋敷の分析から推して貯蔵穴である可能性が考えられる。また2区西部や3区西南部などに比較的集中するピット群については、形態的に中世掘立柱建物の柱穴に近い形態のものであり、その存在を想定したのであるが、残念ながら建物を抽出することはできなかった。

遺物 1・4・7・9・10・13・15・17・20号土坑、2・4・5・9・12・13・17号ピットから陶磁器・瓦等が出土したが、このうち7号土坑からは軟質陶器灯明皿(7坑-1)、陶器碗(7坑-2・3)、10号土坑からは不明鉄製品(10坑-1)、17号土坑からは陶器挿鉢(17坑-1)、20号土坑からは陶器挿鉢(20坑-1)、2号ピットからは砥石(2ピット-1)、13号ピットからは軟質陶器灯明皿(13号ピット-1)、17号ピットからは陶器壺(17ピット-1)や角釘(17ピット-2)の出土が見られた。

時期 本土坑・ピット群の各遺構については出土遺物の得られたものもあるが何れも破片であり、その

時期を明確にすることはできなかった。長方形プランの土坑のように形態的に中世に遡る可能性を有するものもあったが、大半は中世から近世の所産と把握するに留まった。しかし少なくとも7・17号土坑、13・17号ピットは近世以降の所産である。

規模 表1(土坑一覧)・表2(ピット一覧)参照。
構造 土坑のプランは6・15号土坑円形様、2・11～14・19号土坑が楕円形様、1・3・7・17・18号土坑が長方形様、4号土坑が方形、5号土坑が銀杏葉形、9号土坑が台形、10号土坑が三角形、20号土坑が棒状を呈する。底面形態は2・4号土坑が丸底、17・18号土坑が舟底形を呈する以外は平底を呈する。

ピットは26号ピットが円形様、1・6・8・10・12・15・17号ピットが楕円形、4・9・14・18・23号ピットが長方形様のプランを呈し、他は方形様のプランを呈す。掘削底面は2・10・12・21号ピットが尖形、1・3・6・8・9・13・14・18・19・25・26号ピットが平底で、他は丸底を呈する。

表1 2面土坑一覧

No.	径	高さ	平面形態	底面	位置	No.	径	高さ	平面形態	底面	位置
1	173 × 91	18	長方形	平底	2区西端北部	11	142 × 179	16	楕円形	平底	2区西南部
2	77 × 61	17	楕円形	丸底	2区西端北部	12	(52) × (40)	15	楕円形か	平底	2区西北部
3	84 × 65	5	隅丸長方形	平底	2区西端北部	13	(171) × (45)	10	楕円形	平底	2区西北部
4	(53) × (72)	21	隅丸方形か	丸底	2区西端北部	14	63 × 79	15	楕円形	平底	2区中北部
5	83 × 88	11	銀杏葉形	平底	2区西端北部	15	(38) × (96)	7	円形か	平底	2区東北部
6	111 × (111)	29	円形	平底	2区西端北部	17	358 × 118	65	隅丸長方形か	舟底形	3区南部中央
7	109 × 58	58	長方形	平底	2区西端南部	18	178 × (72)	41	隅丸長方形	舟底形	3区南部中央
9	71 × 82	18	台形	平底	2区西端南部	19	(85) × (94)	38	楕円形か	平底	2区西端南部
10	102 × 68	8	隅丸三角形	平底	2区西端南部	20	96 × (150)	14	棒状	平底	2区西北部

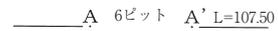
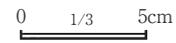
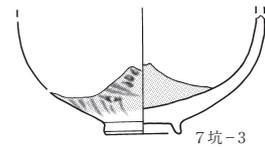
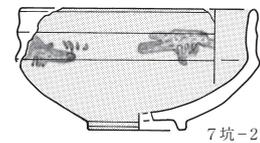
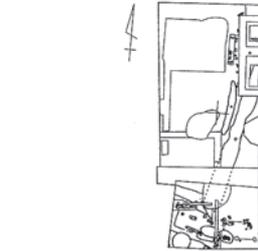
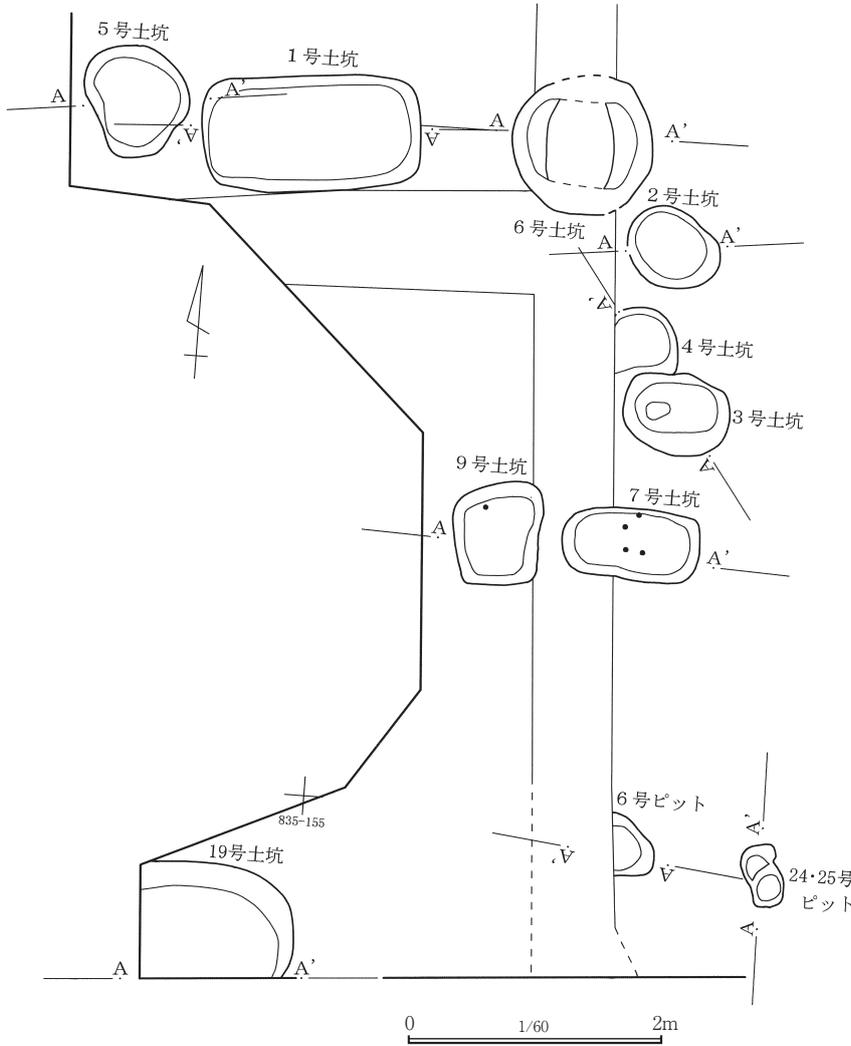
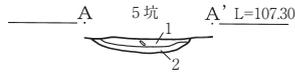
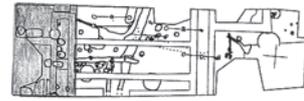
表2 2面ピット一覧

No.	径	高さ	平面形態	底面	位置	No.	径	高さ	平面形態	底面	位置
1	39 × 35	10	楕円形	平底	2区西北部	14	35 × 29	15	長方形	平底	2区中北部
2	25 × 30	20	隅丸方形	尖底	2区西北部	15	47 × 41	15	楕円形	丸底	2区中北部
3	41 × 47	15	隅丸方形	平底	2区西北部	16	40 × 41	14	方形	丸底	2区東部
4	52 × (59)	22	隅丸長方形	丸底	2区西北部	17	47 × 40	42	楕円形	丸底	2区西南部
5	37 × 39	39	隅丸方形	丸底	2区中西部	18	54 × (42)	8	隅丸長方形	平底	3区西南部
6	(42) × (51)	28	楕円形か	平底	2区西端南部	19	24 × 24	7	隅丸方形	平底	3区西南部
7	(39) × 39	21	隅丸方形	丸底	2区西南部	20	(27) × 31	13	隅丸方形	丸底	3区西南部
8	31 × 26	15	楕円形	平底	2区西南部	21	27 × 27	14	隅丸方形	尖底	3区西南部
9	39 × 31	20	隅丸長方形	平底	2区西南部	22	23 × 27	14	隅丸方形	丸底	3区西南部
10	28 × 22	20	楕円形	尖底	2区西南部	23	37 × (28)	42	隅丸長方形	丸底	3区西南部
11	28 × 25	60	隅丸方形	丸底	2区南西部	24	30 × 37	37	方形	丸底	2区西南部
12	46 × 52	20	楕円形	尖底	2区中西部	25	26 × 36	46	方形	平底	2区西南部
13	(39) × (35)	7	隅丸方形	平底	2区中北部	26	53 × (29)	84	円形か	平底	3区南西部

第3章 発見された遺構と遺物

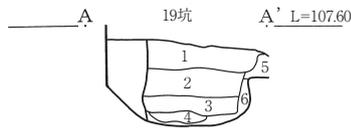
(5号土坑覆土)

- 1: 黒褐色土 (10YR3/2): 酸化鉄分・粘質土ブロック少量混入。粘性やや強、縮まりやや弱。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/3): 酸化鉄分中量混入。粘性やや強、縮まりやや弱。



(6号ピット覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 粘質土ブロック・炭化物粒を少量混入。粘性やや弱、縮まりやや強。
- 2: にぶい黄褐色土 (10YR4/3): 地山ブロック・炭化物粒を少量混入。粘性強、縮まりやや強。
- 3: 暗褐色土 (10YR3/4): 地山ブロック微量に混入。粘性強、縮まりやや弱。

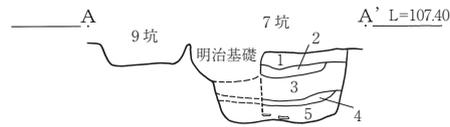


(19号土坑覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 炭化粒子等微量に混入。粘性弱、縮まり強。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/3): 酸化鉄分・炭化粒子少量混入。粘性弱、縮まり強。

- 性弱、縮まり強。
- 3: 黒褐色土 (10YR2/3): 酸化鉄分少量混入。粘性弱、縮まり強。

- 4: 黒褐色土 (10YR2/3): 細砂微量混入。粘性・縮まり弱。(地山層土)
- 5: As-B層
- 6: 黒褐色土 (10YR2/3): 白色・黄色細粒少量混入。粘性、縮まりやや強。



(7号土坑覆土)

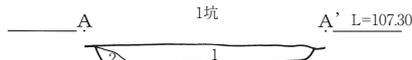
- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 粗砂微量混入。粘性やや弱、縮まりやや強。
- 2: 黒褐色土 (10YR2/2): 細砂微量に混入。粘性・縮まりやや弱。

- 3: 黒褐色土 (10YR3/2): 細砂を微量混入。粘性縮まりやや弱。

- 4: にぶい黄褐色土 (10YR4/3): 粘質土ブロック少量混入。きめ細かく、粘性強、縮まりやや弱。
- 5: 黒褐色土 (10YR2/2): 細砂微量に混入。粘性やや強、縮まり弱。

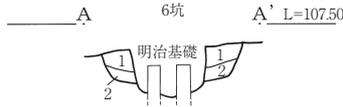
第37図 2面の土坑群 (その1、2区西部)

(平面図 次頁)



(1号土坑覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 炭化物粒・粗砂微量に混入。粘性やや弱、締まり強。
- 2: 黒褐色土 (10YR2/3): 径0.5～3cmの地山粘質土ブロック多量に混入。粘性締まり強。



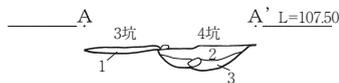
(6号土坑覆土)

- 1: にぶい黄褐色土 (10YR4/3): 粗砂少量混入。粘性・締まりやや弱。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/3): 粗砂少量混入。粘性・締まりやや弱。



(2号土坑覆土)

- 1: 黒褐色土 (10YR3/2): 炭化物粒・粗砂微量に混入。粘性やや弱、締まり強。
- 2: 黒褐色土 (10YR2/3): 酸化鉄分中量混入。粘性・締まりやや強。
- 3: 黒褐色土 (10YR2/2): 酸化鉄分・粘質土ブロック中量混入。粘性・締まりやや強。



(3号土坑覆土)

- 1: 黒褐色土 (10YR2/3): 細砂多量に混入。粘性弱く、締まり強。

(4号土坑覆土)

- 2: 暗褐色土 (10YR3/3): 炭化物粒・粗砂を少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 3: 黒褐色土 (10YR2/3): 細砂少量混入。粘性やや強、締まりやや弱。

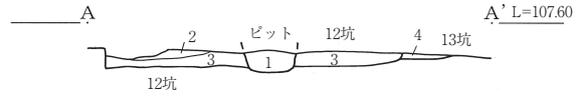


(24号ピット覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂・炭化物粒を少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 2: 黒褐色土 (10YR3/2): 細砂・炭化物粒微量に混入。粘性やや強、締まりやや弱。

(25号ピット覆土)

- 3: 暗褐色土 (10YR3/3): 炭化物粒・粘質土ブロック中量混入。粘性・締まりやや強。
- 4: 暗褐色土 (10YR3/3): 粘質土ブロックを少量混入。粘性やや強、締まりやや弱。



(別遺構等覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。

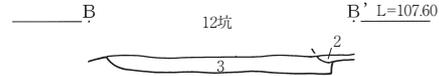
- 2: 灰黄褐色土 (10YR4/2): 細砂少量混入。粘性弱、締まりやや強。

(12号土坑覆土)

- 3: 黒褐色土 (10YR3/2): 多量の黒色土・褐色土ブロックと少量の細砂混入。粘性弱、締まりやや弱。

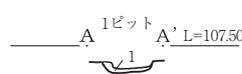
(13号土坑覆土)

- 4: 黒褐色土 (10YR3/2): 細砂中量混入。粘性弱、締まりやや強。



(13号土坑覆土)

- 1: 黒褐色土 (10YR3/2): 細砂中量混入。粘性・締まりやや強。



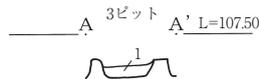
(1号ピット覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/4): 細砂多量に混入。粘性弱、締まりやや弱。



(2号ピット覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂微量に混入。粘性やや弱、締まりやや強。



(3号ピット覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂・粘質土粒・炭化粒少量混入。粘性・締まりやや弱。



(5号ピット覆土)

- 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 炭化物粒・細砂を少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。

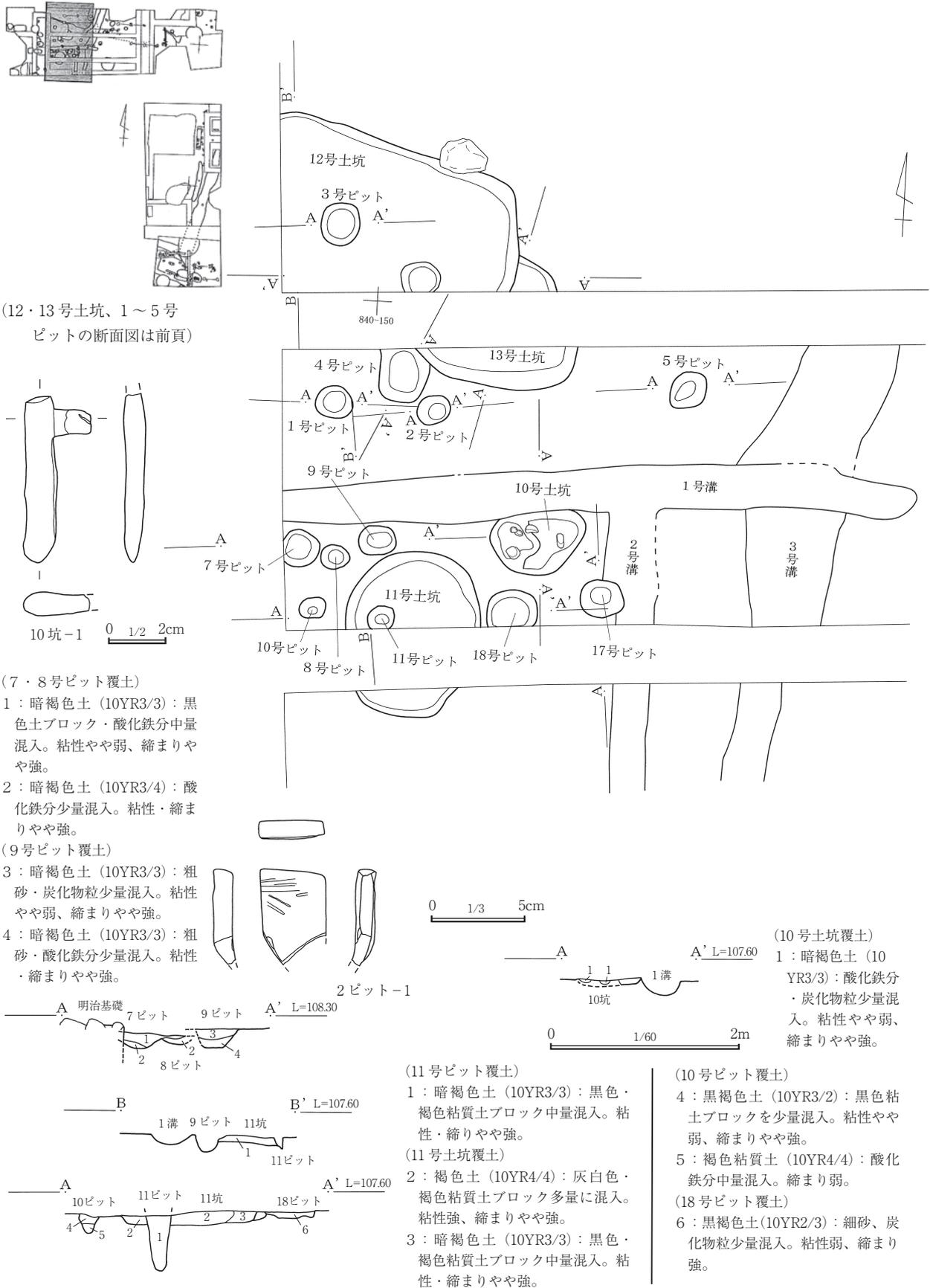
- 2: 暗褐色土 (10YR3/3): 炭化物粒中量混入。粘性やや強、締まりやや弱。

- 3: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂微量混入。粘性・締まりやや強。

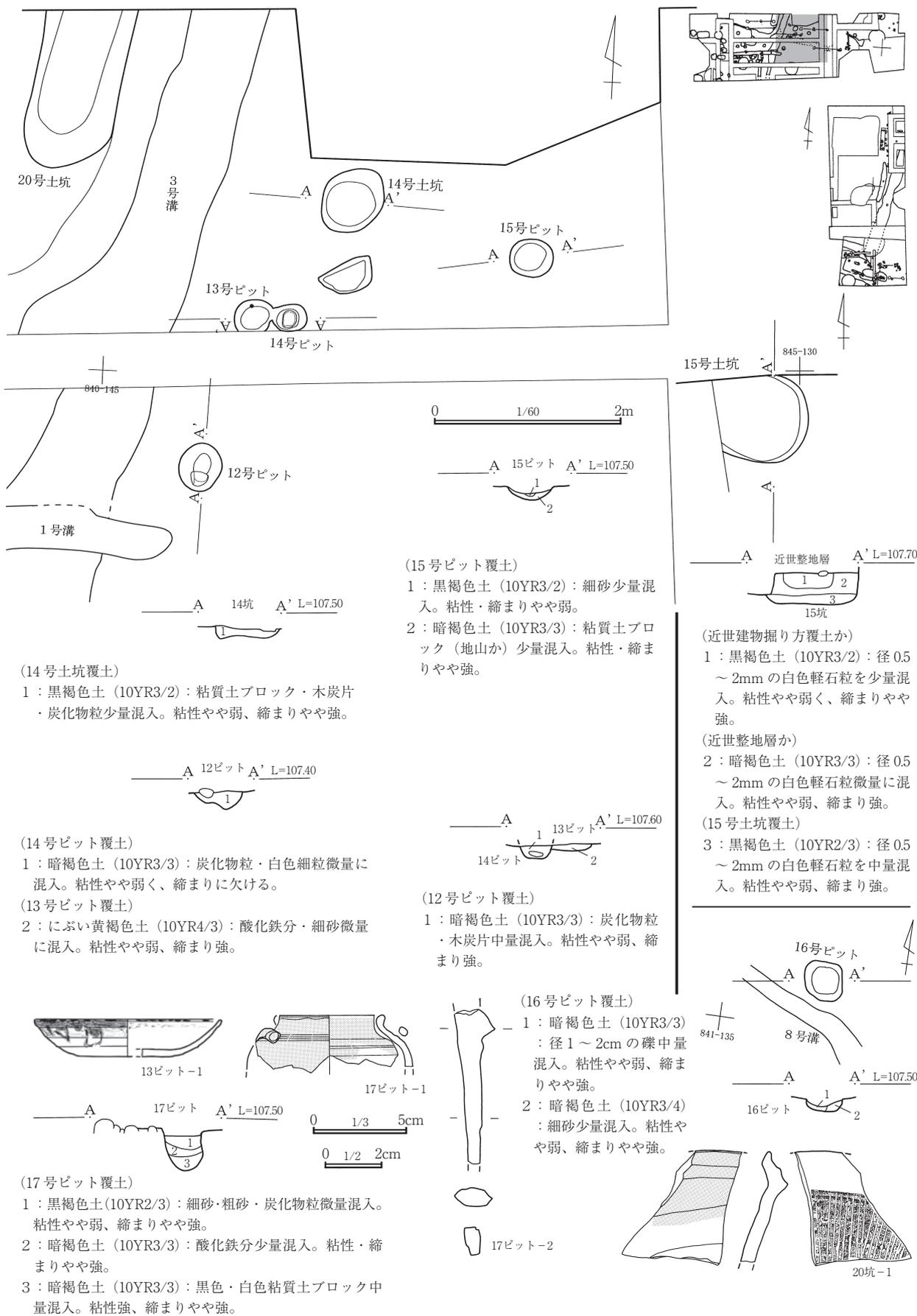


第38図 2面の土坑群 (その2、2区西部セクション)

第3章 発見された遺構と遺物

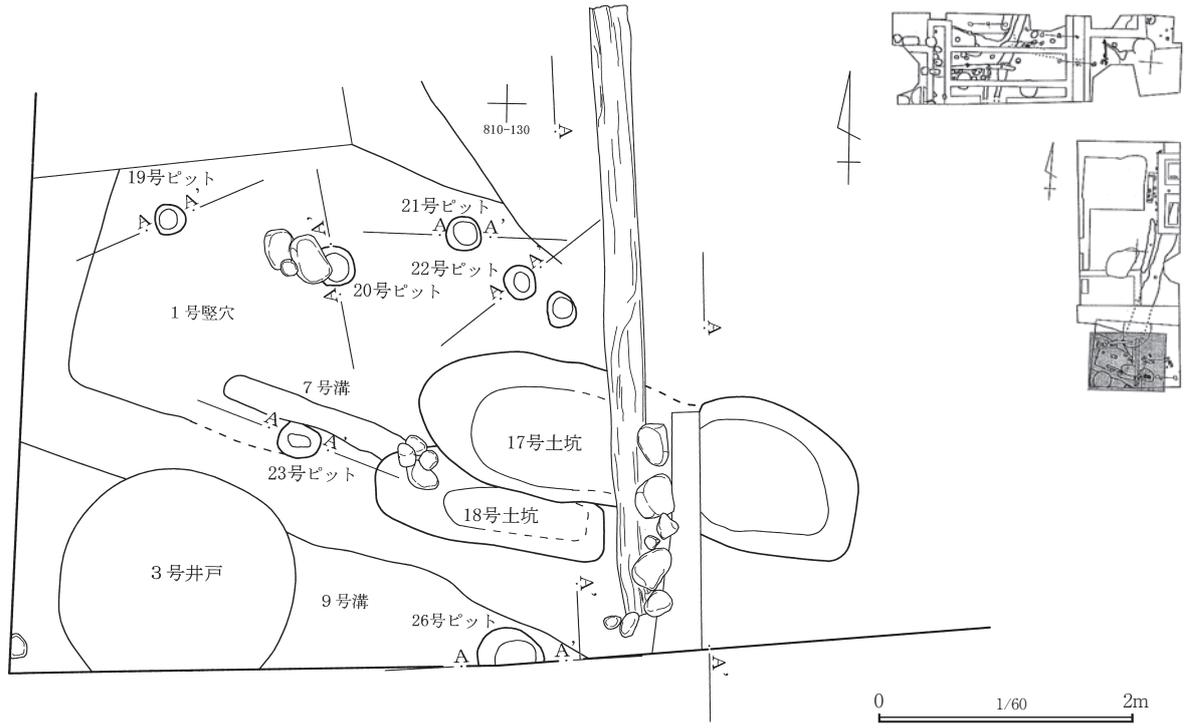


第39図 2面の土坑群 (その3、2区西部)



第40図 2面の土坑群と出土遺物 (その4、2区中・東部)

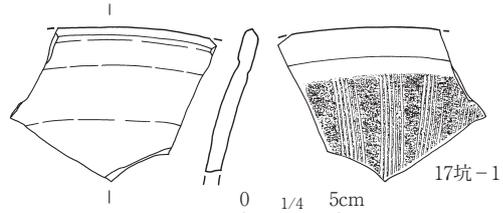
第3章 発見された遺構と遺物



19ピット A A'L=107.00
 (19号ピット覆土)
 1: 黒褐色土 (10YR2/3): 粘質土ブロック少量混入。粘性やや弱、縮まり強。

21ピット A A'L=107.00
 (21号ピット覆土)
 1: 黒褐色土 (10YR2/3): 酸化鉄分・炭化物粒少量混入。粘性やや弱、縮まり強。

23ピット A A'L=107.00
 (23号ピット覆土)
 1: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂少量混入。粘性・縮まりやや強。
 2: 黒褐色土 (10YR3/2): 細砂少量混入。粘性やや強、縮まりやや弱。

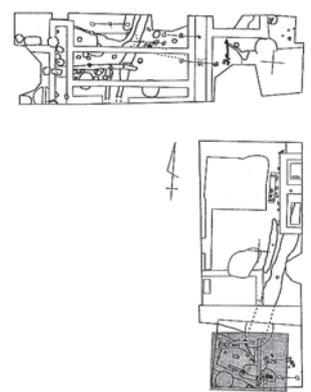


20ピット A A'L=107.00
 (20号ピット覆土)
 1: 黒褐色土 (10YR2/3): 黒色粘質土ブロック少量混入。粘性やや強、縮まり強。

22ピット A A'L=107.00
 (22号ピット覆土)
 1: 黒褐色土 (10YR2/3): 焼土ブロック微量に混入。粘性やや弱、縮まり強。
 2: にぶい黄褐色土 (10YR4/3): 黒色土ブロック少量混入。粘性やや強、縮まりやや弱。

(17号土坑覆土)
 1: 灰黄褐色細砂 (10YR 4/2): 酸化鉄分少量混入。粘性弱、縮まりやや弱。
 2: 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土・砂の混土: 粘性・縮まりやや強。
 3: 褐灰色細砂 (10YR4/1): 酸化鉄分少量混入。粘性弱、縮まりやや弱。
 4: 黒褐色細砂 (10YR3/2): 酸化鉄分微量混入。粘性・縮まり弱。
 (18号土坑覆土)
 5: 暗褐色土 (10YR3/3): 酸化鉄

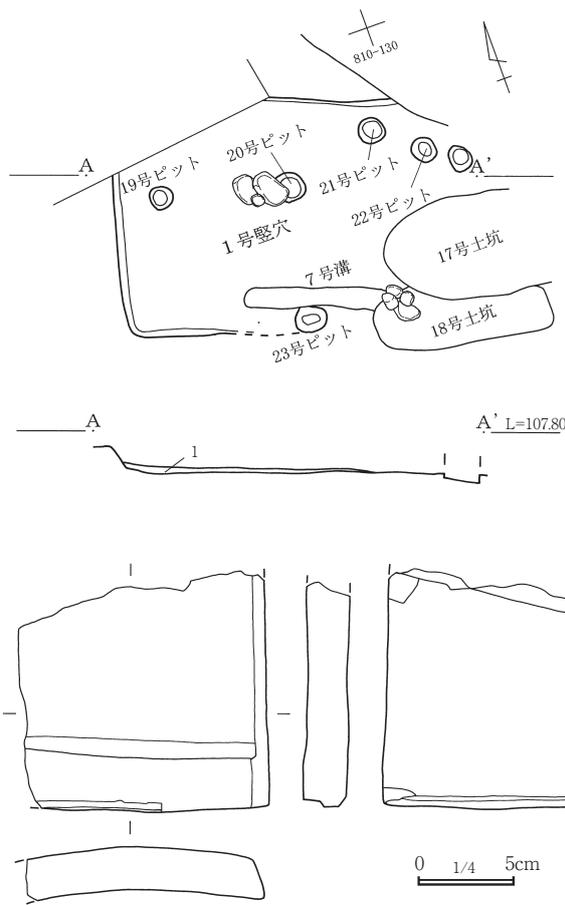
26ピット A A'L=107.30
 (26号ピット柱痕)
 1: 灰褐色土 (7.5YR4/2): 部分的に酸化鉄入る。浅黄色・灰黄褐色シルト小ブロック混入し、黒色粘質シルト若干混入。粘性あり。
 2: 褐灰色土 (10YR4/1): 黒色粘質シルト、酸化鉄混入。浅黄色土小ブロック少量混入。やや砂質。やや粗で粘性ややあり。



分・炭化物粒微量に混入。粘性・縮まりやや強。
 6: 黒褐色土 (10YR3/2): 径1~2cmの灰黄褐色土と酸化鉄分量混入。粘性やや強、縮まりやや弱。
 (ピット覆土)
 7: 暗褐色土 (10YR3/3): 細砂少量混入。粘性・縮まりやや強。
 (削平面覆土)
 8: 暗褐色土 (10YR3/3): 酸化鉄分・白色軽石粒少量混入。粘性やや強、縮まり強。

(26号ピット覆土)
 3: 灰黄褐色土 (10YR4/2): 浅黄色・灰白色シルトと黒色粘質シルト多く混入。酸化鉄粒混入。
 4: 黄灰色土 (2.5Y4/1): 混入物3層に似るが量少ない。粘性あり。
 5: 暗灰黄色土 (2.5Y5/2): 3層の混入物と4層土ブロック混入。粘性あり。
 6: 黒褐色粘質土 (10YR3/2): 黒色粘質シルト、明黄褐色ローム小ブロック若干混入。

第41図 2面の土坑群 (その5、3区南部)



第42図 1号竖穴遺構と出土遺物

11 1号竖穴遺構 (第42図 P L 17・26)

概要 本遺構は3区南西部に在り、重複する17・18号土坑、19～23号ピットとの新旧関係は不明である。また遺存状況は良好とは言い難く東側は欠失している。

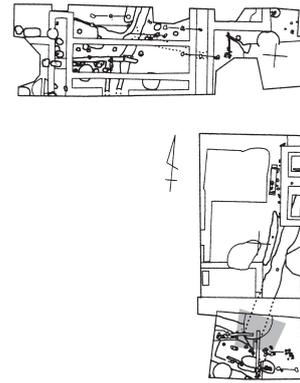
本遺構は竖穴建物の可能性を有するが、柱穴も見られなかったため竖穴建物として認識するには至らず、掘削意図を明確にすることはできなかった。

遺物 本建物からの出土遺物は僅かで、軒平瓦 (1) が出土している。

時期 本遺構の時期特定はできなかったが、出土瓦が本葺き型と見られることから、近世前・中期所産の可能性が考慮される。

規模 径：(355) × 248cm 深さ：24cm

構造 本遺構はその東端部が失われている



(1号竖穴遺構覆土)

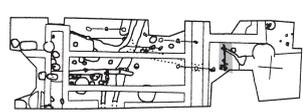
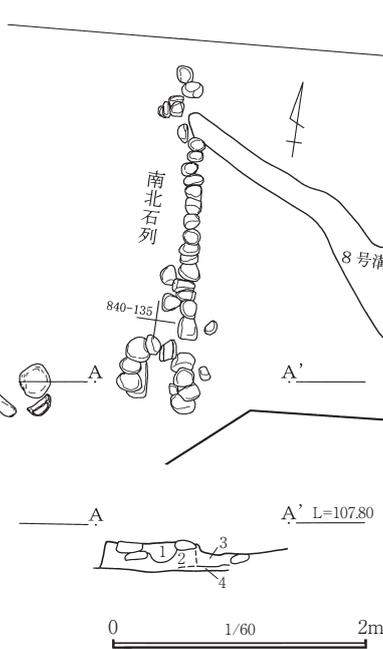
1：暗褐色土 (10YR3/4)：粘質土小ブロック少量混入。粘性やや強、締まり強。

ので全容は詳らかでないが、主軸は、北に対して72°西を向いており、プランはほぼ長方形の整ったものであった。
底面は平底をなしているが、上述のように柱穴は確認できず、掘り方も認められなかった。

12 南北石列遺構 (第43図 P L 21)

概要 本遺構は2区東部に在り、2面への掘削途中に於いてその下位層で確認された。8号溝と重複するが新旧関係は特定できなかった。

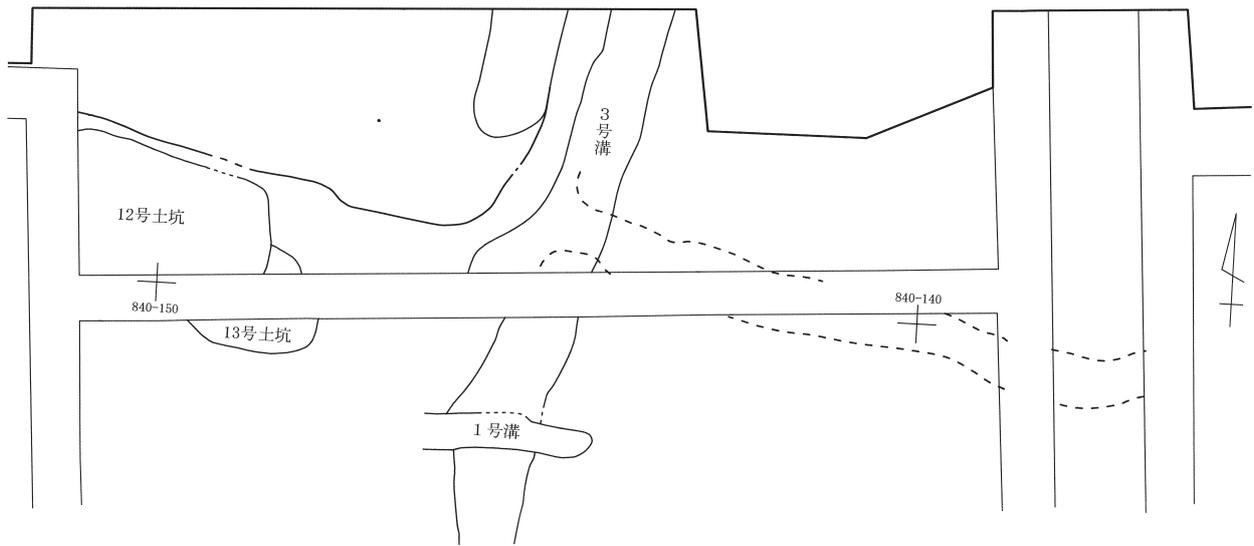
土層断面の観察から東側に段差のあったことが窺われ、何らかの区画を示すものか基礎跡と思慮されるが、明確な設置意図等は特定できなかった。



(南北石列地山層)

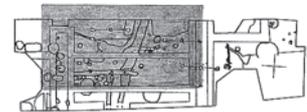
- 1：黒褐色土 (10YR2/3)：中量の炭化物粒・木炭片、少量の細砂・粗砂混入。
- 2：黒褐色土 (10YR2/3)：細砂微量に混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 3：黒褐色土 (10YR2/3)：炭化物粒・細砂少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 4：黒褐色土 (10YR2/3)：細砂極微量に混入。粘性・締まりやや強。

第43図 南北石列遺構



(水田耕土)

黒褐色土 (10YR3/2) : 酸化鉄分多量に、細砂少量混入。粘性やや強く縮まりあり。



遺物 本遺構からの出土遺物は認められなかった。

時期 明瞭ではないが、確認位置から推して近世前・中期の所産である可能性が高いものと思慮される。

規模 長さ：277cm 幅：66cm

構造 本遺構は直線的に並べられたやや小型の河床礫から成る。尚、南端部に於いては心々間距離で44cmの間隔を以って2列が設けられている。

断面観察から上述のように石列東側には段差が在り、また2列の石列の間に溝の在った可能性が窺われる。尚、礫の設置に際しては特に掘り込み等は行われず、整地作業と一括で施工されたものと思慮される。

13 中世水田 (第44図 P L 21)

概要 2区2面北部では耕作面は確認されなかったものの、耕作によって地山に畦畔の痕跡がプリントされる所謂擬似畦畔が検出され、1面の水田址の遺存が明らかとなった。

本水田址は5・6号建物や3号溝、12・13号土坑、或いは13・14号ピットなどと重複関係にあるが、前3者よりは古い遺構であることが確認されたものの、後4者との新旧関係を特定するには至らなかった。また本水田址の下には3面で調査した10号溝

が埋没しており、一方、少なくとも調査区北端部では水田の基底部、即ち水田耕作がAs-B混入の黒褐色土に及んでいることも確認された。尚、

本水田址の耕作土は細砂が少量入る黒褐色土で、調査区北壁にあつては層厚10～18cmの土層として確認されている。

さて本水田址は上述のように擬似畦畔として確認されたものであったのであるが、遺存状態は良好とは言い難いものであった。北側は調査区外に伸びていて調査できなかったが、西側と南側は上述のように10号溝覆土に乗るものであった。しかし当該区域付近での土壌の識別が難しかったため、畦畔を見出すことはできなかった。一方、東側も後世の掘削によって畦畔が広い範囲で掘平されていたため、僅かに畦畔の基底部を確認するに留まったのである。こうした遺存状況もあって、確認された水田の広がりや形状等を十分に把握することはできなかったのである。

第44図 中世水田全景



尚、10号溝を隔てた南側の区域に畦畔の続きは確認できなかった。このため本水田址は本節冒頭に述べた2区南西部の微高地上には延伸しないものと判断されたのであり、即ち本水田址は低地部に耕作された遺構であったと思慮されるのである。

遺物 本水田址に直接関連すると見られる出土遺物は認められなかった。

時期 このように出土遺物もなく、また耕土の観察所見からも本水田址の時期を特定することはできなかった。しかし近世中・前期の所産と判断された5号建物より古い段階の遺構であり、後述する10号溝よりは新しく、As-B混入土を掘って造られているものであることから、凡そ中世～近世前期の所産として把握されるものである。但し上述のように水田耕作面下位層がAs-B混入土であるため、As-B降下後の復旧水田ではない、即ち12世紀に上るものではないものと判断されるのである。

ところで本遺跡付近は、古代より中世前葉期まで利根川西岸地域と一体の地域であった。伝承によれば往時、本遺跡の西方、現利根川の流路内には車川くるま（或いは久留馬川くるとま）という小規模河川が流れていたとされ、本遺跡に西接する前橋城三ノ丸遺跡（見なし1区）に於いても南南東に流下する流路跡が確認されるなど現在とは異なった景観のあったことが知られている。しかし中世に入って利根川が本遺跡北方にある広瀬川ひろせ（比刀根川）の位置から現在の利根川的位置に変流したことによって、古い水系は地下水系も含めて分断されることになったのである。この利根川の変流の時期は確定していないが、15世紀前葉、一説には応永34年（1427）の水害を契機に始まったといわれ、前橋城城下町が当初旧利根川の断崖上に在ったことなどに照らせば、16世紀末

頃にかけて徐々に移行していったものと思慮されるのである。こうしたことから変流開始に伴って本遺跡付近での水利の確保が難しくなったことは明らかで、本水田址も比較的早い段階で水田耕作が放棄されたものと思慮されるのである。

以上の点を勘案すると、本水田址はAs-B降下後しばらくしてから開墾され、利根川変流開始後早い段階には耕作が放棄された。凡そ13・14世紀の所産の遺構として認識されるのである。

規模 範囲：14.4 × 4.6 m以上

畦畔：幅100cm 高さ：10cm

構造 上述のように本水田址の遺存状態は良好ではなく、調査区内に於いてもその全容を詳らかにすることはできなかったのであるが、以下のような若干の所見を得ることができた。

すでに述べたように、畦は耕土の失われた擬似畦畔として確認されたのであるが、その軸は北或いは東に対して時計回りに12°程傾くものであった。畦のうち南北走行のものは北寄りの部分が確認されたのであるが、残存部のやや南寄りから東側に伸びる畦があり、この分岐箇所から1.5m程南に下がった地点から西に伸びる畦が確認され、条理水田には依拠していないことが確認される。尚、畦は西側に伸びるものは大畦であった可能性は残るものの、全体として規模から推して大畦ではない。

また畦の側にはそれぞれ水田耕作面基底部が確認されている。その形状は長方形と推定されるが、残存範囲は北西側のものが6.9 × 3.2 m、北東側のものは7.3 × 4.5 mを測る。尚、土地の傾斜は北西から南東に向かっているが、基底部の高さは北西側のものが若干低く、他の3箇所は比較的近似したレベルにあった。

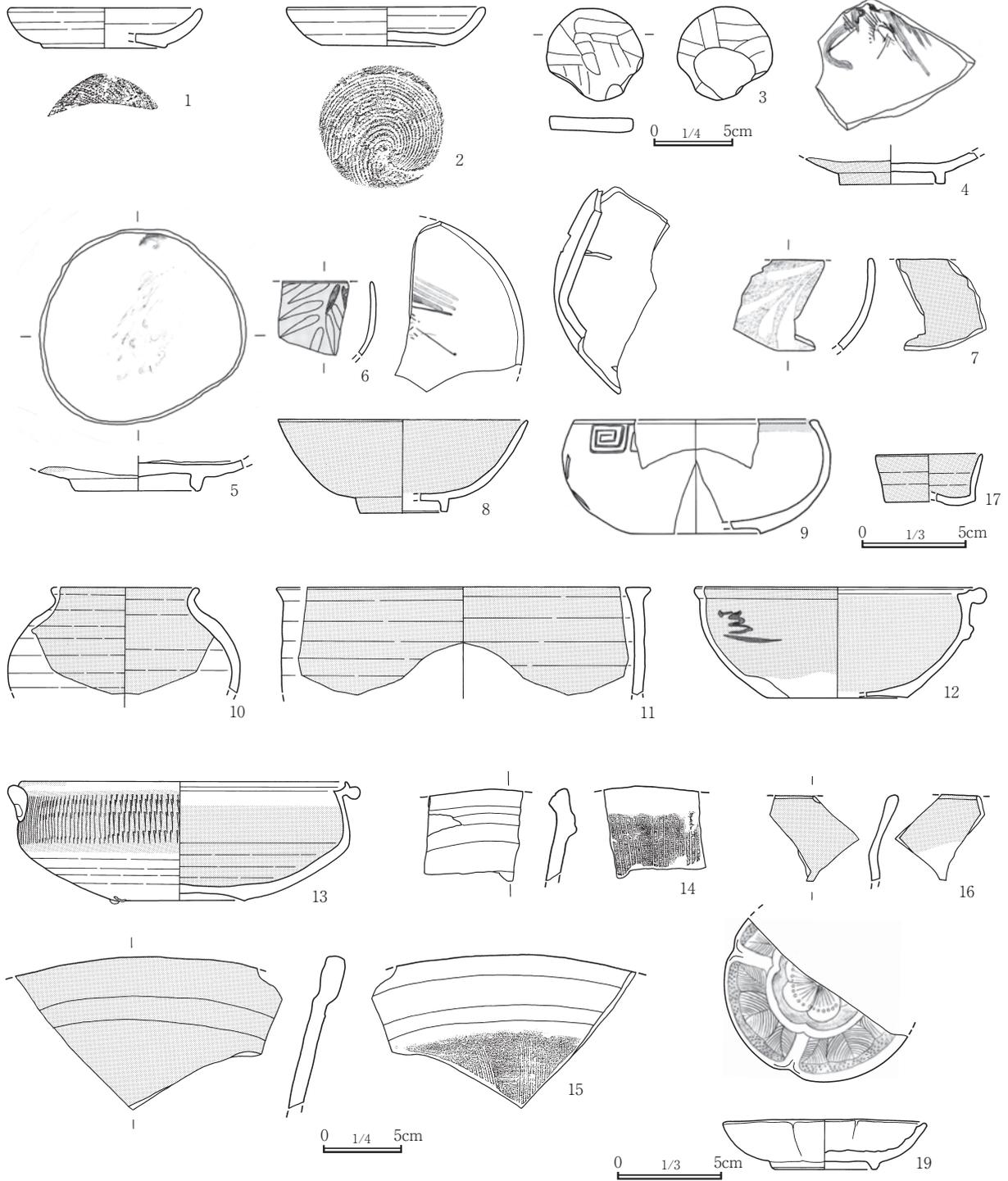
第4節 2面を中心とした遺構外の出土遺物

1 遺構外の出土遺物

(第45～56図 PL 25～32)

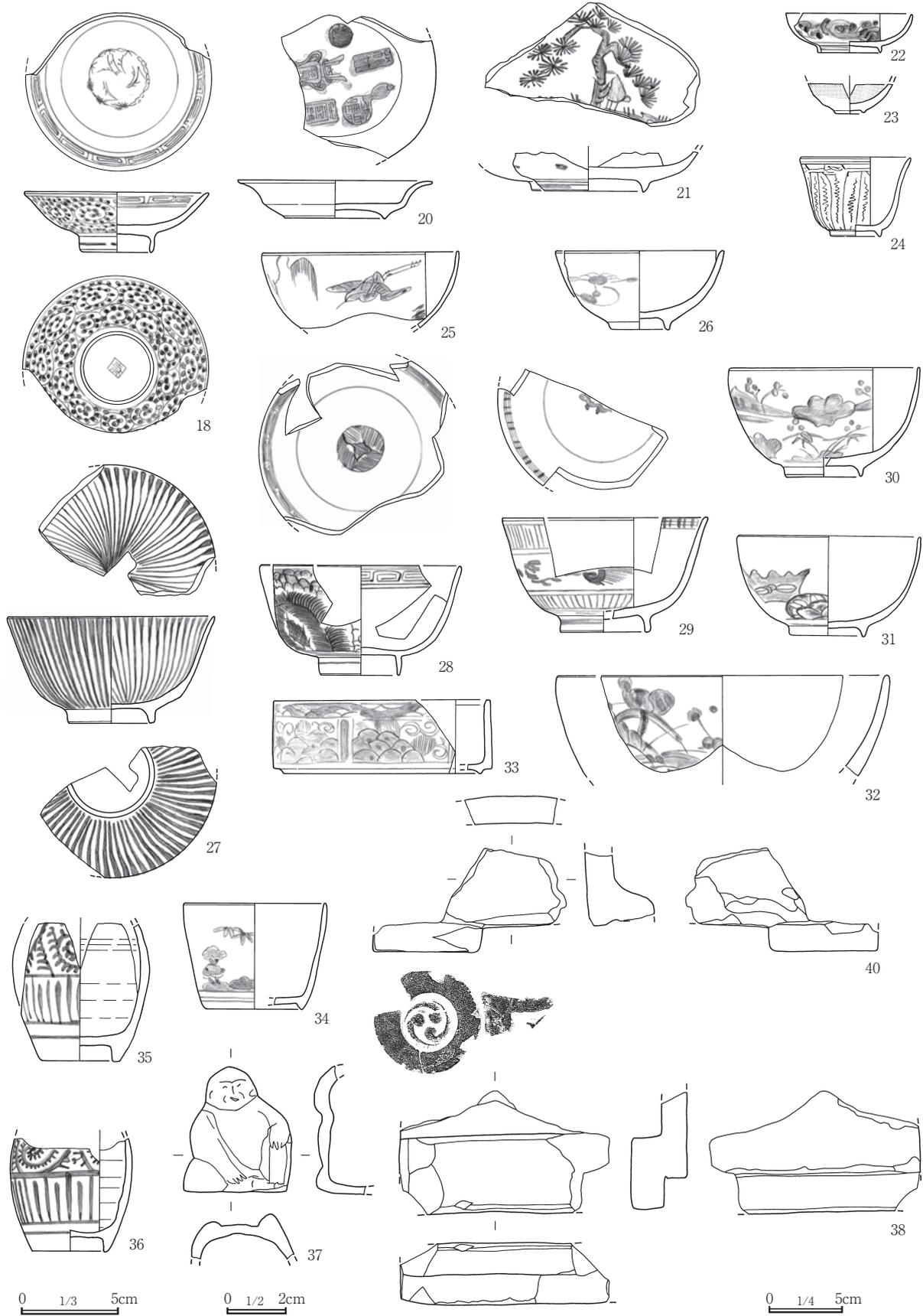
概要 調査上の1面から2面への掘削途中で多くの出土遺物が得られた。これらは1・2面の間層、特

に上位層からの出土品であったが、当該層は近世の客土を中心としつつも、一部裁判所旧庁舎建設時の掘削土も含まれたことから、1面や近代に属する遺物の混入も見られることとなった。しかし近世、近

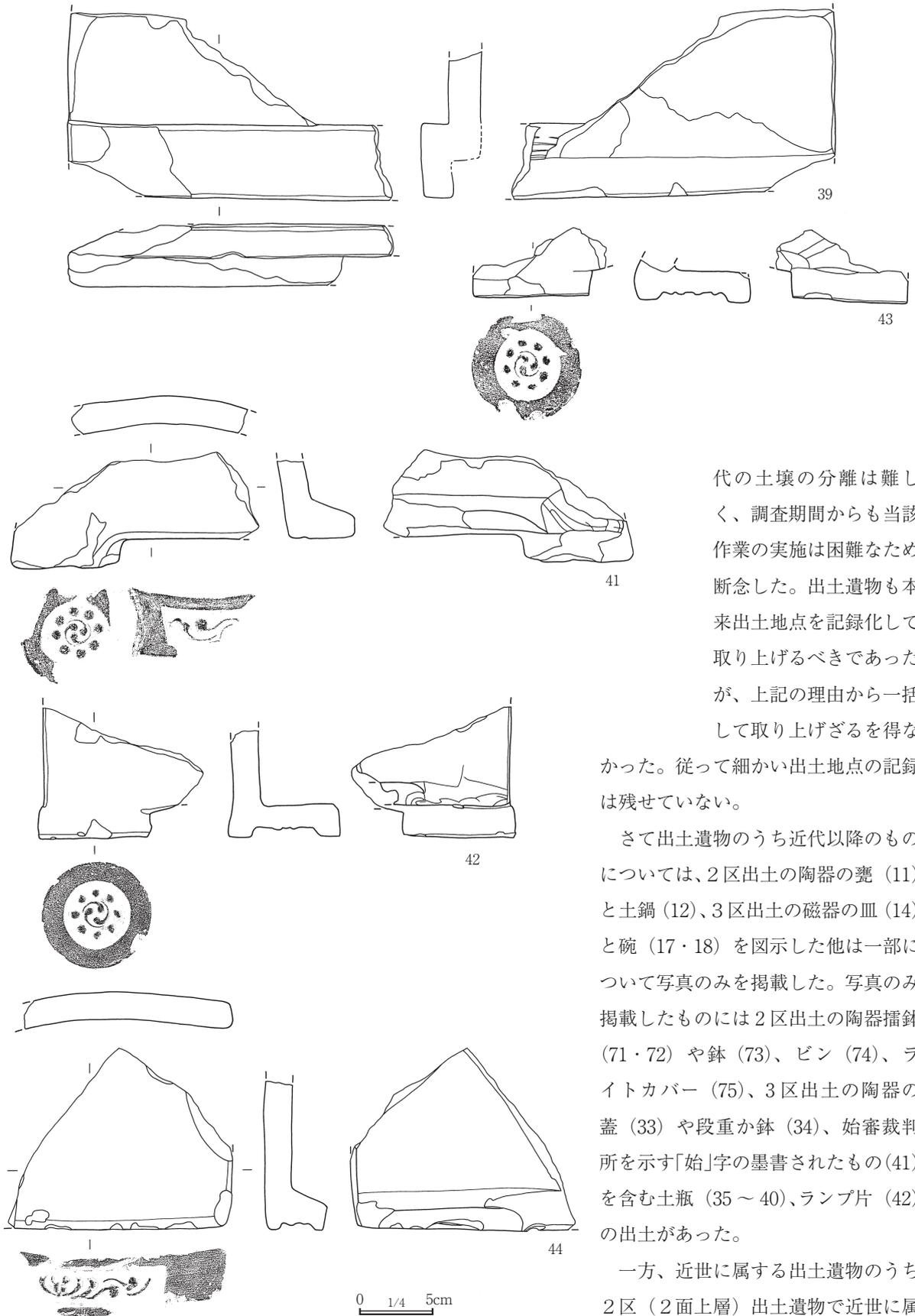


第45図 2区2面上層の出土遺物(その1)

第4節 2面を中心とした遺構外の出土遺物



第46図 2区2面上層の出土遺物（その2）

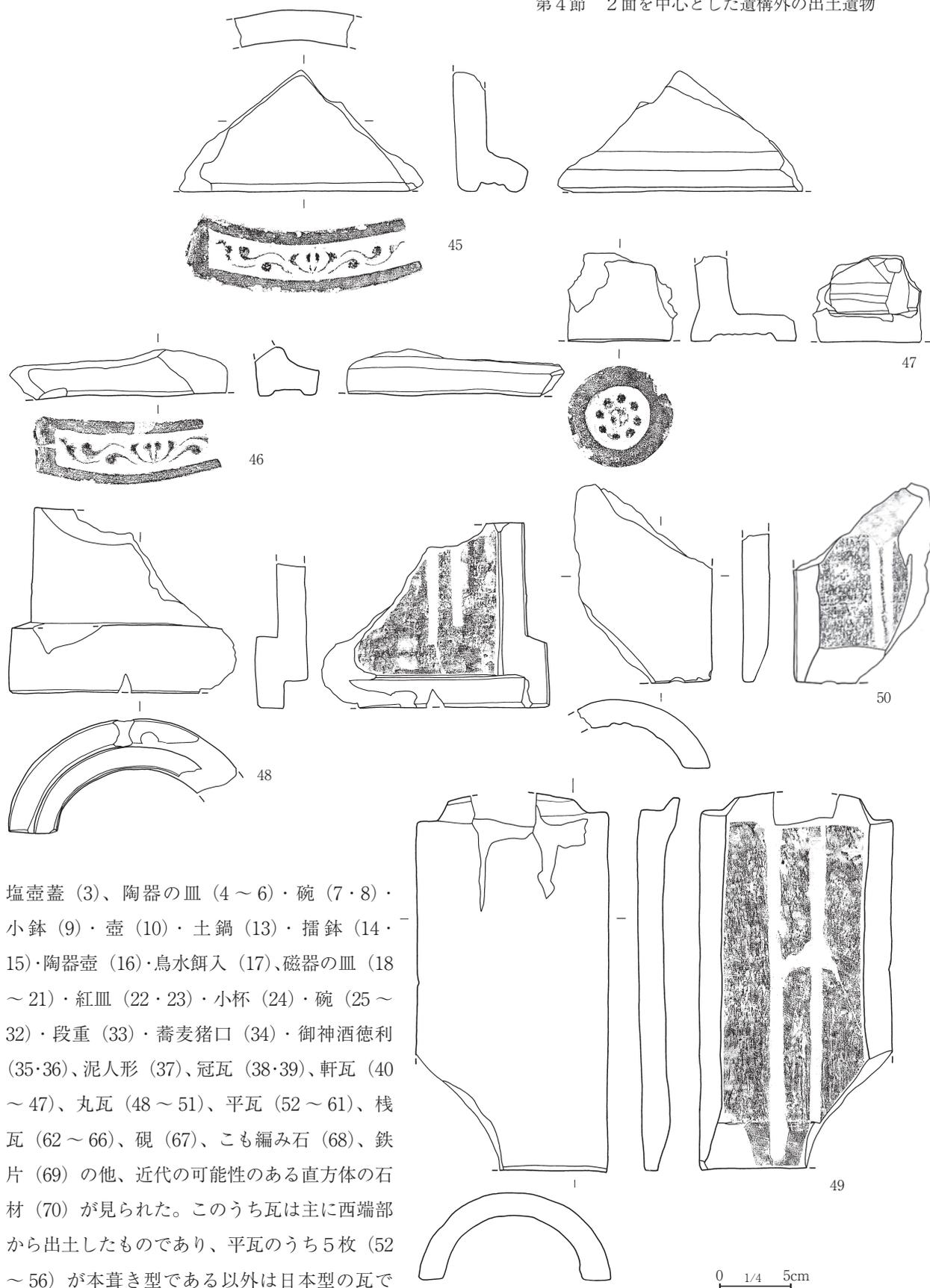


第47図 2区2面上層の出土遺物(その3)

代の土壌の分離は難しく、調査期間からも当該作業の実施は困難なため断念した。出土遺物も本来出土地点を記録化して取り上げるべきであったが、上記の理由から一括して取り上げざるを得なかった。従って細かい出土地点の記録は残せていない。

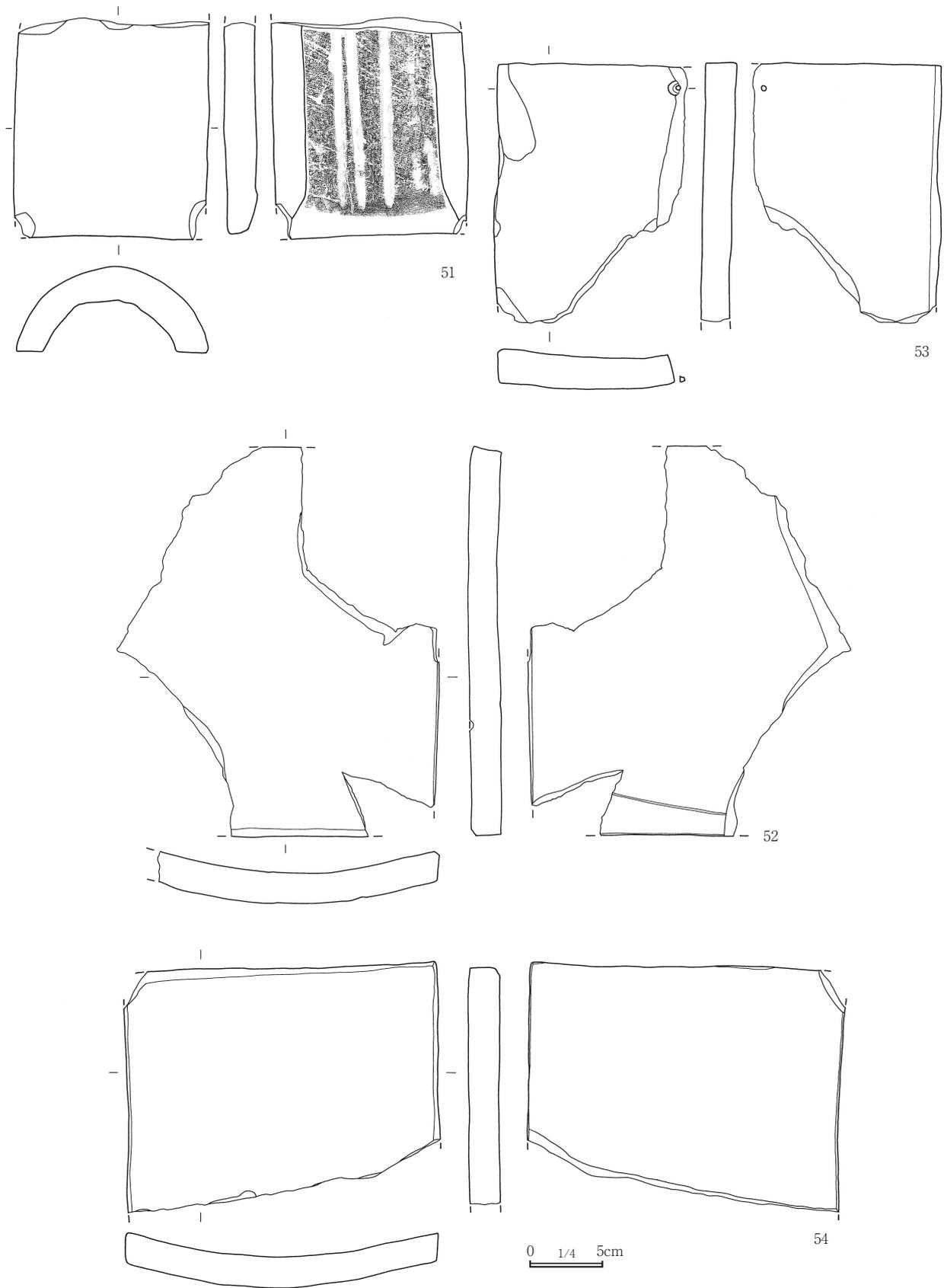
さて出土遺物のうち近代以降のものについては、2区出土の陶器の甕(11)と土鍋(12)、3区出土の磁器の皿(14)と碗(17・18)を図示した他は一部について写真のみを掲載した。写真のみ掲載したものには2区出土の陶器挿鉢(71・72)や鉢(73)、ピン(74)、ライトカバー(75)、3区出土の陶器の蓋(33)や段重か鉢(34)、始審裁判所を示す「始」字の墨書されたもの(41)を含む土瓶(35～40)、ランプ片(42)の出土があった。

一方、近世に属する出土遺物のうち2区(2面上層)出土遺物で近世に属するものにはかわらけ(1・2)や焼



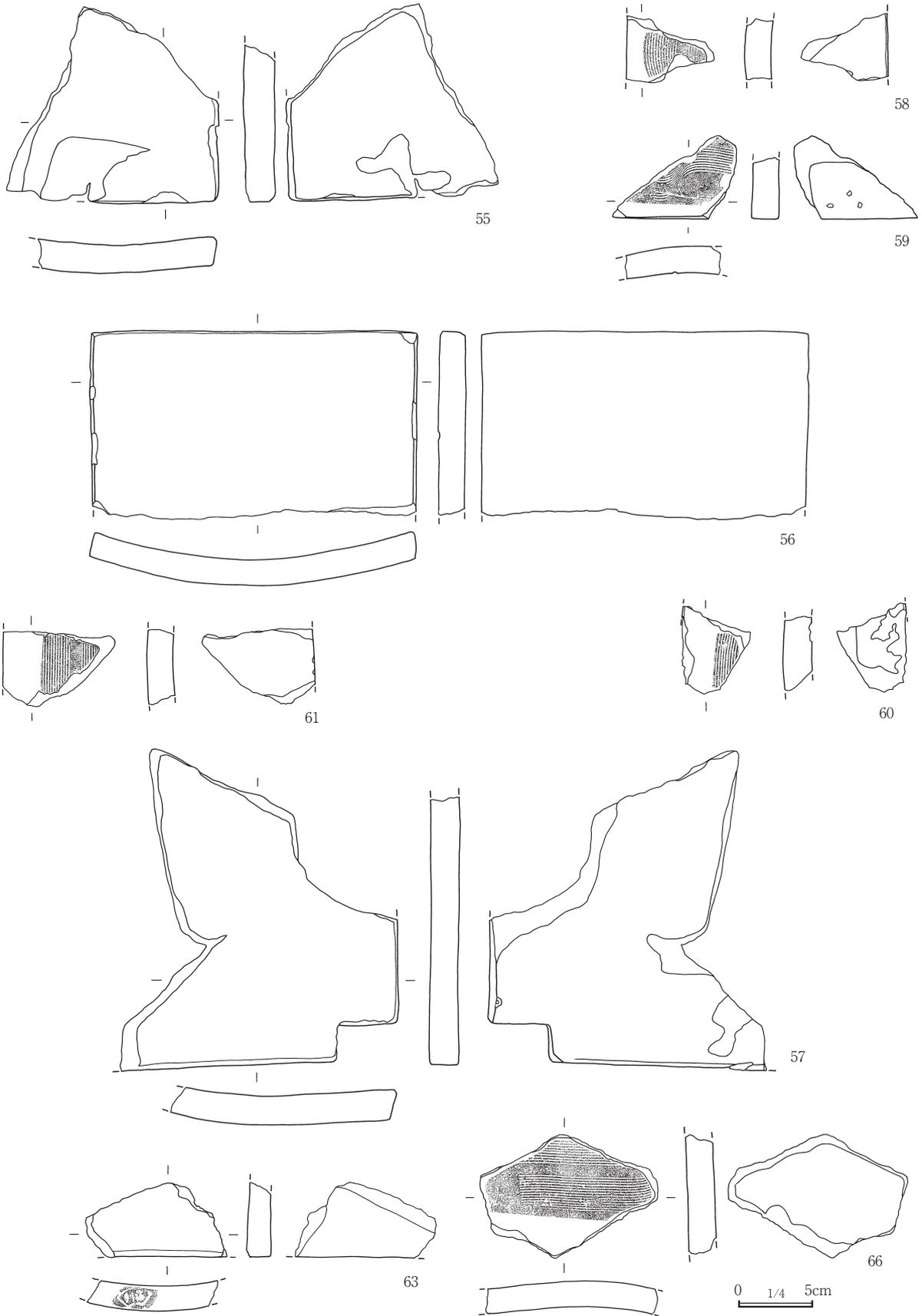
塩壺蓋 (3)、陶器の皿 (4～6)・碗 (7・8)・
 小鉢 (9)・壺 (10)・土鍋 (13)・播鉢 (14・
 15)・陶器壺 (16)・鳥水餌入 (17)、磁器の皿 (18
 ～21)・紅皿 (22・23)・小杯 (24)・碗 (25～
 32)・段重 (33)・蕎麦猪口 (34)・御神酒徳利
 (35・36)、泥人形 (37)、冠瓦 (38・39)、軒瓦 (40
 ～47)、丸瓦 (48～51)、平瓦 (52～61)、棧
 瓦 (62～66)、硯 (67)、こも編み石 (68)、鉄
 片 (69) の他、近代の可能性のある直方体の石
 材 (70) が見られた。このうち瓦は主に西端部
 から出土したものであり、平瓦のうち5枚 (52
 ～56) が本葺き型である以外は日本型の瓦で
 あった。また2区東部からは石白の上白 (東部
 -1) の出土も見られた。

第48図 2区2面上層の出土遺物 (その4)

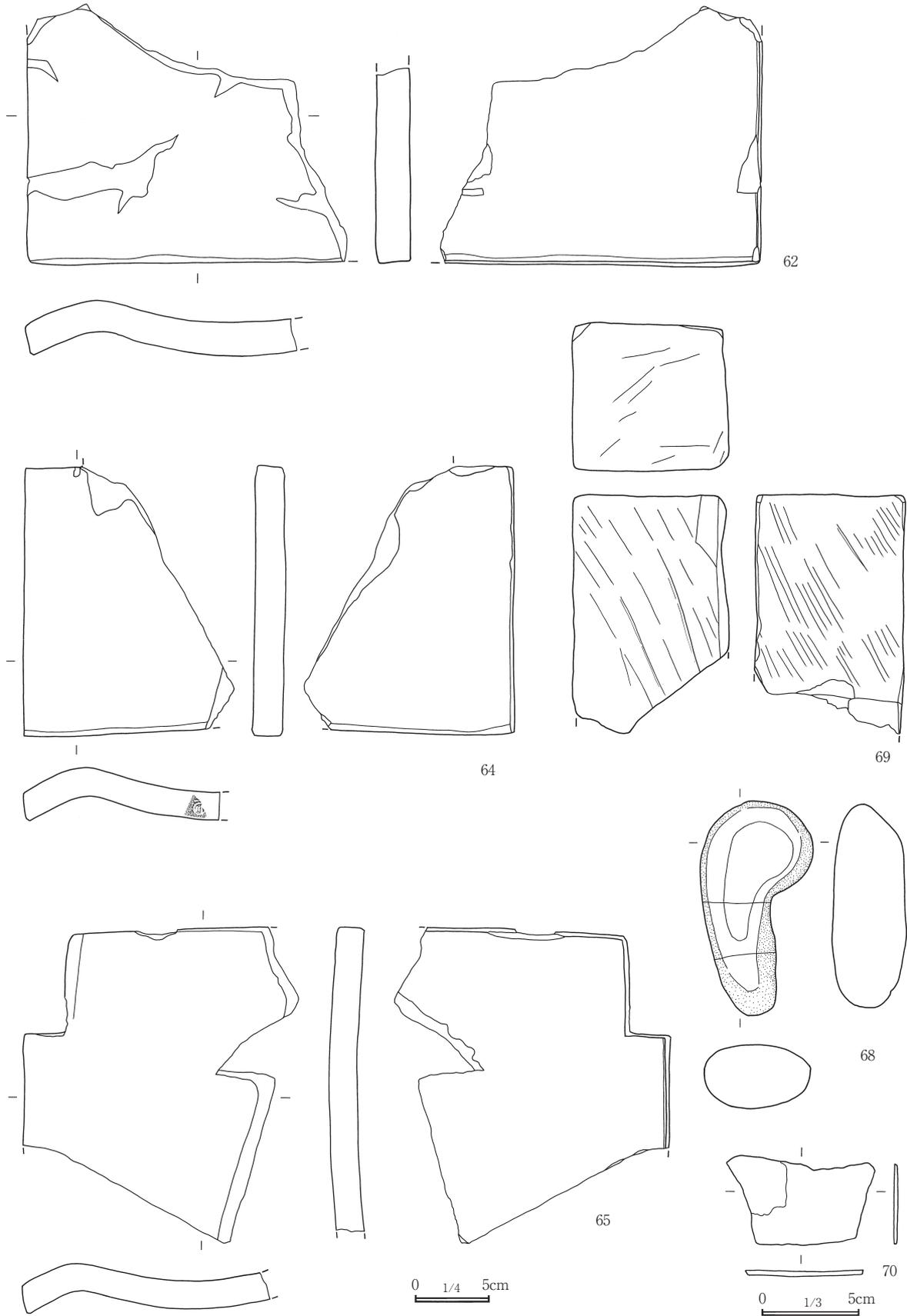


第49図 2区2面上層の出土遺物（その5）

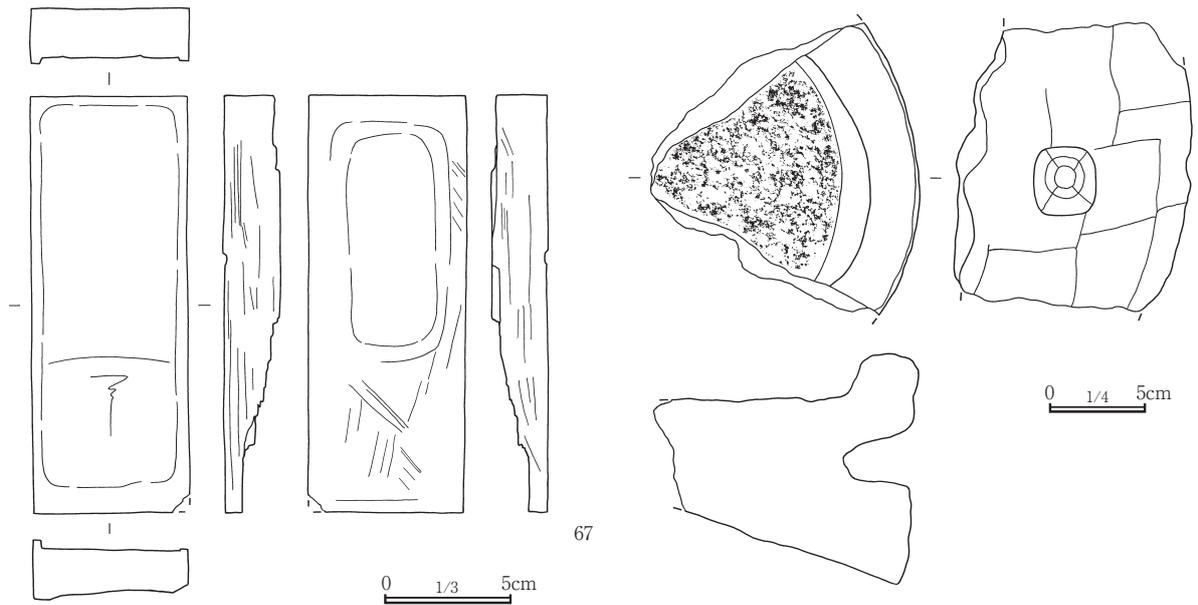
第4節 2面を中心とした遺構外の出土遺物



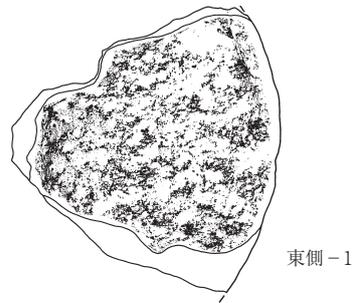
第50図 2区2面上層の出土遺物（その6）



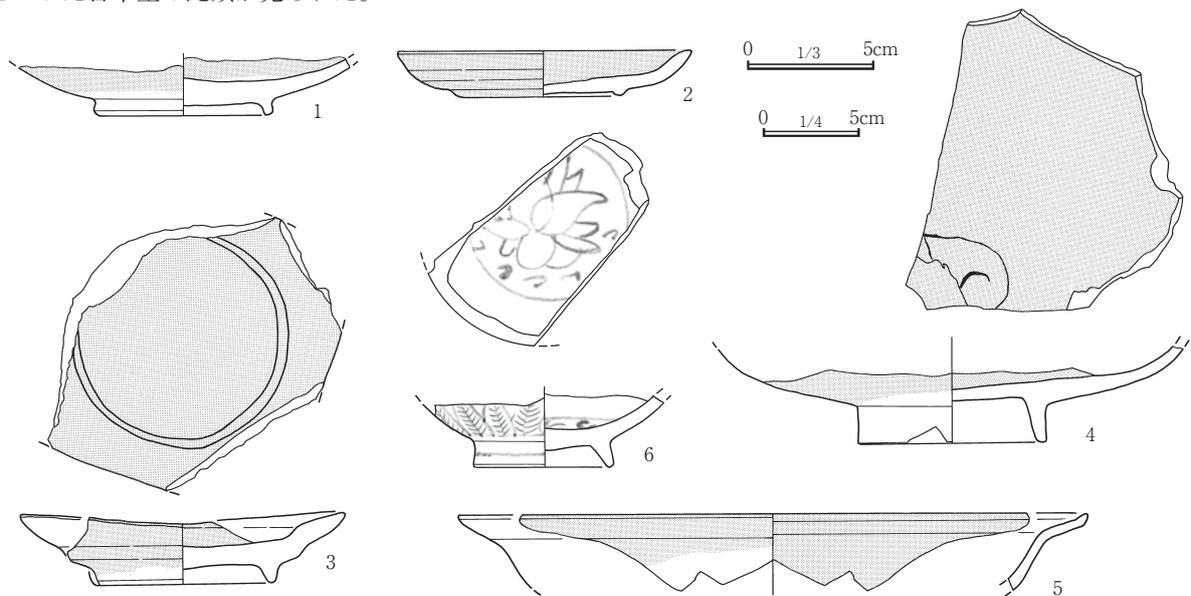
第51図 2区2面上層の出土遺物（その7）



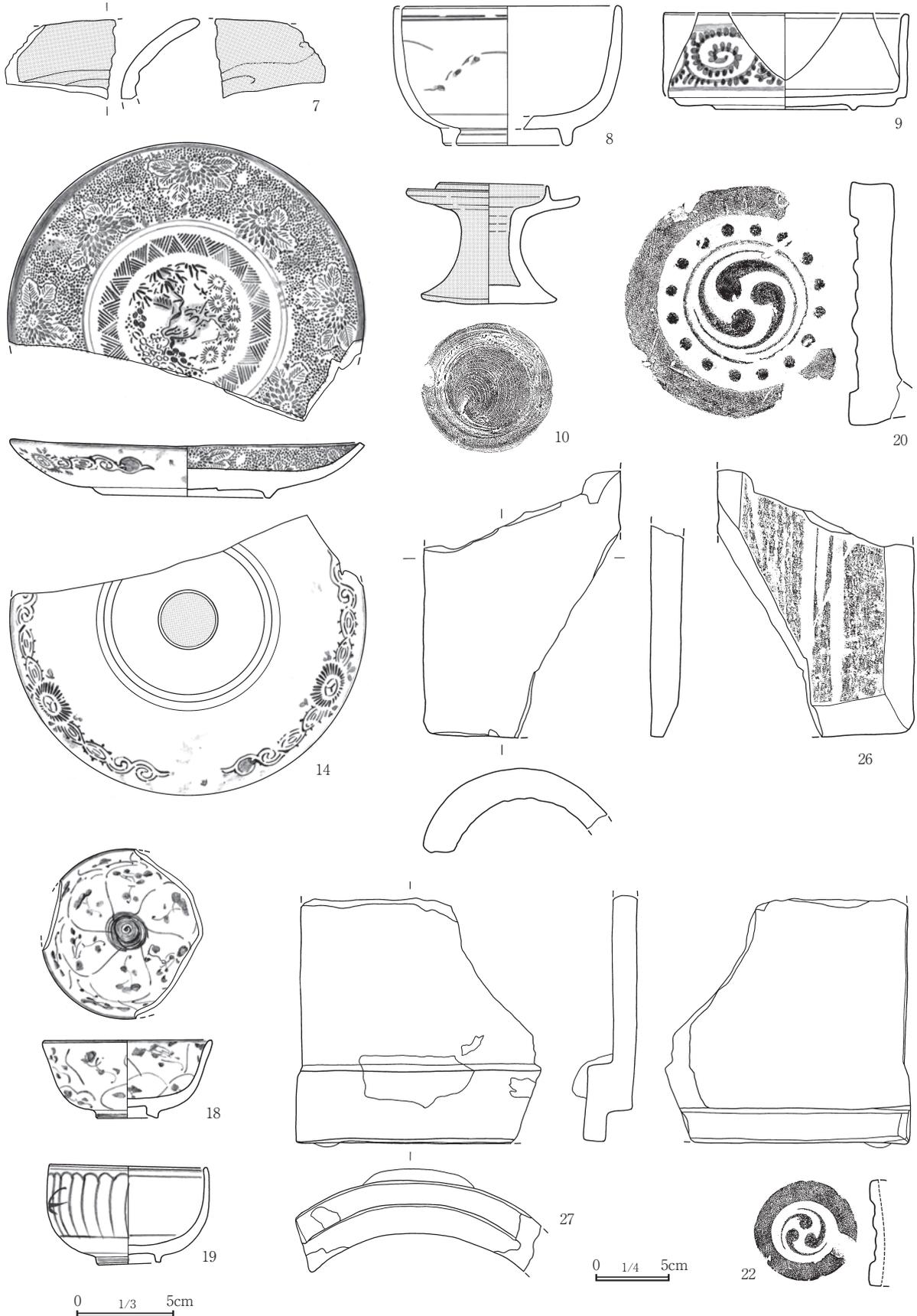
一方、3区上層からの出土遺物には近代所産の遺物の他、灰釉陶器皿(1)や凹石(32)のようなものも見られたが、近世所産の遺物としては陶器の皿(2~7)・碗(8)・段重(9)・灯明受皿(10・11)・雪平鍋蓋(12)・鉢(13)、磁器皿(14)、磁器碗(15・16・19)といった陶磁器類の他、軒丸瓦(20)、軒瓦(21~25)、丸瓦(26~28)、平瓦(29)、棧瓦(30・31)といった日本型の瓦類が見られた。



第52図 2区2面上層・東部の出土遺物(その8)

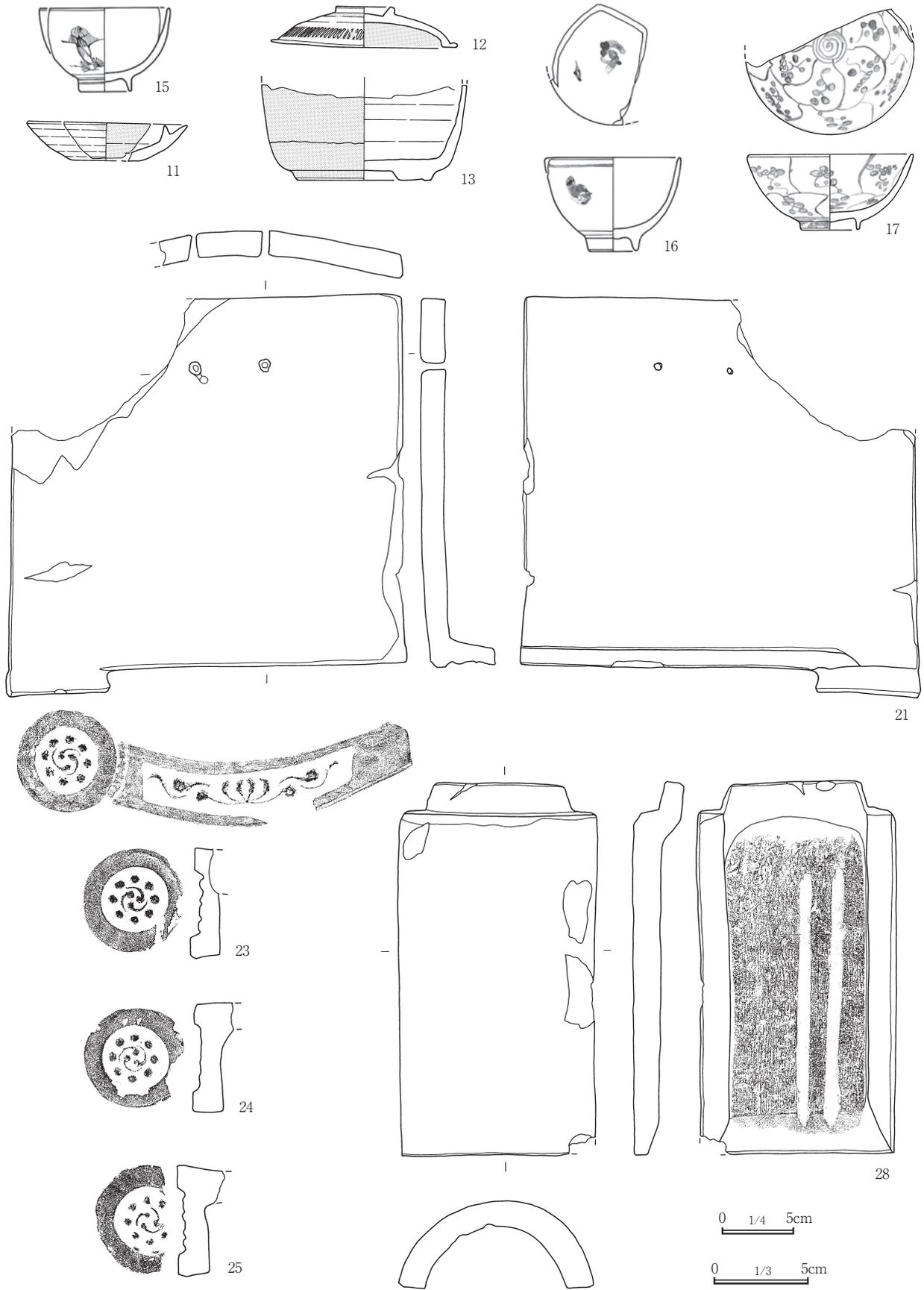


第53図 3区2面上層の出土遺物(その1)

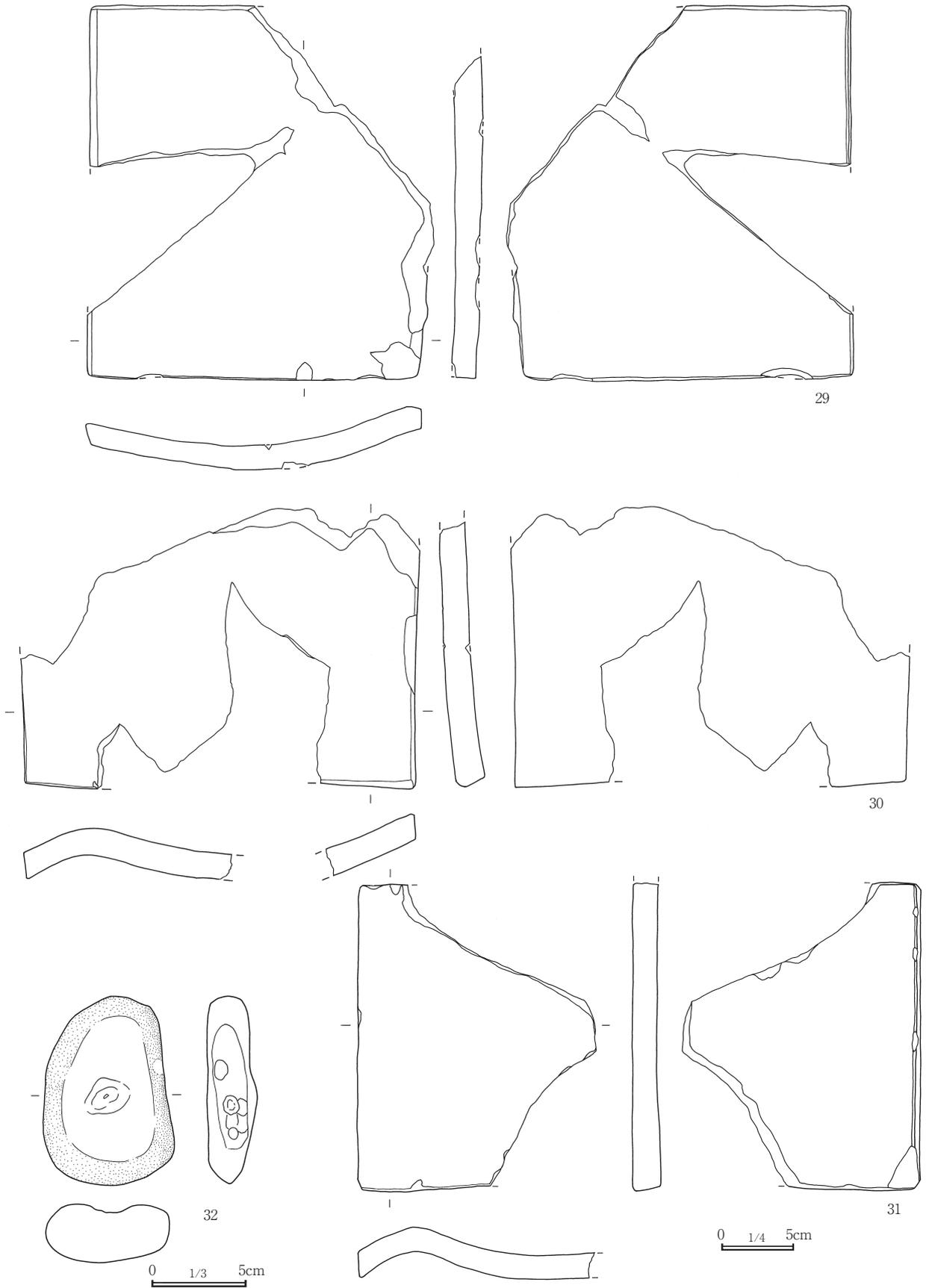


第54図 3区2面上層の出土遺物（その2）

第4節 2面を中心とした遺構外の出土遺物



第55図 3区2面上層の出土遺物(その3)



第56図 3区2面上層の出土遺物（その4）

第5節 3面の遺構

1 3面の調査概要

3面はAs-B降下前後の遺構である。

本遺跡に於いては調査区の広い範囲でAs-Bの平面的な分布が散見されたのであるが、2区中南部の1号井戸付近の遺構掘削に伴ってAs-Bの充填する溝遺構が確認された。これによって下位面の存在が明らかとなり、3面の調査が施されることになったのである。

対象区域は後述の10号溝沿いの区域であったが、As-B関連遺構ということで、2面の調査でAs-Bの分布を確認した3区の中部西寄りの一角を併せて報告することとした

い。尚、3面調査の端緒となった10号溝については後述することとし、以下As-Bの分布状況について触れておきたいと思う。

上述のようにAs-Bは面的な分布が散見されたのであるが堆積状況は極薄いもので、遺構確認作業に伴って失われるものも少なくなかった。これらは2区南西隅部南壁際と3区中部西寄りに分布が認められたが、特に3区に於いてはある程度の広がり（第57図網掛け部分）を以って認められた。

当該区域の調査は2面の調査での遺構確認に伴って実施したものである。当該区域は微高地であったが、確認された分布面はほぼ平坦なものであったため、水田の遺存を想定して確認作業を行ったものの畦等を確認することはできなかった。

2 10号溝（第57図 P L 33）

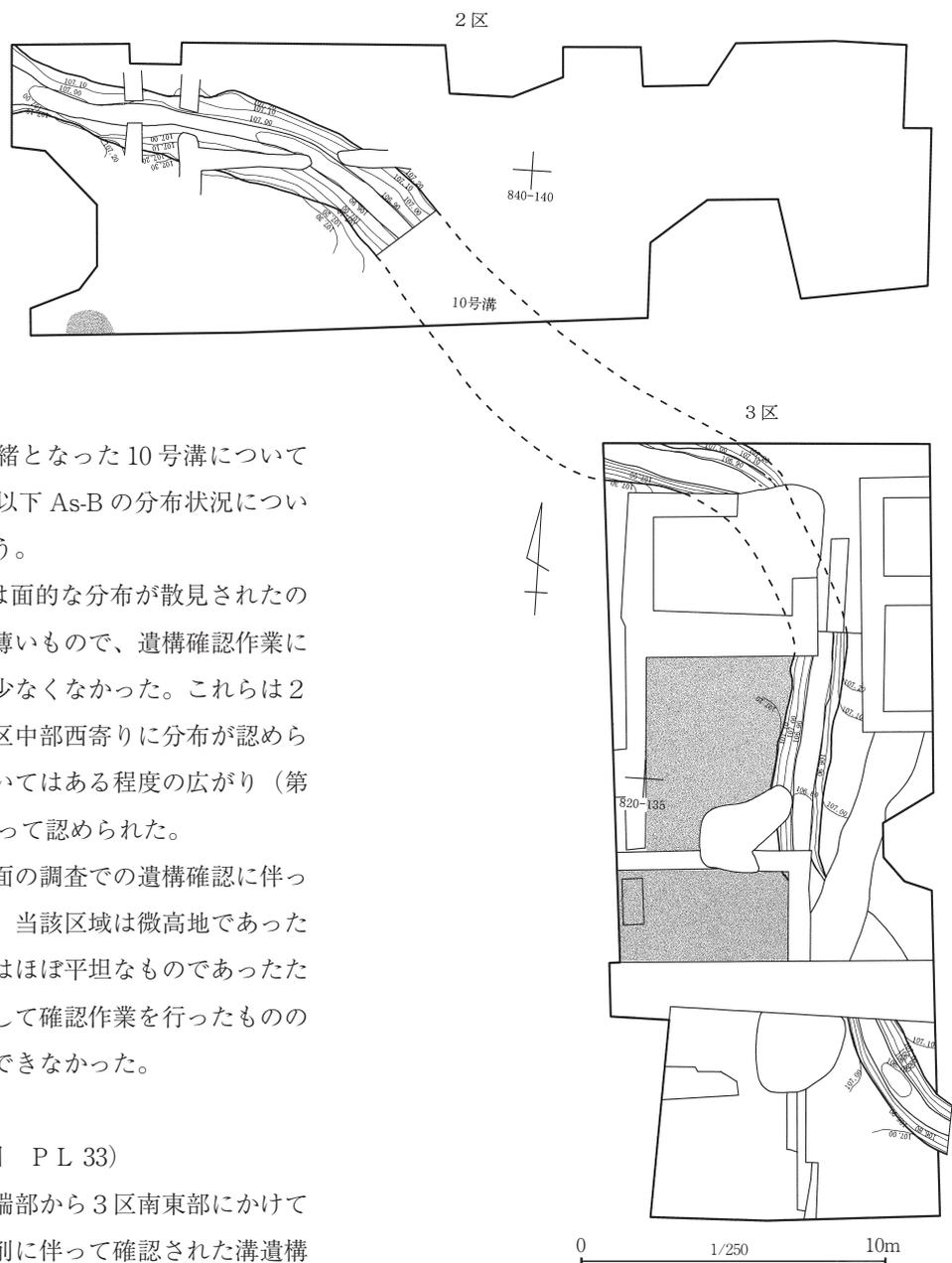
概要 本溝は2区西北端部から3区南東部にかけて在る。1号井戸等の掘削に伴って確認された溝遺構で、2区中南部で1号井戸、3区北部で旧裁判所建

物や現代の攪乱などで壊され所々で寸断されているが、残存部分の遺存状況は比較的良好であった。

本溝は第3節冒頭に述べた微高地と低地部との境に在るもので、自然の流路を利用し整えたものと判断される。本溝の掘削意図は明確ではないが、水路または出水時の排水機能を持つものと認識される。

遺物 本溝からの出土遺物は認められなかった。

時期 本溝は二次堆積のAs-Bの純層によって被覆



第57図 3面全体図

第3章 発見された遺構と遺物

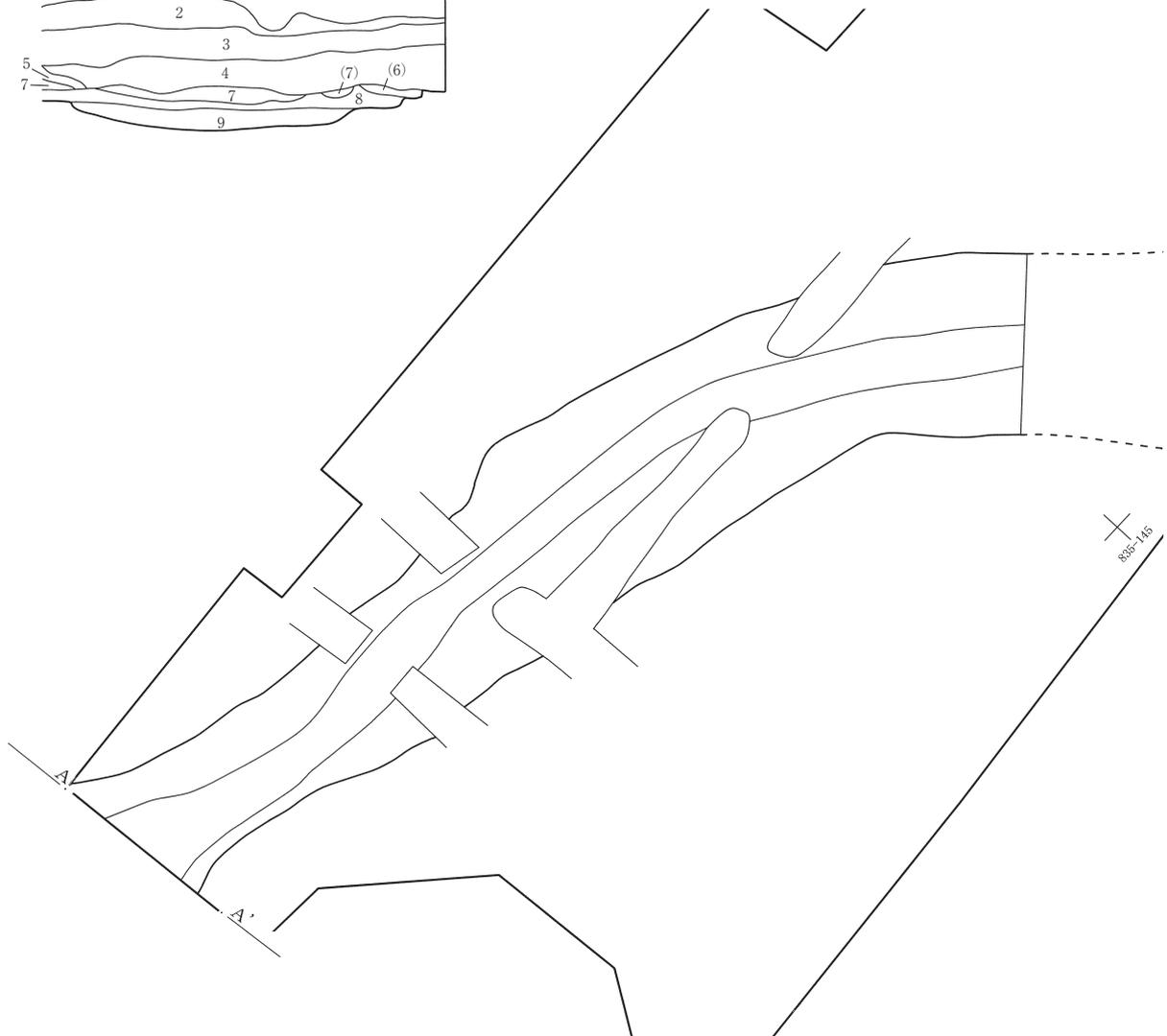
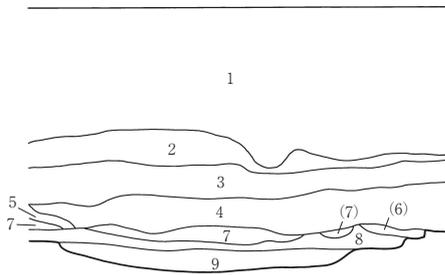
〔2区北西隅部 (A - A')〕

(近現代層)

- 1 : 表土
- 2 : 砂礫層 : 地山層土ブロック混入。近代。
- 3 : 黒褐色土 (10YR3/2) : 炭化粒子・木炭片少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 4 : 黒褐色土 (10YR3/2) : 炭化粒子・木炭片多量、下部に炭化材・瓦片等多量に含む。粘性・締まりやや弱。
- (中近世層)
- 5 : 暗褐色土 (10YR3/3) : 白

- 色軽石粒・細砂・粗砂・炭化粒子少量混入。
- 6 : 暗褐色土 (10YR3/3) : As-B多量に混入。粘性やや強、締まり強。
- (10号溝覆土)
- 7 : 黒褐色土 (10YR2/3) : As-Bに径1~5cmの暗褐色土ブロック多量に混入。
- 8 : As-B純層
- 9 : 黒色粘質土 (10YR2/1) : 酸化鉄分多量に混入。締まりやや強。

A A' L=108.90



されていた。従って本溝は As-B 降下時点、即ち天仁元年 (1108) に機能していた溝であると認識され、As-B 降下に伴って廃棄されているが、明確な掘削時期は特定できなかった。

規模 長さ : 52.7 m 幅 : 267cm 深さ : 46cm

構造 本溝は攪乱等によって途中途切れる部分があり、また東西両側が調査区外に出ているため全容は詳らかでない。

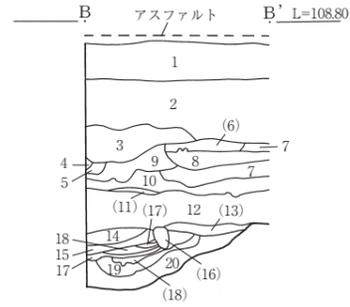
西北西から入り、蛇行しながら走行するが、大きくは2・3区の境付近で走行を南に変じ、3区南部で南東方向に変じて調査区外に流れ出ている。

幅員が増減し一定ではないが掘削形態は概ね箱堀様で、底面の横断形は丸みを帯びる。

第58図の1 10号溝全体図

〔3区北西隅部 (B - B')〕
(近現代層)

- 0 : アスファルト。
- 1 : 40 - 0mm の碎石層。
- 2 : 黒褐色土 (7.5YR3/1 ~ 4/1) : 建築廃材多量に入る裁判所建替え時の埋土。粘性あり。
- 3 : 黒褐色土 (7.5YR3/2) : 明褐色ローム粒・As-A・漆喰・瓦等混入。(近世整地層)
- 4 : 川原石を含む砂礫層。



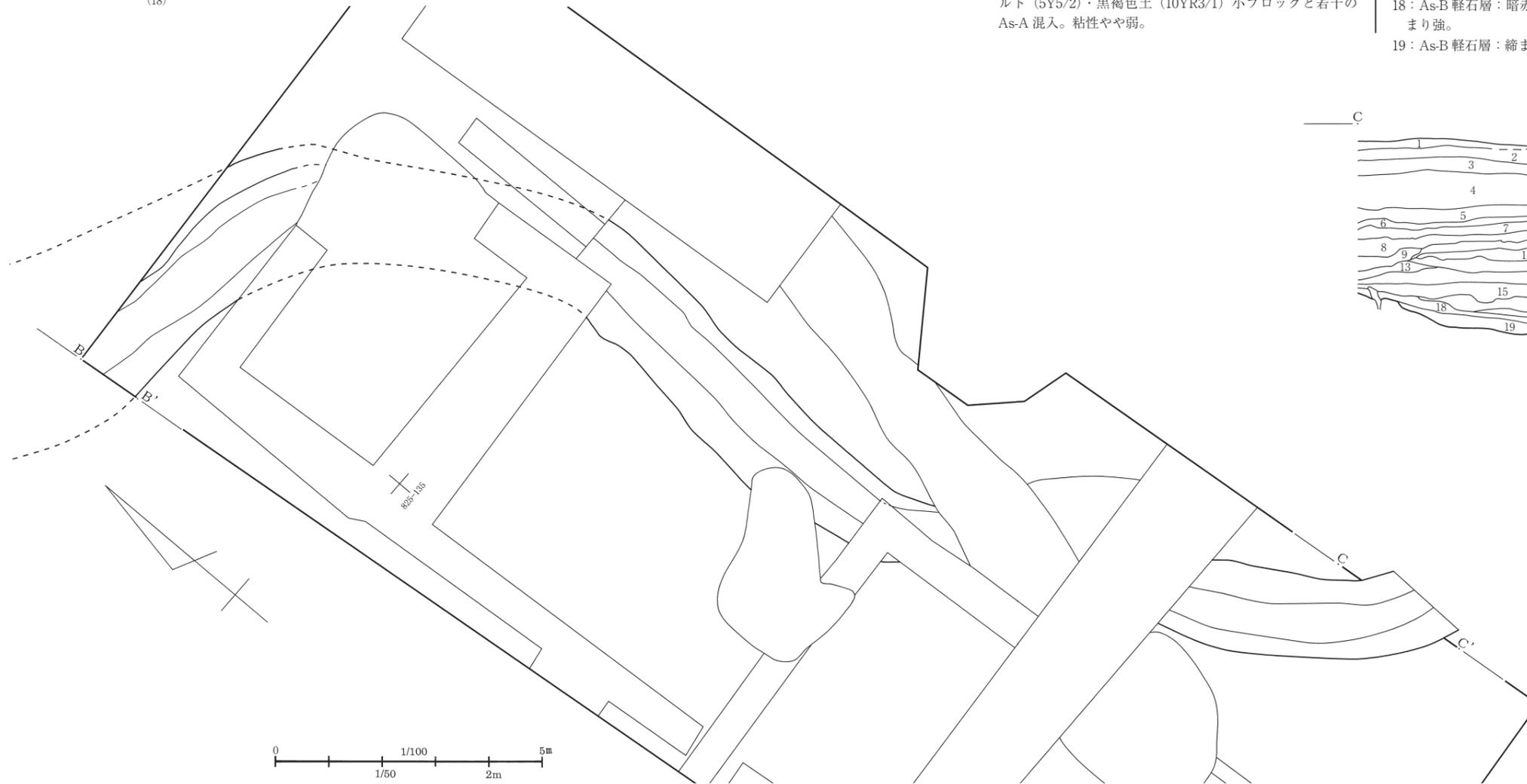
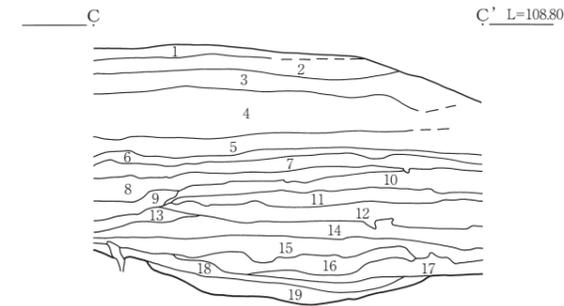
- 5 : 3層土と灰褐色土 (7.5YR5/2) のブロック混土 : 粘性あり。
- 6 : 灰黄褐色土 (10YR4/2 ~ 5/2) : As-A と炭化物混入。細質で粘性あり。
- 7 : 褐灰色土 (10YR6/1) とにぶい褐色シルト (7.5YR6/3) のブロック混土 : 明赤褐色土 (2.5YR5/8) のブロック混入。
- 8 : 黒褐色土 (10YR3/1、粘性ややあり) と暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)、7層土ブロックの混土 : 黒褐色土中位に多く、上面に淡黄色シルト (2.5Y8/4) ラミナ状に乗る。
- 9 : にぶい黄褐色土 (10YR5/3) : 粘性ややあり。As-A と若干の炭化物、7層土粒混入。(中近世層)
- 10 : 黒褐色土 (10YR3/2) : やや赤味掛かる。As-A と少量の漆喰粒混入。粘性やや欠。近世表土か。
- 11 : にぶい黄褐色土 (10YR6/3) : 10層土小ブロックとローム・焼土粒混入。
- 12 : 灰黄褐色土 (10YR5/2) : 炭化物粒混入。

- 少量の焼土粒入る。粘性やや欠。中近世表土か。
- (10号溝覆土)
- 13 : にぶい黄褐色シルト (10YR7/4) と 19・20層土のブロック混土。
- 14 : 褐灰色砂質土 (7.5YR4/1) : にぶい黄褐色ローム (10YR6/3) と 18層土小ブロックの混土。As-B 含む。
- 15 : 黒色土 (10YR2/1) と 14層土ブロックの混土 : 層やや上位に明褐灰色シルト (7.5YR7/2) ラミナ状に堆積。
- 16 : As-B 灰色火山灰 : 褐灰色 (10YR5/1) 呈す。
- 17 : 16層火山灰と黄褐色ローム (10YR7/8) のブロック混土。
- 18 : 16層火山灰 (青灰色 (5B5/1) なすものもあり) とにぶい黄褐色ローム (10YR7/3) 小ブロックの混土 : 少量の黄褐色ローム (10YR7/8) 含む。
- 19 : As-B 小豆色火山灰 : 褐灰色 (5YR5/1) 呈す。
- 20 : As-B 軽石層。

〔3区南東部 (C - C')〕
(近現代層)

- 1 : 40 - 0mm 碎石層 : アスファルト舗装下。
- 2 : 明青灰色細砂 (10BG7/1)。
- 3 : 明黄褐色ローム (10YR7/6) ・1層碎石・川原石の混土層 : 黒褐色土 (10YR3/1) 多く混入。
- 4 : 40 - 0mm 碎石層 : 下位に3層土堆積河床礫あり。
- 5 : 黒褐色土 (7.5YR3/2) : 明黄褐色ローム (10YR7/6) ・川原石・炭化物・建築廃材含む。
- 6 : 黄褐色土 (2.5Y5/3) : 碎石、灰黄色土 (2.5Y6/2・7/2) ブロック混入。粘性弱。
- 7 : オリーブ褐色土 (2.5Y4/1) ・黄褐色ローム (10YR7/8) ・As-A 混黒色土 (10YR2/1) : 粘性あり。
- 8 : 暗灰黄褐色土 (2.5Y5/2) : As-A と 7層土小ブロックやや多く混入。
- 9 : 褐灰色土 (10YR4/1) : 褐灰色 (7.5YR5/1) ・浅黄色 (2.5Y7/4) ローム小ブロックやや多く、As-A、若干の炭化物含む。(近世層)
- 10 : にぶい黄褐色土 (10YR4/3) : 酸化鉄含む灰オリーブ色シルト (5Y5/2) ・黒褐色土 (10YR3/1) 小ブロックと若干のAs-A 混入。粘性やや弱。

- 11 : にぶい黄褐色土 (10YR5/4) : As-A と灰オリーブ色シルト (5Y5/2) 粒、若干の焼土粒・明黄褐色ローム (10YR6/8) 混入。粘性やや欠。
- 12 : にぶい黄褐色土 (10YR5/3) : 少量のAs-A と炭化物粒、小礫含む。粘性やや弱。
- 13 : 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) : 灰黄色シルト (2.5Y6/2) と若干の黒褐色土 (10YR3/1) 小ブロック、微量のAs-A 混入。粘性見られる。
- 14 : 灰黄褐色土 (10YR4/2) : 少量のAs-A と僅かな明黄褐色土ローム (10YR6/8) 小ブロック混入。部分的に明褐灰色シルト (7.5YR7/1) 小ブロック入る。粘性やや欠。
- 15 : 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) : 褐灰色土 (7.5YR4/1) ・灰褐色土 (7.5YR5/2) 小ブロック等混入。As-A 僅かに含む。粘性ややあり。(中世層)
- 16 : 黒褐色土 (10YR3/2) : As-B 混入。粘性ややあり。(10号溝覆土)
- 17 : 黒褐色土 (10YR2/3) : As-B、黄褐色土ブロック少量混入。粘性やや弱、締まりやや強。
- 18 : As-B 軽石層 : 暗赤褐色土ブロック中量混入。粘性弱、締まり強。
- 19 : As-B 軽石層 : 締まりやや強い。



第58図の2 10号溝全体図

第4章 まとめ

第1節 概要

以上のように本遺跡では3面に亘る遺構面で調査した遺構と出土遺物を報告してきた。

詳細は繰り返さないが、1面には近世の礎石建物2棟と井戸1基があり、多数の近世所産出土遺物を得た。1面と2面の間層でも近代層からの混入物を含む近世中心の多数の出土遺物を得た。2面では礎石建物3棟と溝遺構9条、井戸3基、土坑18基、ピット26基、竪穴遺構1基、石列を調査し、当該期の

出土遺物を得たが、明らかな中世遺構は井戸1基であり、多くは近世の所産と認識されるものであった。

こうした遺構、遺物の中には掘立柱建物から礎石建ちの建物への変遷を見せる5号建物など注目されるものもあり、十分な考察をすべきではあったが、次節に堀と見られる4・5・9号溝について若干を述べて考察としたいと思う。

第2節 4・5・9号溝（堀）について

1 4・5・9号溝の位置

第3章(31頁)に述べたように4・5・9号溝は形態的に堀と認識されるもので、土地区画を成すものと判断した。本遺跡付近は近世前橋城時代には武家屋敷であり、明和5年(1768)以降の陣屋時代には更地か恐らくは畑地となり、幕末の再築前橋城時代には藩主の隠居所として使用されている。こうした土地利用の変遷と、その走行が再築前橋城の地割との不一致から本溝群は近世前・中期の所産と判断したのであるが、次に当時の地割と一致するか否かを検証してみたいと思う。

第59図は近世前橋城三の丸=再築前橋城本丸の位置を基準に正保元年(1644)の城絵図と前橋市の都市計画図を重ね図化したものである。正保図には3条の溝を明確に示す表現はないが、その位置は4・9号溝が町田五郎兵衛と石川七郎右衛門の屋敷地境、5号溝が町田五郎兵衛と安藤六之助の屋敷地境に概ね当たっている。尚、石川・町田両氏の屋敷と安藤氏屋敷の境は連続するため、9号溝が相当するとも考えられる。

ところで現時点で上記3者の石高や役職等は把握できていないが、少し遡る寛永初

頭資料の同姓の人物から推して取高100石以下(石高は寛永13年急増する)であったものと推定される。本遺跡北方の前橋城北郭遺跡の発掘調査でも同時期、同クラスの武士の屋敷跡が調査されているが、その地境にも同じような規模程度の堀遺構が確認されているため、少なくとも近世前橋城内に於いては屋敷境に堀を掘削することは一般的であった可能性が考えられる。また4・9号溝の間は通路と見られるので、中世からの堀(溝)を埋め戻さずに屋敷割りに利用した可能性も考慮される。



第59図 近世前期の屋敷割り (S=1/2000)

2 5号溝の障子堀

(1) 本遺跡の障壁

次に5号溝の障子堀について検討し、併せて県内の事例についても見てみたいと思う。

5号溝内には障壁は3箇所が確認され更に2箇所が想定されたが、障壁の規模は上幅70cm前後、基底幅100cm程、高さは30cm程と低く、障壁としての機能は低いように思われた。更に堀や障壁の形状はだれた印象を持つものであった。

(2) 群馬県内の障子堀の事例

さて本県では本遺跡例の他10の城館址で障子堀が確認されている。次について概述する。

館林市大袋城では堀の一部が調査され障壁が確認された。堀幅は不明だが、確認面から堀底まで約1m、障壁の幅は80cmを測る。

太田市城ノ内遺跡では太田金山城外堡である大島城の堀が調査され、このうち上幅4m強の堀遺構で、基底幅50cm程、高さ10cm程の障壁を確認した。一部を調査できたに過ぎないため全容は不明だが、小区画水田状に2列をなす可能性もある。

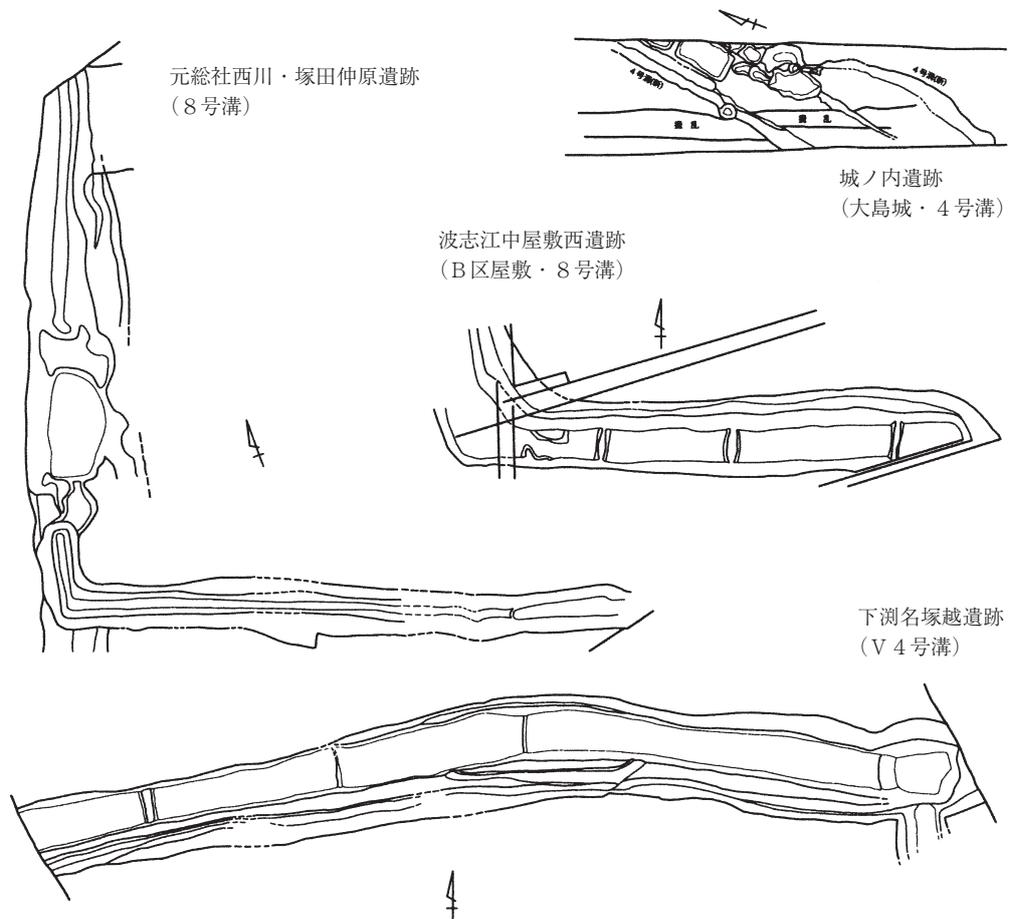
伊勢崎市の波志江中屋敷西遺跡ではB区屋敷の周堀のうち8号溝の南西部に障壁3箇所が確

認された。堀の上幅は3.8mで障壁は基底幅40～60cm、高さは11～18cmと低い。障壁と障壁の間隔は6.4～7.5mを測る。時期は15世紀である。

伊勢崎市（旧境町）の上淵名遺跡の障子堀は中世の屋敷遺構に伴う南北堀で、約50mの範囲に在る。障壁の基底幅1m程、高さ50cm程。

同じく旧境町の下淵名塚越遺跡では淵名屋敷の外郭堀と見られる上幅4.4mの堀に障壁を確認した。障壁は一カ所で基底幅60cm程、高さ10cm程を測る。また障壁から7.5m程の間隔でその残欠と思しき低い段差が2箇所残る。16世紀段階と見られる。

渋川市（旧子持村）の白井二位屋遺跡では二位屋城の堀（1号堀）で障壁が確認された。この遺跡の障壁は特異な形態で、主に内郭側から堀の1/3程まで半島状に突出し、先側は傾斜し堀底に落ちる。障壁の基底幅は90～150cm、高さは内郭際で80cm。



第60図 群馬県内の障子堀（その1 S=1/300）

16世紀の所産と推定される。

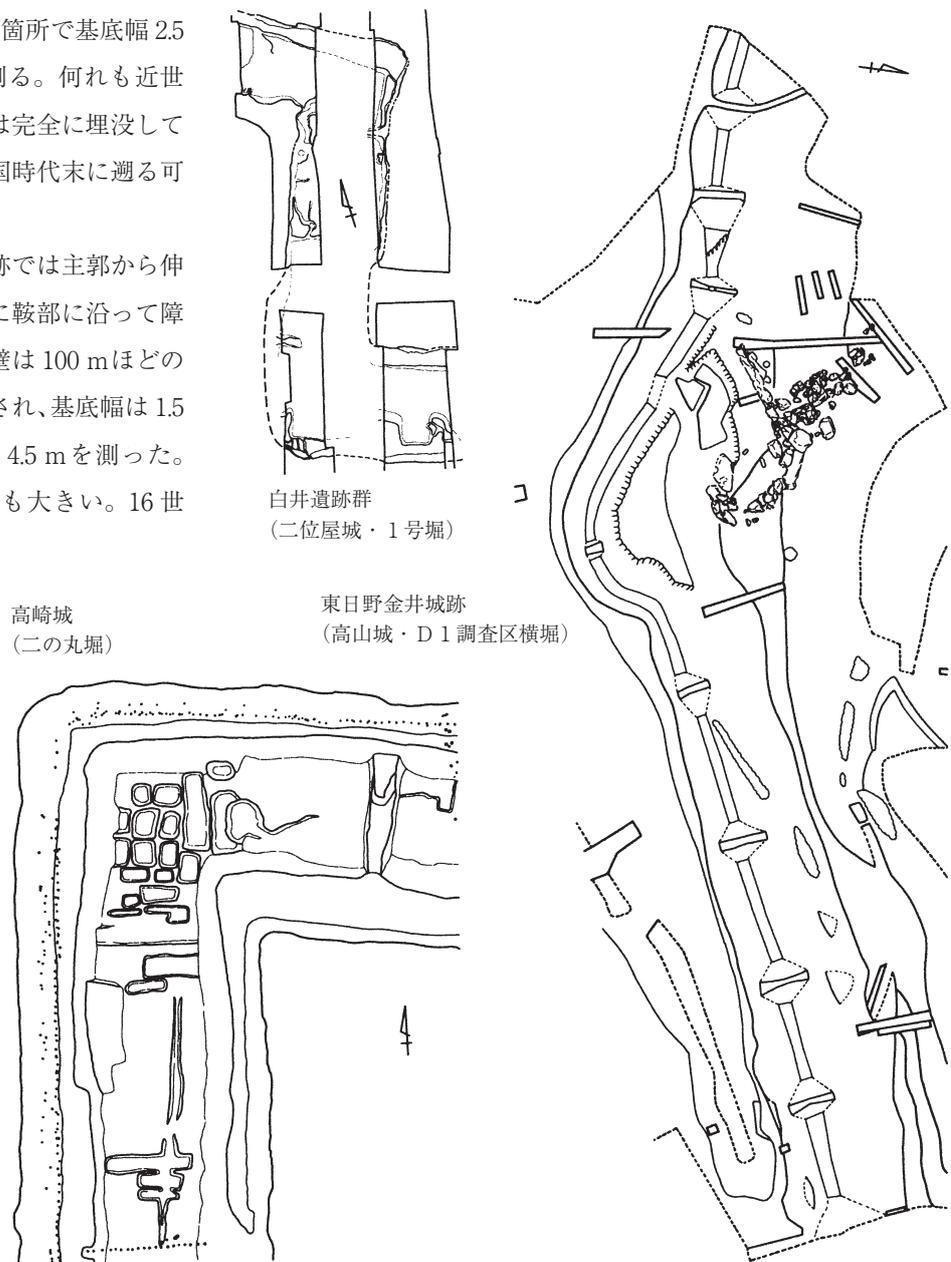
前橋市の元総社西川遺跡では屋敷の周溝と見られる上幅3.3mの7号溝南部に2箇所の障壁が見られた。堀底の形態はややだれている。障壁の基底幅は70～90cm、高さは10数cm。時期は14～15世紀。

高崎市の高崎城では上幅は18mの二の丸堀北西部に障子堀が発見された。障壁は2種あり、一つは堀の北西隅部に在る長方形のものが不規則に連なる小区画水田状、今一つはその東方の堀を横断するもので、前者の障壁は基底幅70cm程、高さ40cm前後、後者は一箇所で基底幅2.5m程、高さ約1.2mを測る。何れも近世の所産だが近世末期には完全に埋没していたと見られ、一方戦国時代末に遡る可能性もある。

藤岡市東日野金井城跡では主郭から伸びて屈曲した尾根南側に鞍部に沿って障子堀が確認された。障壁は100mほどの調査範囲で8箇所確認され、基底幅は1.5～3.9m、高さは2.8～4.5mを測った。形状は整っていて規模も大きい。16世紀の所産と認識される。

富岡市の丹生東城は、16世紀の所産と見られる丘陵上立地の単郭の城郭である。その南・東・北を上幅約6mの横堀が囲み、その東から北東にかけて8カ所の障壁が確認されている。削り残しの障壁は形態も整い、高さ30～70cm、障壁と障壁の間隔は6～20mとばらつきがあるが、多くは8m程である。

これらの堀は比較的整った掘削形態を示しているが、大半は障壁が一行のみのもので、複数列のものは高崎城の北西隅部例と、その可能性を持つ城ノ内遺跡例に過ぎない。一方これらは障壁の機能が認められるものと、極めて低く障壁として機能し得ないものに大別され、後者には城ノ内遺跡、波志江中屋敷西遺跡、下淵名塚越遺跡、元総社西川遺跡例があるが、これらは壁面擁護に資する保水のための貯水機能（石守 2005）を考えている。一方、障壁機能



第61図 群馬県内の障子堀（その2 S=1/600）

第4章 まとめ

を認めるものは（大袋城跡例と上瀧名遺跡群は明瞭ではないが）水田状を成す高崎城の北西隅例と半島状の形態を成す二位屋遺跡例を例外として比較的規則的な配置を呈するものであった。その規模には大小あるが、高崎城と東日野金井城例は規模も大きく、戦国期小田原城内堀や静岡県三島市の山中城の例に匹敵する規模を有するものであった。

3 小 結

上述のような県内の事例に照らすと、前橋城三の丸遺跡の障子堀は形態的には障壁機能を有する一群で、且つ一般的な形状のものということになる。しかし他の事例に比べて形状はややだれていて不明瞭な印象を受け、堀の規模にも関連するようだが、障壁の規模は小さい部類に入る上瀧名遺跡群例や丹生東城例に比べても更に小型なものであった。

ところで県内事例の殆どは中世の所産と見られ、近世に下るのは本遺跡例と高崎城例だけであるが、井上哲朗の分類・編年（井上1999）によると高崎城の特に水田状のもの出現期は16世紀後半から

17世紀前半であって時期的に一致するが、本遺跡例は15世紀後半から16世紀末とされ、少なくとも17世紀半ばまで機能し、幕末まで遺存していた可能性もあることから齟齬がある。しかし本遺跡例の形状がだれていることに鑑みれば、5号溝の障子堀は16世紀までに掘削され、近世前橋城に取り込まれて使用され続けたものの、経年変化で徐々に崩れていったのではないかと思慮されるのである。

〔参考文献〕

- 館林市教育委員会「3 大袋城跡（平16地点）」『館林市内遺跡発掘調査報告書』2005 10頁
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「塚畑遺跡・宮内遺跡・稲荷前遺跡・三島木遺跡・城ノ内遺跡」2006 182頁
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「波志江中屋敷西遺跡」2005
境町教育委員会「上瀧名遺跡 第3次調査概要」1982 26頁
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「下瀧名塚越遺跡」1991 402頁
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「白井遺跡群 - 中世編 -」1993 110頁
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「元総社西川・塚田仲原遺跡」2003 251頁
高崎市教育委員会「高崎城三の丸遺跡」1995 58頁
藤岡市教育委員会「G2 東日野金井城跡」2004 38頁
永井尚寿「丹生東城跡」『群馬文化285』2006 60頁
石守 晃「(2) 堀」『波志江中屋敷西遺跡』2005 95頁
井上哲朗「堀内障壁の分類と編年試案」『中世城郭研究 第13号』1999 318頁

おわりに

以上のように、本遺跡の発掘調査では様々な所見を得たのである。或いは十分な報告を行い得なかったかとも思うが、今後インデックスとして活用できれば幸いである。

ところで30年振りに近世城郭を調査する機会を与えられたことに感謝したいと思う。特に障子堀の表出は嬉しいできごとであった。というのも私事になるが、学生時代に小田原城香沼屋敷で中世小田原城の内堀を調査した経験があったからである。勿論小田原城の障子堀は本遺跡例とは比較にならないほど規模も大きく形状も整ったものではあったが、掘り出された障子堀に30年振りに友人に再会したような気持ちであった。また明治時代の裁判所建物基礎の立派なものにも目を見張った。残念ながら今日の記録保存の対象外であったが、何らかの機会を見つ

けてその一端でも報告できればと考えている。

最後になるが、お世話になった関係各位、特に国土交通省関東整備局、同長野営繕事務所、前橋地方・家庭裁判所の皆様には心よりの御礼を申し上げたい。そして冬季の発掘、特に調査区が裁判所庁舎の北側に接し、高層の群馬県庁も近いために午後2時には“日没”となる寒さの中、作業に尽力して戴いた作業員各位に謝意を述べて稿を閉じたいと思う。

〔参考文献〕

- 群馬県教育会「群馬縣史 第4巻」1927（群馬縣）
坪井利弘「三州陶器瓦」1971（愛知県陶器瓦協同組合）
山武考古学研究所「前橋城三ノ丸遺跡発掘調査報告書」1996（前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会）
前橋市教育委員会文化財保護課「関東の華・前橋城」1990（前橋市観光協会）
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「前橋城北曲輪遺跡」2002

取上遺物一覧

1 面

3号建物

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	20-001	こも編み石	10.5×5.7×3.3 310g	完形	河床礫使用。左右両側縁を研磨し、中位に帯状の磨耗痕一周。	頁岩。	11	5
2	20-002	敲石	15.1×9.6×7.3 1,500g	完形	河床礫使用。表面弱く研磨上端に敲打痕。こも編み石に転用。	安山岩。	11	5
3	20-003	礎石	31.2×20.3×9.5 9,720g	完形	河床石使用。表面に径9.2×9.7cmの円柱の当たり痕残る。	安山岩。	11	5
4	20-004	礎石	31.7×30.4×18.4 21,420g	完形	河床石使用。若干のはつり径11.5×10.6cmの角柱の当たり痕。	安山岩。	11	5
5	20-005	礎石	32.3×27.1×17.0 1,732g	完形	河床石使用。表面にはつり径13×11cmの角柱の当たり痕。	安山岩。	11	5
6	20-006	礎石	30.5×24.7×14.3 15,320g	完形	河床石使用。表面に9.8×10.7cmの角柱の当たり痕残る。	安山岩。	11	5
7	20-007	礎石	27.2×17.7×8.5 6,160g	左側欠損	河床石使用。表面に残径10.9×径8.6cmの角柱の当たり痕残る。	溶結凝灰岩	11	5
8	20-008	礎石	28.6×24.8×10.7 10,280g	完形	河床石使用。僅かに窪み径8.6×9.3cmの角柱の当たり痕残る。	溶結凝灰岩	11	5
9	20-009	礎石	22.5×23.5×7.4 6,720g	完形	河床石使用。表面に9.1×10.3cmの角柱状の柱の当たり痕残る。	溶結凝灰岩	11	5

4号井戸

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-001	かわらけ	口(10.0)底(7.0)高2.0	破片	轆轤成形。回転糸切無調整。	江戸時代。	12	5
2	10-002	陶器(香炉か火入)	底(7.0)残高7.6	破片	口縁部内面から底部青磁釉。蛇の目凹型高台。見込み焼成時砂付着。	肥前。江戸時代。	12	5
3	20-010	礎石	25.2×42.6×15.4 24,000g	完形	大型の河床礫を用い、表面に15.2×11.1cmの角柱の当たり痕残る。	安山岩。	13	5
4	20-011	石臼(上臼)	径26.0高12.5 3,760g	1/6	窪み深3.1cm、供給口方形で径3.8cm。播面磨耗顕著。	分画数不明。溶結凝灰岩。	13	5
5	20-012	石臼(下臼)	径27.5高8.5 4,960g	1/2	芯棒径2.4cm。底面上げ底。	六分刻。安山岩。	13	5
6	20-013	石臼(下臼)	径30.1高13.4 8,160g	1/4	芯棒孔径測定不可。播面磨耗顕著で溝は全く確認できない。	分画数不明。溶結凝灰岩。	14	5
7	40-001	引手金具(輪金具)	輪1.4 座径1.4 1.77g	完形	座は球面で細かい線刻。輪は幅2mm、長さ4cm程の薄板で留め。	銅製か。	13	6

遺物集中域(明治期廃材処理後)

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-003	軟質陶器鍋	口(37.0)底(18.4)高11.0	破片	暗灰色。紐作り回転撫で調整。表裏面吸炭による黒色処理。口縁部内湾。	在地。近現代。	15	6
2	10-004	陶器灯明皿	口7.0底2.8高1.6	ほぼ完形	にぶい黄褐色。内面から口縁部外面透明釉。貫入。体部外面中位以下回転篋削り。	制作地不詳。19世紀か。	15	6
4	10-006	磁器蓋	口(16.4)残高2.2	破片	やや簡略化した外面唐草文。	肥前。18世紀末～19世紀中頃か。	15	6
5	10-007	磁器蓋物	口(9.7)底5.8高7.8	2/3	口縁部から体部型紙折り。口縁部軸削り取る。貫入入り釉僅かに白濁。	制作地不詳。明治～大正。	15	6
6	10-008	磁器皿	口(10.4)底(7.0)高2.0	1/3	見込み押印?による施文後具須入れる。口銘。	瀬戸・美濃。19世紀中～後半。	15	6
7	10-009	磁器盃洗	口14.0底9.0高6.9	ほぼ完形	素描主体の染付。蛇の目凹型高台。	肥前。19世紀前半～中頃。	15	6
8	10-010	磁器壺	残高6.5	頸部片	細かい蜻唐草文と花卉状文様。	肥前。18世紀後半～19世紀中頃。	15	6
9	10-011	軒瓦	長(4.8)幅(12.0)厚2.2	破片	焼成やや甘い、表面にキラ(金雲母)付着。唐草模様。	日本型(万十軒瓦)。	15	6
10	10-012	軒瓦	長(9.8)幅(10.5)厚2.2	破片	灰色。焼成やや甘い。丸部分貼り付け。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	16	6
11	10-013	軒瓦	径(7.9)長(3.8)厚2.1	破片	緑黒色。焼成やや良好。丸部分貼り付け。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	16	6
12	10-014	軒瓦	長(7.0)幅(15.2)厚4.2	破片	暗灰色。唐草模様。	日本型(万十軒瓦)。	16	6
13	10-015	平瓦	長(10.2)幅(16.0)厚2.1	破片	灰色。焼成やや甘い。表裏面撫で。「藏虎」(異体字)の刻印。	日本型。	16	6
14	10-016	平瓦	長(6.2)幅(7.7)厚1.8	破片	灰色。裏面に刷毛目残る。表裏撫で。	日本型。	16	6
15	10-017	平瓦	長(12.4)幅(8.4)厚1.7	破片	灰色。裏面に刷毛目残る。表裏撫で。	日本型。	16	7
16	10-018	平瓦	長(8.3)幅(10.3)厚2.2	破片	暗灰色。裏面に刷毛目残る。表裏撫で。	日本型。	16	7
17	10-019	平瓦	長(7.8)幅(7.2)厚1.7	破片	暗灰色。焼成甘い。裏面に刷毛目残る。表裏撫で。	日本型か。	16	7
18	40-002	鉄板か	5.7×7.9×0.1 14.34g	破片	薄板。曲げによる二つ折り。用途不明。	近代の可能性もあり。	16	7
19	40-003	鉄板	5.7×6.0×0.08 11.26g	破片	薄板。端部折れ。	近代の可能性もあり。	16	7
20	40-004	鉄器	5.5×1.7×0.6 4.23g	完形	頂部は幅1.7cm、長さ1.5cm、内径0.6cmの環状を呈し、下端部釘状。		16	7
21	40-005	角釘(皆折釘)	3.1×0.6×0.6 2.73g	頂部側	下半欠損。頂部皆折れ。		16	7
22	40-006	角釘(目釘)	4.1×0.7×0.4 2.50g	ほぼ完形	先端欠損。頂部皆折れ。	1寸半か。	16	7
23	40-007	鏝	径0.5幅5.1縦2.1 4.15g	側半分	先端欠損。横断面角。		16	7
24	40-008	角釘	3.2×0.5×0.5 1.32g	中程か	細め。両端欠損。	近代の可能性あり。	16	7
25	40-009	角釘	3.7×0.6×0.5 2.86g	先端側	先端欠け、折れる。		16	7
27	40-011	金属板	径5×5以下	約20片	トタン板より薄い。鉄と見られるが、一部に緑青付着。	近代の可能性あり。		7
28	20-014	金属貼付礫	18.1×14.9×10.7 2,370g	完形	河床礫の表面に径5.5cm程の殆ど錆となった鉄と、その上に径3.3×2.6cmとその他2片のその上に緑青の浮いた銅板付着。	金属片は近代の可能性あり。安山岩。		32

3区土蔵基礎出土遺物（明治期建物基礎混入遺物）

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	押図	写真
1	10-020	陶器紅皿	口 6.3 底 2.6 高 1.8	完形	灰白色。外型による打型成形で外面蛸唐草文。内面から口縁端部外面透明釉。	肥前。19世紀中頃以降。	17	7
2	10-021	陶器灯明受台	口 8.1 底 8.3 高 5.0	一部欠損	灰白色。脚部から体部内面灰釉。細かい貫入入る。	製作地不詳。19世紀。	17	7
3	10-022	陶器灯明受台	口 11.6 底 6.4 高 1.8	一部欠損	灰白色。脚部から体部内面灰釉。細かい貫入入る。	製作地不詳。19世紀。	17	7
4	10-023	陶器鉢	口 28.0 残高 7.2	破片	明緑灰色。体部内面花弁状に塗ませる。漆継ぎ。釉は失透気味。	肥前。17世紀中頃～18世紀中頃。	17	7
5	10-024	陶器徳利	口 (3.6) 底 (7.4) 高 19.0	1/4	口縁部内面から底部外面錆釉、底部外面の釉拭う。体部外面塗ませる。	瀬戸・美濃。18世紀中頃～19世紀中頃。	17	8
6	10-025	陶器(火入か)	口 (9.2) 残高 6.9	口～胴片	オリーブ黄色。口縁部内面から体部灰釉。高台脇の削りはシャープ。	製作地不詳。江戸時代以降。	17	8
7	10-026	陶器雪平鍋・蓋	身 口 (14.0) 残高 7.6 蓋 口 12.8 高 3.2	1/4	蓋天井部とつまみ周縁、天井部外面周縁錆釉。釉の間に飛鉋。身の内面、取っ手、片口部厚い錆釉。体部外面錆釉。体部外面飛鉋。	益子・笠間か。19世紀中頃以降。	17	8
8	10-027	陶器雪平鍋	口 16.9 底 8.0 高 10.1	破片	内面と片口部、取っ手錆釉厚い。体部外面薄い錆釉。体部外面飛鉋。	益子・笠間か。19世紀中頃以降。	17	8
9	10-028	陶器土鍋蓋	口 19.8 残高 3.6 鈕径 5.8	2/3	天井部と外面つまみ周縁、口縁部錆釉。外面飛鉋。	益子・笠間か。19世紀中頃以降。	18	8
10	10-029	陶器壺	口 (10.2) 残高 21.9	口～胴部	胎土灰白色。外面から肩部内面錆釉。胎土中の鉱物多く溶けて吹き出す。	製作地不詳。時期不詳。	18	8
11	10-030	磁器皿	口 9.0 底 3.4 高 2.7	ほぼ完形	外面植物文。天井部中央簡略化した「寿」字文か。	瀬戸・美濃。19世紀中頃。	18	8
12	10-031	磁器皿	口 9.7 底 4.8 高 2.3	ほぼ完形	打型成形。底部周縁と口縁部周縁に呉須入れる。	瀬戸・美濃。19世紀中頃～後半。	18	8
13	10-032	磁器皿	口 9.6 底 4.0 高 3.1	1/2	端反碗蓋。素描。つまみ内不明銘。	肥前。19世紀前半～中頃。	18	8
14	10-033	磁器皿	口 (11.8) 底 (6.2) 高 2.8	1/3	内型か押印による施文後呉須入れる。呉須は植物部分が濃く、獅子が薄い。	瀬戸・美濃。19世紀中頃～後半。	18	8
15	10-034	磁器皿	口 12.6 底 6.7 高 2.6	4/5	内型か押印による施文後に呉須入れる。呉須は植物部分が濃く、獅子が薄い。	瀬戸・美濃。19世紀中頃～後半。	18	9
16	10-035	磁器皿	口 8.2 底 3.8 高 2.5	一部欠損	打型成形。内面呉須を塗る。	瀬戸・美濃。19世紀中頃～後半。	18	8
17	10-036	磁器皿	口 28.0 底 15.3 高 4.6	1/3	口縁部輪花。見込み環状の松竹梅文。ハリ支え。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	18	9
18	10-037	磁器碗	口 12.4 底 4.6 高 5.1	3/4	平碗。いわゆるペロ藍による染付。焼き継ぎ。	瀬戸・美濃か。明治時代。	19	9
19	10-038	磁器碗	口 (10.0) 底 3.4 高 5.0	1/4	外面、見込み共に簡略化された文様で意匠不明。	瀬戸・美濃か。19世紀前半～中頃か。	19	9
20	10-039	磁器碗	底 4.3 残高 3.6	体～底部	雪輪梅樹文か。波佐見系。	肥前。17世紀末～18世紀中頃。	19	9
21	10-040	磁器碗	口 9.0 底 4.2 高 5.5	4/5	外面濃み地に氷裂文、窓絵風に花卉文。焼き継ぎ。高台内焼き継ぎ時の記号。	肥前。18世紀中頃～後半。	19	9
22	10-041	磁器湯呑茶碗	口 5.9 底 4.1 高 5.7	一部欠損	いわゆるペロ藍。外面素描。高台内不明銘。	肥前か。明治時代。	19	9
23	10-042	磁器御神酒徳利	底 4.0 残高 7.9	胴～底部	体部外面簡略化した蛸唐草文。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	19	9
24	10-043	磁器蓋物	身 口 9.0 底 6.0 高 3.9 蓋 口 10.1 天井 6.2 高 2.5	身完形、蓋一部欠	濃淡の放射状文様間に「福」と「寿」字を配する。	肥前。18世紀末～19世紀。	19	9
25	10-044	磁器段重	口 10.9 底 9.6 高 2.1	一部欠損	小型。外面錆状の1重網目文。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	19	9
26	10-045	磁器段重	口 14.8 底 8.0 高 4.7	1/4	外面簡略化した唐草文。焼き継ぎ。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	19	9
27	10-046	磁器段重	口 (18.0) 底 (11.0) 高 5.2	1/4	外面簡略化した唐草文。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	19	9
28	10-047	磁器段重	口 (13.6) 残高 4.1	口縁片	29と同一個体。焼き継ぎ。外面染付に赤、金の上絵。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	19	10
29	10-048	磁器段重	口 (14.1) 残高 2.7	口～体片	28と同一個体。焼き継ぎ。外面染付に赤、金の上絵。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	19	10
30	10-049	磁器紅皿	口 (4.6) 残高 1.1	口縁片	打型成形により輪花状に作る。内面から体部外面透明釉。	肥前か。江戸時代。	19	10
31	10-050	磁器壺	口 (9.6) 残高 3.8	口縁片	口縁部外傾し、端部小さく立ち上げる。呉須の色調ペロ藍に近い。	瀬戸・美濃。19世紀前半～中頃か。	19	10
32	10-051	磁器油壺	口 (2.8) 残高 2.7	破片	頸部やや長く、口縁部外反。	肥前。17世紀末～18世紀後半。	19	10
33	10-052	焔炉風口蓋?	口 10.2 底 16.5 高 3.8	完形	器表黒色仕上げ。水の鉄分により変色。屈曲部につまみ貼り付け。	在地。江戸時代以降。	19	10
34	10-053	軒瓦	長 9.8 幅 28.0 厚 2.0	半完形	灰色。表裏吸炭。前後に短い。小口に削りによる流水紋。	日本型。	20	10
35	10-054	平瓦	長 (8.7) 幅 (8.8) 厚 2.1	破片	内外面吸炭。焼成やや弱。表面弱い研磨、裏面刷毛目残り撫で。	日本型か。	20	10
36	10-055	平瓦	長 (5.0) 幅 (4.5) 厚 2.1	破片	灰色。表面に沈線入り研磨、裏面撫で。	日本型。	20	10
37	10-056	ミニチュア土器	口 4.7 残高 2.5	3/4	にぶい黄色。手捏素焼き。表裏面撫で整形。		20	10
38	20-015	砥石	長 8.3 幅 3.2 厚 2.2	破片	側面に削り痕。表裏面に削痕残るも研磨面形成。	珪質頁岩。	20	10
39	40-011	煙管	長 5.3 径 1.0 13.20g	雁首	火皿小さく脂返しに直角につなぐ。	19世紀以降。	20	10
40	20-016	石版	9.0 × 2.1 × 0.2 5.57g	破片	表裏面研磨。	近代か。	20	10
41	90-001	しじみ	幅 2.7cm 以下	6片	表皮残る。	近代か。		10
42	10-215	陶器鉢	口 23.0 底 12.3 高 15.4	完形	体部外面砂(か)を付けて器表をザラザラにする。内面から口縁部灰釉。体部外面鉄釉。口縁部内外面、白釉と銅紅釉流す。高台内と高台脇錆釉。	近現代。		10
43	10-216	陶器練鉢	口 28.0 底 (17.0) 高 17.0	5/6	内面～高台脇灰釉。口縁部外面三方に青釉流す。見込み団子状目痕。	益子・笠間。近現代。		11
44	10-217	磁器小杯	口 4.4 底 2.6 高 5.3	完形	外面黒色の下絵。	瀬戸・美濃。近現代。		10
45	10-218	磁器小杯	口 4.5 底 2.8 高 5.2	口縁に欠	外面黒色の下絵。	瀬戸・美濃。近現代。		10
46	10-219	磁器小杯	口 4.9 底 3.1 高 5.6	完形	簡略化した花卉文。	瀬戸・美濃か。近現代。		10

(3区土蔵基礎出土遺物 続き)

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
47	10-220	磁器小杯	口6.7 底2.9 高4.6	完形	簡略化した花弁文。	製作地不詳。近現代。		10
48	10-221	磁器碗	口9.9 底3.8 高3.9	完形		製作地不詳。近現代。		10
49	10-222	磁器碗	口10.6 底3.5 高4.4	5/6	呉須と緑色絵具による下絵。高台内不明銘。	瀬戸・美濃か。近現代。		10
50	10-223	急須	径1.6 × 1.4 長3.3	把手片		製作地不詳。		11
51	90-004	ピン	底4.8 × 3.1 残高7.7	上位欠損	表面に格子模様。ラベル面平らで周囲に凸状の隆起。スリガラス。			11
52	90-005	ランプホヤ	底(3.5)残高5.9 厚0.1~0.2	基部片	スリガラス。			11
53	90-006	ランプホヤ	残存3.6 × 1.1 厚0.2	基部片	スリガラス。			11
54	90-007	ランプ	残存5.1 × 5.3 厚0.2	頸部片	スリガラス。			11
55	90-008	ランプホヤ	残存5.7 × 1.5 厚0.2	基部片	スリガラス。			11
56	90-009	スライドグラス	径5.7 × 1.5 厚0.2	完形		やや小型。		11
57	40-027	輪状金具	径5.4 × 3.2 厚0.025	3片	断面1.7mmの高さで「八」形をなす金具を円形に加工。			11
58	40-028	種金具	径8.8 × 9.6 幅1.1 厚0.2	一部欠か	円形を成す。			11
59	40-029	針金	延べ約23.5 径0.125		曲げられている。			11
60	40-030	針金	延べ23.0以上 径0.15		曲げられている。			11
61	90-010	種子	0.6 × 0.7 × 0.7	1点		エゴノキか。		11
62	90-011	木片	残径13.6 × 4.0 厚1.9	破片	全体に表面研磨し、容器または流木の可能性あり。			11

近代建物基礎

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-057	陶器挿鉢	残径8.6 × 6.2 残高5.3	破片	灰赤色。無釉。外面口縁部以下回転削り。	堺。18世紀前半~中頃。	21	11
2	10-058	陶器挿鉢	残径18.7 × 9.9 残高9.5	破片	灰赤色。無釉。外面口縁部以下回転削り。	堺。19世紀前半~中頃。	21	11
3	20-017	磨石	7.6 × 8.1 × 3.2 253g	1/2	河床礫使用。下半分欠損。裏面に研磨面形成。表面錆付着。	安山岩か。	21	11
4	10-224	陶器甕	腰部径49.4 残高25.4	下半部片	酸化焰焼成。内外面撫で。渡廊下基礎際に正位で据えられる。	産地不詳。近代。		12
5	40-012	鉄滓	5.5 × 4.1 × 1.7	破片		東側。		12
6	90-012	ピン	径6.4 残高23.5	口端欠損	ジュースビン形。青色ガラス使用。	4(甕)と一括で出土。		12
7	10-005	陶器皿	口(13.4) 底(6.4) 高3.2	1/3	灰白色・黄褐色。高台内を除き白土刷毛塗り。曇付きを除き透明釉。	瀬戸・美濃。19世紀。	15	6
8	40-010	角釘	0.7 × 0.6 × 4.4 2.83g	先端側	先端4mmで折れ曲がる。		16	7

2区表採

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-059	陶器皿	口14.0 底7.2 高3.0	5/6	明緑灰色。波佐見系。見込み蛇の目釉剥ぎ。五弁花コンニャク判。	肥前。18世紀中頃~19世紀初。	21	12
2	20-018	凹石	44.3 × 32.4 × 17.2 37,260g	完形	大型の河床礫使用。自然の窪みを利用し細かいはつりで凹部作る。	2面。溶結凝灰岩。	21	12

3区表土

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-060	平瓦	長27.4 幅(17.4) 厚2.0	1/3	灰色。焼成やや弱い。表面研磨、裏面撫で。	本葺き型か。	21	12
2	10-225	土瓶	口9.1 底7.2 高10.1	1/2	口縁部から底部外面に白土掛け、呉須で染付した後施釉。	笠間・益子。近現代。		12

遺跡全体

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	40-013	角釘	径0.6 長①2.3 ②3.7	2片	先端片(①)、中位片(②)。			12
2	90-013	ホヤ	残径5.1 × 3.6 厚0.16	破片	基部片。	ランプ。		12
3	30-001	漆片		数片	塗膜小片。	出土位置注記消失。		12
4	30-002	種子	0.6 × 0.6 × 0.3	1点				12

1面出土の非掲載遺物 (分類作業は1回のみで、下表は各遺構・地点毎、種別毎に仕分けしたものを集計した。)

土師器 (古式土師、15片、149g)、土師器 (30片、181g)、須恵器 (18片、300g)、土師器・かわらけ (8片、34g)、内耳鍋・ほうろく (39片、911g)、軟質陶器 (3片、18g)、瓦質製品 (1片、4g)、焼締陶器 (10片、457g)、陶器 (417片、5,373g)、磁器 (528片、4,600g)、瓦 (本葺き型、1片、18g)、瓦 (日本型、580片、54,393g)、その他焼物類 (10片、166g)、石板 (2片、16g)、鉄製品 (12片、475g)、白ガラス (1片、1g)、鉛 (2点、2g)

2面

4号建物

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-061	陶器皿	口(11.0)底(5.1)高(2.5)	破片	灰白色。内面から高台外面志野釉。口縁部波状。	瀬戸・美濃。17世紀。	23	22
2	40-014	角釘	3.3×0.6×0.6 2.26g	下方破片	尖端欠損。頭部近くまで残っている可能性あり。	目釘か。	23	22
3	40-015	角釘	2.0×0.6×0.6 1.15g	下方破片	尖端欠損。		23	22

5号建物

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	40-016	鉄器	3.5×0.5×0.4 5.00g	不明	外面に漆喰附着。	釘か。	25	22
2	40-017	角釘	4.3×1.1×0.7 4.71g	尖端欠	頭部折れる。	2寸釘か。	25	22
3	90-014	スリガラス	残存3.3×1.0厚0.5			ピンか。		22
4	90-015	スリガラス	残存3.2×1.4×0.9			ピン底か。		22

6号建物

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-062	軟質陶器鉢	残径4.6×4.1厚1.0	口縁片	灰色。口縁部器表摩滅。	中世。	26	22
2	10-063	磁器レンゲ	残径2.9×2.2長4.8	柄破片	取っ手上面染付。	肥前。江戸時代。	26	22
3	10-226	陶器鉢	口(32.0)底16.8高15.5		内面高台脇灰釉。口縁部から体部。銅緑釉と白濁した不明釉を流す。高台内と高台外面から高台脇銘釉。	瀬戸・美濃。近代。		22

1号溝

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-064	軟質陶器鉢	残径11.5×11.6厚0.6	口縁片	地はオリブ灰色で上位吸墨による黒色処理。横位の撫で。	在地。近現代。	27	22
2	10-065	陶器皿	底4.0 残高2.8	1/5	灰白色。内面から高台脇透明釉。貫入。見込み目痕2箇所残る。	京・信楽系。江戸時代。	27	22
3	10-066	冠瓦(三角冠)か	長(5.2)幅(7.3)厚1.9	破片	オリブ黒色。裏面に墨書(当り線か)。表面研磨で吸炭、裏面撫で。	日本型。	27	22
4	10-067	軒丸瓦	残存12.4×7.4厚2.2	巴部片	地灰白色で吸炭での黒色処理。表面研磨。紋は(十六)曜三つ巴紋。	本葺き型。	27	22
5	10-068	丸瓦	長(11.0)幅(10.0)厚1.9	破片	吸炭。径11mmの釘穴。焼成多少甘い。表面研磨、裏面撫でに沈線。	本葺き型。	28	22
6	10-069	丸瓦(紐丸)	長(8.9)幅(10.0)厚3.6	小口片	吸炭あるも多少斑。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	28	22
7	10-070	丸瓦(素丸か)	長(17.9)幅14.4厚2.2	尻部片	地灰白色で吸炭。尻寄り中央に径6mmの釘穴。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	28	22
8	10-071	棧瓦	長26.8幅28.3厚2.0	4/5	斑な黒色処理。幅4.6cm、長7.6cmの尻切込み。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	29	23
9	20-019	砥石	7.0×3.5×2.5 85.0g	下位欠損	頭端面に切断痕。表裏左右に研磨面形成。一部に削痕残る。		28	22
10	40-018	角釘	0.6×0.5×6.0 3.82g	破片	頭、尖端欠損。2寸釘か。		28	22
11	40-019	吊手	2.4×0.75×17.8 101.27g	両端欠損	中央幅1.5cmで下に突帯2箇所。側に径7mm程の孔にビス留め。	近代の可能性もあり。	28	23
12	40-020	不明鉄製品	1.2×0.6×2.6 6.96g	破片	横断面形U字形状を呈する。	刀子等の柄か。	28	23

2号溝

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-072	磁器仏飯器	口3.0 残高3.0	坏部	灰白色。白磁。口縁部の屈曲顕著。	肥前か。近代か。	28	23
2	40-021	鎌	12.6×4.0×0.6 42.05g	一部欠損	刃の幅は広く、やや短い。	草刈鎌か。	28	23
3	40-022	鎌	7.0×2.6×3.0 8.75 g	屈曲部片	刃は細身。柄部との角度は鈍角。		28	23
4	40-023	角釘	6.6×1.1×1.1 7.99 g	頭側欠損	全体に湾曲する。	5寸釘クラスか。	28	23

3号溝

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-073	軟質陶器焼塩壺	残径2.8×3.9 残高4.0	破片	橙色。非轆轤成形。蓋受け部欠損。雲母含まない。		28	23

4号溝

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-074	かわらけ	口(10.0)底(5.0)高2.0	1/3	橙色。右回転轆轤成形。左回転糸切無調整。	江戸時代。	30	23
2	10-075	陶器灯明皿	口(11.0) 残高1.8	口縁片	外面暗赤褐色、内面明黄褐色。内面から口縁部外面銘釉。口縁部油付着。	志戸呂。江戸時代。	30	23
3	10-076	磁器蓋物	口(8.8) 残高3.3	身破片	明緑灰色。外面植物と飛鳥染付。	肥前。江戸時代。	30	23

5号溝

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-077	軟質陶器内耳鍋	口(34.1)底(33.6)高(6.1)	破片	表裏面吸炭。内面撫で、外面上半撫で、下半削り、底面荒れ。		30	23
2	10-078	陶器灯明皿	口(9.2)底(5.0)高2.4	破片	にぶい赤褐色。轆轤成形、回転糸切後周縁まで回転篋削り。銘釉。	製作地不詳。江戸時代。	30	23
3	10-079	陶器灯明皿	口(11.4) 残高(1.9)	口～体片	暗褐色。受部アーチ状の切り込み一部残る。内面から口縁部外面銘釉。	志戸呂。18世紀後半～19世紀前半。	30	23
4	10-080	陶器皿	口(12.6)底(3.9)高4.2	1/4	浅黄色。内面から高台脇貫入の入り灰釉。内面赤、緑、藍色の上絵。	京・信楽系。江戸時代。	30	23

(5号溝 続き)

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
5	10-081	陶器皿	底 4.7 残高 3.4	底部	内外面透明釉。高台内を除き白土刷塗り。	肥前。17世紀末～18世紀後半。	30	23
6	10-082	陶器皿	底 (6.0) 残高 1.4	底部片	淡黄色。内面錆釉をやや厚く掛ける。高台脇回転削り。	瀬戸・美濃。17世紀中頃。	30	23
7	10-083	陶器碗	口 (7.5) 底 (5.1) 高 6.0	1/2	内面から口縁部鉄釉。体部外面から高台内薄い鉄釉。高台やや幅広。	美濃。18世紀前半～中頃。	30	23
8	10-084	陶器碗	口 9.4 底 3.4 高 5.3	一部欠損	灰白色。内面から高台脇鉄釉。口縁部外面具須と鉄絵具により施文。	瀬戸・美濃。18世紀中頃。	30	23
9	10-085	陶器碗	底 (5.2) 高 (3.5)	体～底部	明オリープ灰色。やや焼成不良で、胎土の一部橙色。波佐見系。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	30	23
10	10-086	陶器碗	口 (12.3) 残高 6.3	口縁片	灰白色。内外面鉄釉、口縁部内外面一部に鉄釉掛ける。	瀬戸・美濃。18世紀中頃～後半。	31	23
11	10-087	陶器鉢	底 5.4 残高 5.6	破片	灰白色。外面に鉄絵具と具須による鋸歯状文。内面から高台脇鉄釉。	京・信楽系。江戸時代。	31	23
12	10-088	陶器鉢	口 (10.8) 底 4.5 高 6.8	1/2	胎土黄橙色。緑と褐釉の二彩。高台端部まで施釉。高台内目痕3箇所。	眠平か。時期不詳。	31	24
13	10-089	陶器甕	口 (14.2) 残高 8.2	口～胴片	褐色。半胴甕。口縁部外面2条の沈線。口縁部目痕。	瀬戸・美濃。	31	23
14	10-090	陶器 (火入か)	口 (6.0) 残高 6.3	破片	内灰白色。口縁部内面から外面青磁釉。	肥前。江戸時代。	31	23
15	10-091	磁器皿	口 (13.7) 底 (7.9) 高 3.6	1/3	波佐見系。高台内1重圏線。	肥前。17世紀末～18世紀中頃。	31	24
16	10-092	磁器皿	底 6.6 残高 3.0	底部	高台高く直立。残存部無文。	肥前。18世紀後半～19世紀前半。	31	24
17	10-093	磁器皿	底 (4.9) 残高 3.2	底部	高台内「宣明年製」銘。	肥前。17世紀中頃～末。	31	24
18	10-094	磁器碗	口 (10.1) 底 (3.8) 高 5.0	1/2	薄手で丸味を帯びた碗。残存部に松と竹の染付。文様は三友か。	肥前。18世紀前半～中頃。	31	24
19	10-095	磁器碗	口 (10.6) 残高 (3.6)	口縁片	薄手の碗。梅と竹葉状の文様などを染付。	肥前。17世紀末～18世紀中頃。	31	24
20	10-096	磁器鉢	残高 5.9	口縁片	轆轤成形で口縁部を外面から押さえて輪花とする。白磁。	肥前。19世紀前半～中頃。	31	24
21	10-097	磁器壺	口 (11.1) 底 6.6 高 8.2	2/3	内面体部以下無釉。口縁部内面施文。口錆。高台内不明銘。	瀬戸・美濃。近現代。	31	24
22	10-098	磁器火入	口 5.9 底 4.6 高 7.5	1/2	内面口縁部以下無釉。蛇の目高台。高台端部無釉。若松とシダ類染付。	肥前。江戸時代。	31	24
23	10-099	軒瓦	長 7.5 厚 1.7	破片	灰色。焼成良好。八曜三つ巴紋、垂れは唐草模様。	日本型。	31	24
24	10-100	丸瓦	長 (10.1) 幅 (8.4) 厚 3.2	破片	にぶい黄色。焼成甘い。表面研磨、裏面に網代痕。	本葺き型。	31	24
25	10-101	平瓦	長 (11.4) 幅 (10.0) 厚 1.6	破片	灰色。小口に楕円に瓦#の刻印。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	31	24
26	10-102	平瓦	長 (6.4) 幅 (10.4) 厚 1.8	破片	暗灰色。表面研磨、裏面撫でで横位に2条の刷毛目残る。	日本型。	31	24
27	20-020	砥石	117.7 × 8.2 × 2.2 614g	表裏剥落	左右両側に研磨面形成。	珪質頁岩。	31	24
28	40-024	角釘	8.4 × 0.9 × 0.7 11.0g	破片	頭側と尖端部欠損。	5寸釘か。	31	24
29	90-002	アワビ貝殻		8片	砕けるが1個体分。			24
30	90-003	サザエ蓋		1点				24
31	10-227	陶器土瓶蓋	径9.1 口(7.4) 紐径2.0 高2.9	口縁欠有	外面白土掛けし、具須で染付した後、透明釉施す。	近・現代。		24

8号溝

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-103	磁器皿		破片	明緑灰色。内面鏡による施文。	肥前。江戸時代。	29	24

1号井戸

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-104	陶器皿	底 5.1 残高 3.4	底部	橙色。内面から高台脇透明釉。見込み目痕3箇所。口縁部外反か。	肥前。17世紀前半～中頃。	32	24
2	20-021	砥石	4.5 × 3.3 × 0.7 20g	端部片	板状の薄い石材。表裏面と左右縁面に研磨面形成。	珪質頁岩。	32	24
3	20-022	凹石	21.7 × 16 × 12.5 1,740g	一部欠損	箱形に整形。表裏に径10cm・深さ5.3cm・径9.1cm・深さ3.9cmの窪み。	安山岩。	33	24
4	20-023	石臼 (下臼)	径 30.0 高 16.1 10,520g	1/2	底面上げ底。芯棒孔 3.4cm。播面磨耗顕著。	六分画か。溶結凝灰岩。	33	25

2号井戸

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-105	かわらけ	口 8.0 底 4.0 高 2.5	完形	浅黄橙色。轆轤成形。底部外面焼成後削り、刻みを入れる。	中世か。	34	25
2	10-106	かわらけ	口 (12.6) 底 (8.0) 高 2.8	破片	橙色。左回転糸切無調整。	中世。	34	25
3	10-107	かわらけ	口 (11.3) 底 7.0 高 2.9	1/4	橙色。左回転糸切無調整。	中世。	34	25
4	10-108	軟質陶器鉢	径 6.0 × 7.6 厚 0.7	破片	にぶい黄褐色。内耳鍋口縁部片。	中世。	34	25
5	10-109	軟質陶器鉢	残高 6.6 残幅 6.9	底部片	にぶい赤褐色。内耳鍋底部片。丸底。	中世。	34	25
6	20-024	砥石	10.8 × 10.0 × 8.3 720g	下位欠損	頂部に自然面残り、表裏左右面に研磨面形成。深い切痕残る。	安山岩 (浅間)。	34	25
7	20-025	石鉢	径(26.1) 高13.7 1,420g	1/6	外面はつり調整。内面研磨。	安山岩 (浅間)。	34	25

3号井戸

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	20-026	石臼 (上臼)	径 35.0 高 12.4 6,500g	1/3	窪み2.9cm深。供給口見る。側に径3.2cmの方形孔。播面研磨顕著。	分画数不特定。安山岩。	36	25

7号土坑

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-110	軟質陶器灯明皿	口 (7.4) 底 (4.0) 高 1.2	破片	にぶい黄褐色。底部外面器表磨減。口縁部油付着。	在地か。江戸時代。	37	25
2	10-111	陶器碗	口 (9.4) 底 (3.9) 高 4.8	1/3	浅黄色。内面から高台脇鉄釉の入る透明釉。白土と鉄絵具による松文。	京・信楽系。江戸時代。	37	25
3	10-112	陶器碗	底 (3.0) 高 4.7	1/3	淡黄色。外面2方向に上絵、赤、黄緑、紫を帯びた白濁絵具の3色。	京・信楽系。江戸時代。	37	25

10号土坑

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	40-025	不銹鉄製品	6.0 × 2.3 × 0.9 8.92g	尖端欠	径1.1×0.7cmの棒に径0.8×0.5cmの棒を垂直に付く。戈形を呈す。	用途不明。	39	25

17号土坑

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-113	陶器插鉢	残高 7.6	口縁片	橙色。焼締陶器。外部外面中位に指撫状厚痕。	丹波。17世紀前半。	41	25

20号土坑

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-114	陶器插鉢	残高 8.3	破片	にぶい橙色。口縁部外面自然釉。外面轆轤目顕著。	丹波・信楽。18世紀中頃～後半。	40	25

2号ビット

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	20-027	砥石	5.0 × 3.4 × 1.0 30g	一部欠損	平面形五角形の礫使用。表裏面と左右・上・下縁面に研磨面形成。		39	25

13号ビット

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-115	軟質陶器灯明皿	口 (10.0) 底 (5.0) 高 2.0	1/3	極暗赤褐色。内面から口縁部外面錆釉。外面口縁部以下回転削り。	志戸呂。江戸時代。	40	25

17号ビット

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-116	陶器壺	口 (7.4) 残高 5.1	破片	褐色。口縁部内面と外面鉛釉。口縁部無釉。	瀬戸・美濃。江戸時代。	40	25
2	40-026	角釘	5.6 × 1.3 × 1.0 5.15g	破片	頭部側と尖端欠損。		40	25

1号竪穴

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-117	軒平瓦	長 (12.7) 幅 (13.2) 厚 2.4	破片	灰色。垂れ部欠損するも、下面に垂れの接合に伴う刻み残る。	本葺き型か。	42	25

2区上層部

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-118	かわらけ	口 (9.0) 底 5.9 高 1.9	1/3	浅黄褐色。左回転糸切無調整。口縁部に灯芯痕 3箇所。	江戸時代。	45	25
2	10-119	かわらけ	口 (9.5) 底 6.0 高 1.8	2/3	浅黄褐色。左回転糸切無調整。	江戸時代。	45	25
3	10-120	焼塩壺蓋	径 (6.2)	2/3	橙色。轆轤成形の壺蓋であろう。	18世紀後半～19世紀。	45	25
4	10-121	陶器皿	底 5.1 残高 1.3	底部片	浅黄色。見込み鉄絵。高台外面から内面透明釉。高台内「森」押印。	肥前。17世紀中頃～末。	45	25
5	10-122	陶器皿	底 3.0 残高 1.5	底部片	灰白色。見込み鉄絵による型紙摺り。内面から体部外面灰釉。	美濃。18世紀前半～中頃。	45	25
6	10-123	陶器皿	口 (12.0) 底 (4.2) 高 5.5	1/4	浅黄色。見込み鉄絵。高台外面から内面透明釉。高台内押印。	肥前。17世紀中頃～末。	45	25
7	10-124	陶器碗	径 4.1 × 4.7 残高 3.4	口縁片	外面に赤と黄緑？の上絵具で木の葉状文様。	京・信楽系。江戸時代。	45	25
8	10-125	陶器碗	径 3.2 × 3.6 厚 0.3	口～体片	外面に上絵具で木の葉状文様。上絵具剥がれ色不明。	京・信楽系。江戸時代。	45	25
9	10-126	陶器小鉢	口 (11.5) 底 (6.2) 高 5.5	1/4	淡黄色。透明釉。内面の釉薄い。口縁部外面鉄絵による雷文帯。	製作地不詳。	45	25
10	10-127	陶器壺	口 (9.5) 高 (6.8)	破片	灰褐色。内外面錆釉をやや厚く掛ける。頸部外面一部無釉。	志戸呂。江戸時代か。	45	25
11	10-129	陶器甕	口 (24.0) 高 (6.9)	1/2	内：にぶい黄褐色。外面上半白化粧後具須絵。透明釉。底部外面煤付着。	益子・笠間。近現代。	45	26
12	10-130	陶器土鍋	口 18.7 底 (9.0) 高 (7.2)	ほぼ完形	内面と口縁部外面錆釉。口縁部外面飛艶。底部外面煤付着。	益子・笠間。近現代。	45	26
13	10-131	陶器土鍋	口 20.7 底 8.6 高 7.6	破片	橙色。無釉。体部外面回転削り。	堺。18世紀中頃～後半。	45	26
14	10-132	陶器插鉢	径 6.8 × 6.0 残高 5.7	破片	にぶい赤褐色。錆釉。	瀬戸・美濃。18世紀後半。	45	26
15	10-133	陶器插鉢	径 16.8 × 10.0 残高 9.8	口縁片	暗赤褐色。半胴甕。口縁部内外面に張り出す。口縁部外面 2 条の沈線。	瀬戸・美濃。江戸時代。	45	26
16	10-128	陶器壺	径 5.6 × 5.7 残高 5.6	破片	外面から口縁部内面青磁釉。	肥前。江戸時代。	45	26
17	10-134	陶器鳥水・餌入	口 (5.0) 底 (4.4) 高 2.5	1/4	灰白色。内面から体部外面灰釉。回転糸切無調整。	瀬戸・美濃。19世紀前半～中頃。	45	26
18	10-135	磁器皿	口 (9.5) 底 3.8 高 3.1	3/4	外面蜻唐草。つまみ内不明銘。口縁部内面雷文帯び、天井部三友。	肥前。19世紀中頃。	46	26
19	10-136	磁器皿	口 (9.7) 底 (4.9) 高 2.4	1/2	型押し成形。内面底部周縁と口縁部に具須を塗る。	19世紀中頃～後半。	45	26
20	10-137	磁器皿	口 (10.0) 底 5.0 高 2.0	1/3	轆轤成形。内面型か押印による施文部に具須を塗る。	19世紀中頃～後半。	46	26
21	10-138	磁器皿	底 (6.0) 残高 2.1	1/4	松文染付。	瀬戸・美濃か。19世紀前半～中頃か。	46	26
22	10-139	磁器紅皿	口 (6.6) 底 (3.2) 高 2.0	1/3	外面染付。やや焼成不良で釉に貫入する。	肥前。18世紀後半～19世紀中頃か。	46	26
23	10-140	磁器紅皿	口 (6.2) 底 (1.4) 高 1.5	1/3	型押し成形。内面から口縁部外面透明釉。	肥前。18世紀中頃～19世紀前半。	46	26

(2区上層部 続き)

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
24	10-141	磁器小杯	口 (5.7) 底 (2.5) 高 4.1	1/2	外面素描による染付。	肥前。19世紀前半～中頃。	46	26
25	10-142	磁器碗	口 (10.0) 残高 4.0	1/5	薄手で半球状に近い形状。	肥前。18世紀前半～中頃。	46	26
26	10-143	磁器碗	口 (8.6) 底 (3.0) 高 4.1	1/4	かなり簡略化した植物文。	瀬戸・美濃。19世紀中頃～後半。	46	26
27	10-144	磁器碗	口 (10.6) 底 (4.4) 高 6.4	1/4	内外面直線文。高台内不明銘。	瀬戸・美濃。19世紀前半～中頃。	46	26
28	10-145	磁器碗	口 (10.2) 底 3.8 高 5.8	1/2	端反碗。内外面素描による染付だが線が太くなっている。	肥前。19世紀前半～中頃。	46	26
29	10-146	磁器碗	口 (10.6) 底 (4.6) 高 5.9	1/3	端反碗。外面体部中位簡略化した龍文。	瀬戸・美濃。19世紀前半～中頃。	46	26
30	10-147	磁器碗	口 (9.8) 底 (4.0) 高 5.6	1/3	外面山と植物を染付。	肥前。17世紀末～18世紀前半。	46	27
31	10-148	磁器碗	口 (9.3) 底 (4.0) 高 (5.1)	1/4	高台内不明銘。高台やや低い。	肥前。18世紀前半～中頃。	46	27
32	10-149	磁器碗	口 (17.1) 残高 5.2	破片	大碗か鉢。外面植物文。波佐見系。	肥前。17世紀後半～18世紀中頃。	46	27
33	10-150	磁器段重	口 (11.1) 底 (10.2) 高 3.8	破片	焼成不良により釉一部白濁。呉須の色濃濃い。	肥前。19世紀前半～中頃か。	46	27
34	10-151	磁器蕎麦猪口	口 (7.3) 底 (5.0) 高 5.5	1/4	やや焼成不良。粗い貫入入る。高台内1重圏線。	肥前。17世紀末～18世紀後半。	46	27
35	10-152	磁器御神酒徳利	底 3.5 残高 7.6	破片	体部簡略化した蜻草唐文。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	46	27
36	10-153	磁器御神酒徳利	底 3.7 残高 5.7	破片	体部簡略化した蜻草唐文。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	46	27
37	10-154	泥人形	幅 3.5 高 4.3 厚 1.8	1/2	橙色。接合部で剥がれる。衣裳、持ち物表現のない片膝姿。	無彩色。	46	27
38	10-155	冠瓦 (三角冠) か	長 (8.5) 幅 (14.5) 厚 3.9	棧側片	灰色。平坦で角縁。表面研磨、裏面撫で。	日本型か。	46	27
39	10-156	冠瓦 (三角冠) か	長 (12.1) 幅 (21.2) 厚 2.2	棧側片	灰色。平坦で角縁。棧側付け痕残る。釘穴残る。	日本型か。	47	27
40	10-157	軒瓦	長 (6.0) 幅 (8.2) 厚 4.5	小口片	オリーブ黒色。表裏面撫で後、表面一部研磨。紋は三つ巴紋。	日本型、近世中期か。	46	27
41	10-158	軒瓦	長 (7.0) 幅 (16.7) 厚 4.6	小口片	灰色。淡くキラ残る。巴は八曜に三つ巴紋。垂れは唐草模様。	日本型。	47	27
42	10-159	軒瓦	長 (9.0) 幅 (10.8) 厚 1.8	巴部片	暗青灰色。表面研磨、裏面撫で。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	47	27
43	10-160	軒瓦	長 (5.1) 幅 (9.0) 厚 2.2	巴部片	灰色。淡くキラ残る。紋は八曜に三つ巴紋。	日本型。	47	27
44	10-161	軒瓦	長 (12.4) 幅 (15.0) 厚 1.9	垂れ部片	暗灰色。表面研磨、裏面撫で。唐草模様。	日本型。	47	27
45	10-162	軒瓦	長 (8.6) 幅 (17.1) 厚 5.0	垂れ部片	暗灰色。淡くキラ残る。表面研磨、裏面撫で。唐草模様。	日本型。	48	27
46	10-163	軒瓦	長 (3.3) 幅 (15.4) 厚 2.3	垂れ部片	灰色。内外面研磨で吸炭。唐草模様。	日本型。	48	27
47	10-164	軒瓦	長 (6.3) 径 7.7 厚 2.3	巴部片	暗灰色。表面研磨、裏面撫で。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	48	27
48	10-165	丸瓦 (紐丸)	長 (13.2) 幅 (16.0) 厚 2.0	小口近く	灰色。キラ全体に多少附着。表面研磨、裏面撫でで沈線2条。	日本型か。	48	27
49	10-166	丸瓦 (素丸)	長 26.9 幅 13.5 厚 2.8	4/5	黄灰色。表面研磨。裏面撫でで沈線2条残る。	日本型か。	48	27
50	10-167	丸瓦	長 (11.3) 幅 (9.4) 厚 1.8	尻側片	青灰色。表面研磨、裏面撫でで沈線2条残る。	日本型か。	48	27
51	10-168	丸瓦	長 (15.4) 幅 13.6 厚 2.6	尻側片	灰色。吸墨に斑。表面研磨、裏面撫でで沈線3条残る。	日本型か。	49	27
52	10-169	平瓦	長 27.1 幅 (22.3) 厚 2.2	1/2	焼成やや甘い。表面吸炭。表面研磨、裏面撫で。	本葺き型か。	49	28
53	10-170	平瓦	長 (18.0) 幅 (13.2) 厚 (2.4)	破片	表裏面撫で整形で吸墨による黒色処理。径 4.6mm の釘穴。	本葺き型か。	49	28
54	10-171	平瓦	長 (16.8) 幅 21.5 厚 2.1	破片	灰色。表裏面撫で。端面丁寧な撫で。	本葺き型か。	49	28
55	10-172	平瓦	長 (13.3) 幅 (14.5) 厚 2.0	破片	灰色。表面研磨されるが荒れ、裏面撫で。	本葺き型か。	50	28
56	10-173	平瓦	長 (12.9) 幅 22.3 厚 1.8	破片	灰色。吸墨に斑あり。表面研磨だが荒れ、裏面撫で。	本葺き型か。	50	28
57	10-174	平瓦	長 (22.0) 幅 (18.7) 厚 2.0	破片	オリーブ灰色。幅 4.2cm、長さ 2.6cm の(尻)切込み。表裏面撫で。	日本型か、近世中期か。	50	28
58	10-175	平瓦	長 (4.3) 幅 (5.9) 厚 1.7	破片	暗灰色。焼成甘く表面のみ吸炭。表面研磨、裏面刷毛目残る。	日本型か。	50	28
59	10-176	平瓦	長 (5.7) 幅 (8.5) 厚 1.8	棧寄破片	暗灰色。表面研磨されるが小穴3箇所。裏面撫でで刷毛目残る。	日本型。	50	28
60	10-177	平瓦	長 5.4 幅 4.6 厚 1.9	破片	暗灰色。表裏研磨で裏面に刷毛目残る。	日本型。	50	28
61	10-178	平瓦	長 (5.1) 幅 (7.6) 厚 1.7	破片	暗灰色。焼成良。表面研磨、裏面撫でで刷毛目残る。	日本型。	50	28
62	10-179	棧瓦	長 (18.0) 幅 (21.8) 厚 2.4	1/3	吸炭。焼成若干甘い。表面研磨だが多少荒れ、裏面撫で。	日本型、近世中期か。	51	28
63	10-180	棧瓦か	長 (5.1) 幅 (9.6) 厚 1.7	小口片	灰色。表面研磨、裏面撫で後吸炭。小口面に扇に「利藤」の刻印。	日本型。	50	28
64	10-181	棧瓦	長 (18.5) 幅 (13.3) 厚 1.9	破片	暗灰色。吸炭斑。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	51	28
65	10-182	棧瓦	長 (21.7) 幅 (17.1) 厚 1.9	棧側片	灰色。棧側に幅 3.2cm、長さ 7.2cm の尻切込み。表裏面研磨で吸炭。	日本型。	51	28
66	10-183	棧瓦	残径 8.5 × 12.2 厚 1.8	破片	灰色。焼成甘い。表面研磨、裏面撫でで刷毛目残り 1/3 吸炭せず。	日本型。	50	29
67	20-028	硯	16.5 × 6.3 × 3.2 360g	一部欠損	灰オリーブ色。表面研磨されるが、弱い削痕残る。		52	29
68	20-029	こも編み石	11.0 × 5.7 × 3.5 314g	完形	L字形の河床礫用い、周囲に幅 3.5cm 程の磨耗痕一周。	安山岩。	51	29
69	20-030	石材	12.8 × 8.0 × 8.7 930g	一端側片	直方体を呈す。建築材か。	近代か。溶結凝灰岩。	51	29
70	20-031	鉄板	4.5 × 7.5 × 0.5 28.58g	破片	鑄鉄の破片か。		51	29
71	10-228	陶器播鉢	口 31.9 底 19.8 高 12.2	3/4	内面口縁下～底部筋軸。外面口～体部下端柿軸。底面白土刷毛掛け。	益子・笠間。近現代。		29
72	10-229	陶器播鉢	口 (36.0) 底 14.8 高 14.1	1/3	口縁～体部外面中位鉄軸やや薄く掛ける。	益子・笠間。近代。		29
73	10-230	陶器鉢	口 (29.0) 底 15.4 高 9.7	2/5	内面鉛釉。外面鉄釉。	常滑の可能性。近現代。		29
74	90-016	ピン	肩径 2.6 底 2.4 残高 4.8	口欠損	円柱形。スリガラス。底面に「A」字の陽刻。			29
75	90-017	ライトカバー	残存 8.0 × 6.6 以下 厚 0.16	9片	白ガラス使用。口縁部除き板状。口縁部厚 1.7mm。			29
76	20-034	砥石	径 2.8 × 2.4 長 10.1 95g	尖端欠	表裏左右面に研磨面形成。	砥沢石。		32

3区上層部

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	10-184	灰釉陶器皿	底 7.1 残高 2.3	底部	灰白色。三日月高台。	東濃。古代。	53	29
2	10-185	陶器皿	口 11.6 底 6.4 高 1.8	3/4	灰白色。高台端部を除き志野釉。高台内の釉薄い。内外面目痕 3箇所。	瀬戸・美濃。17世紀中頃。	53	29
3	10-186	陶器皿	口 (12.8) 底 7.0 高 2.8		灰白色。身深い。口縁部菱形か。輪高台。貫入のある灰釉やや厚く掛ける。	美濃。17世紀後半か。	53	29
4	10-187	陶器皿	底 6.9 残高 3.5	底部	浅黄橙色。高台高く、内面深く削る。透明釉。高台脇以下無釉。見込みに鉄絵。	肥前か。17世紀か。	53	29
5	10-188	陶器皿	口 (33.5) 残高 4.0	口縁片	赤灰色。内面白土刷毛塗り、鉄絵。	肥前。江戸時代。	53	29
6	10-189	陶器皿	底 5.5 残高 2.8	底部	灰白色。高台砂付着。高台内無釉。兜巾状で橙色。見込み文様不明。釉は生掛けか。	製作地不詳。時期不詳。	53	29
7	10-190	陶器皿	径 6.5 × 5.7 残高 (4.0)	破片	明緑灰色。口縁部内面線彫りによる文様。外面屈曲部明瞭な沈線。	肥前。17世紀。	54	30
8	10-191	陶器碗	口 (11.7) 底 (6.6) 高 7.2	1/3	灰白色。外面山水文。	肥前。18世紀。	54	30
9	10-192	陶器段重	口 12.6 底 7.4 高 4.9	底部	明緑灰色。外面簡略化した蜻唐草。	肥前。18世紀末～19世紀中頃。	54	30
10	10-193	陶器灯明受台	口 8.9 底 6.9 高 6.2	一部欠損	淡黄色。脚部から体部内面灰釉。右回転糸切無調整。	製作地不詳。19世紀か。	54	30
11	10-194	陶器灯明受台	口 (8.4) 残高 2.0	破片	にぶい黄橙色。錆油、外面の釉拭う。	瀬戸・美濃。19世紀。	55	30
12	10-195	陶器雪平鍋蓋	口 13.1 高 2.9 鈕径 4.2	ほぼ完形	にぶい黄橙色。内面と外面 2箇所錆釉。体部外面周縁飛鉋。	益子・笠間系。19世紀中頃以降。	55	30
13	10-196	陶器鉢	底 6.8 残高 5.0	底部	内灰白色、外明緑灰色。蛇の目凹型高台。	肥前。江戸時代。	55	30
14	10-197	磁器皿	口 (18.2) 底 8.6 高 2.9	2/3	明緑灰色。内外面型紙摺り。蛇の目凹型高台。	製作地不詳。明治時代。	55	30
15	10-198	磁器碗	口 (6.2) 底 2.6 高 4.9	1/4	内外面簡略化した文様染付。	瀬戸・美濃か。19世紀前半～中頃か。	55	30
16	10-199	磁器碗	口 6.8 底 2.8 高 4.4	1/4	外面素描による染付。高台内不明銘。	肥前か。19世紀前半～中頃。	55	30
17	10-200	磁器碗	口 (8.7) 底 (3.1) 高 4.0	1/2	器壁薄く丸形を呈する。	瀬戸・美濃。近現代。	55	30
18	10-201	磁器碗	口 (9.0) 底 (3.4) 高 4.0	3/4	端反り。高台幅広い。	瀬戸・美濃か。近現代。	54	30
19	10-202	磁器碗	口 8.2 底 3.2 残高 5.2	完形	丸碗。見込み簡略化した五弁花。	肥前。18世紀後半～19世紀初め。	54	30
20	10-203	軒丸瓦	長 16.4 幅 14.3 厚 3.0	小口片	灰色。焼成やや甘い。表面研磨。紋は型取りで十六曜三つ巴紋。	本葺き型。	54	30
21	10-204	軒瓦	長 26.2 幅 28.1 厚 1.7	4/5	巴は八曜三つ巴、垂れは唐草。垂れさしこみ側に扇に「利藤」の刻印。	日本型。	55	30
22	10-205	軒瓦	径 7.3 残厚 0.9	巴部片	暗灰色。焼成やや甘い。表面研磨。紋は三つ巴紋。	日本型。やや古いか。	54	30
23	10-206	軒瓦	径 7.7 厚 2.1	巴部片	暗灰色。キラ若干残る。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	55	30
24	10-207	軒瓦	径 7.7 残幅 9.0 厚 2.2	破片	暗灰色。焼成良好。表面研磨、垂れ部撫で。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	55	30
25	10-208	軒瓦	径 7.8 厚 2.2	巴部片	灰色。焼成やや甘い。表面研磨。紋は八曜三つ巴紋。	日本型。	55	30
26	10-209	丸瓦	長 (18.4) 幅 13.7 厚 2.1	尻側片	灰色。焼成甘い。表面研磨、裏面撫でて蹴押し痕数条。	日本型か。	54	30
27	10-210	丸瓦	長 (17.0) 幅 16.6 厚 1.6	小口側片	暗青灰色。表面紐上に漆喰付着。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	54	31
28	10-211	丸瓦	長 26.2 幅 13.8 厚 2.0	ほぼ完形	暗灰色。表面研磨、裏面撫でて蹴押し痕 2 条残る。	日本型。	55	31
29	10-212	平瓦	長 26.5 幅 23.9 厚 1.8	3/4	暗灰色。表裏面研磨。裏面に葺き土の痕跡残る。	日本型。	56	31
30	10-213	棧瓦	長 (19.9) 幅 28.2 厚 1.8	小口側片	暗灰色。両側生き。小口に切り込みなし。表面研磨、裏面撫で。	日本型。	56	31
31	10-214	棧瓦	長 21.8 幅 (16.8) 厚 1.8	棧側片	暗灰色。表裏に漆喰付着痕、鉄分付着痕残る。切り込みなし。	日本型。	56	31
32	20-032	凹石	10.0 × 7.0 × 3.0 362g	完形	河床礫使用。表面に径 2.1 × 1.6cm、深さ 0.4mm の窪み穿たれる。	安山岩。	56	31
33	10-231	陶器土瓶蓋	径 9.2 口 7.3 鈕径 2.6 高 3.2	完形	外面白土掛けし、呉須で染付した後、透明釉施す。	益子・笠間。近・現代。	31	
34	10-232	磁器段重か鉢の蓋	口 10.6 天井径 9.9 高 2.0	完形	外面に花鳥文染付。	瀬戸・美濃。近現代。	31	
35	10-233	陶器山水土瓶蓋	径 9.1 口 7.3 鈕径 2.0 高 3.4	完形	白土掛けの後施釉。	益子・笠間。近現代。	31	
36	10-234	陶器山水土瓶	口 8.1 底 7.0 高 10.1	4/5	口縁部から底部外面白土掛けの後施釉。	益子・笠間。近現代。	31	
37	10-235	陶器山水土瓶	口 8.4 底 7.4 高 10.5	4/5	口縁部から底部外面白土掛けの後施釉。	益子・笠間。近現代。	31	
38	10-236	陶器土瓶	口 8.2 残高 8.8	1/4	口縁部から底部外面に白土掛け、呉須で染付した後施釉。	笠間・益子。近現代。	32	
39	10-237	陶器土瓶	口 8.7 残高 9.7	1/3	口縁部から底部外面に白土掛け、呉須で染付した後施釉。	笠間・益子。近現代。	32	
40	10-238	土瓶	底 7.3 残高 1.7	底部	呉須絵もしくは山水土瓶。底面に「湯呑」の墨書。	益子・笠間。近現代。	32	
41	10-239	土瓶	底 7.8 残高 2.3	底部	呉須絵もしくは山水土瓶。底面に「始審」の墨書。明治 15 ～ 23 年の始審裁判所時代に使用。	益子・笠間。近代。	32	
42	90-018	ランプ	残存 5.1 × 5.3 厚 0.2	破片	僅かに褐色入る。下位の破片か。			32

2区東側

No.	資料No.	資料名称	測定値 (cm, g)	残存	形状・整形・調整等の特徴	備考	挿図	写真
1	20-033	石臼 (上臼)	残 12.2 × 14.1 × 12.2 2,020g	破片	窪み 3.1cm 深。供給孔方形。側に径方形の未貫通孔。播面磨耗顕著。	分画数不特定。軽石。	52	32

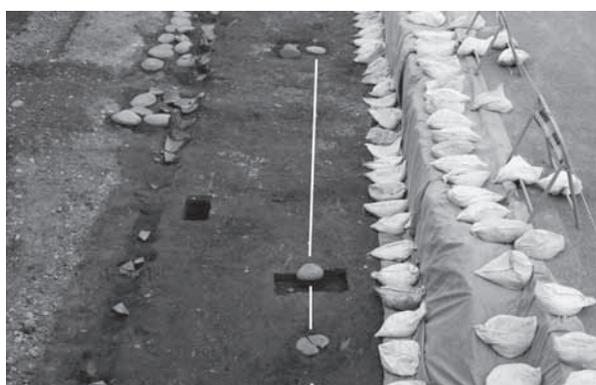
2面出土の非掲載遺物 (分類作業は1回のみで、下表は各遺構・地点毎、種別毎に仕分けしたものを集計した。)

土師器 (古式土師、36片、540g)、埴輪 (6片、383g)、土師器 (38片、457g)、須恵器 (22片、260g)、土師器・かわらけ (72片、321g)、内耳鍋・ほうろく (84片、2,780g)、軟質陶器 (14片、576g)、焼締陶器 (6片、207g)、焼塩壺 (1片、27g)、陶器 (542片、2,091g)、磁器 (93片、1,179g)、瓦 (本葺き型、67片、10,420g)、瓦 (日本型、1,072片、138,184g)、その他焼物類 (16片、461g)、石製品 (4片、202g)、金属製品 (13片、94g)、漆喰 (1片、24g)、ガラス類 (4片、24g)

写真図版



2区1面全景（西より）



1号建物全景（3区、南より）



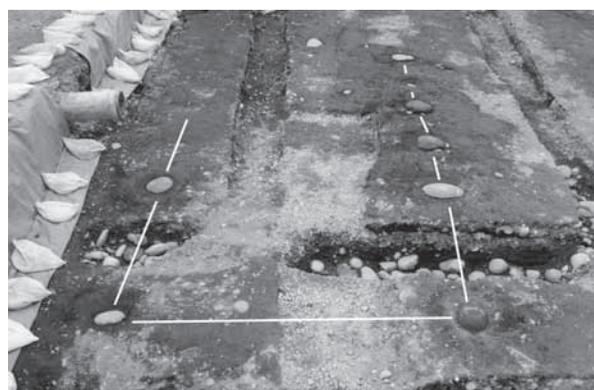
1号建物掘り方断面（3区、南より）



3区1面全景（南より）



3号建物全景（2区、北より）



3号建物全景（2区、東より）



3号建物 No.6 礎石下の状況 (2区)



4号井戸礫埋め込み状況 (3区、東より)



4号井戸石組枠など (3区、西より)



4号井戸全景 (3区、北より)



2区東部遺物集中域全景 (東より)



2区東部遺物集中域東部遺物出土状況 (北より)



2区東部遺物集中域中部遺物出土状況 (北より)



2区東部遺物集中域中西部遺物出土状況（北より）



2区東部遺物集中域西部遺物出土状況（北より）



裁判所旧庁舎土蔵基礎遺物出土状況（3区、東より）



土蔵基礎南西部遺物出土状況（3区、東より）



土蔵基礎北西部遺物出土状況（3区、東より）



3建-1



3建-3



3建-5



3建-2



3建-4



3建-6



3建-7



3建-8



3建-9



4井-1



4井-3



4井-4



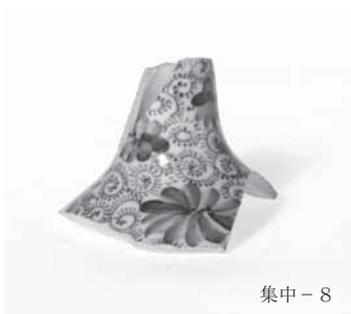
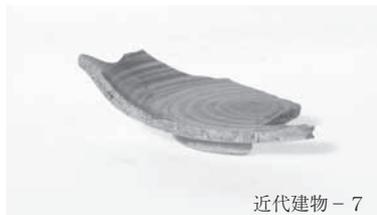
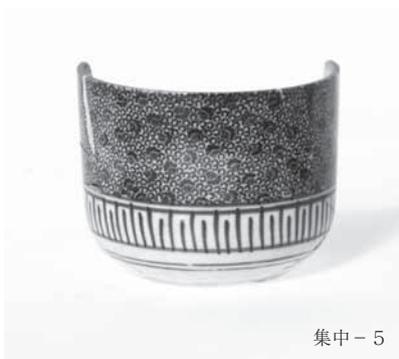
4井-2



4井-5



4井-6





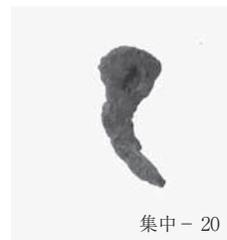
集中-15



集中-16



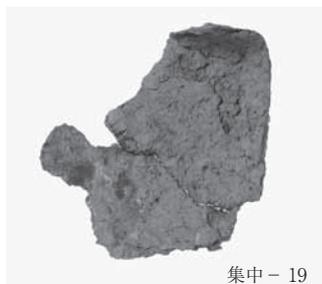
集中-17



集中-20



集中-18



集中-19



集中-21



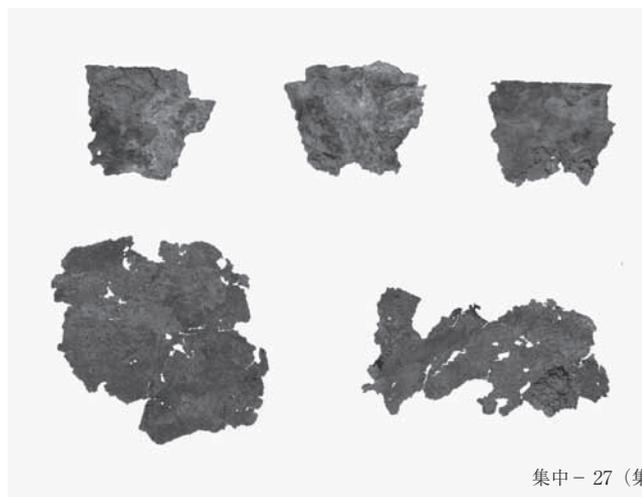
集中-22



集中-23



集中-24



集中-27 (集

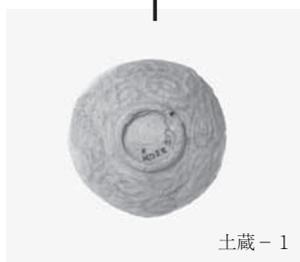


集中-25



近代建物-8

中-28はPL 32)



土蔵-1



土蔵-2



土蔵-3



土蔵-4



土蔵 - 5



土蔵 - 6



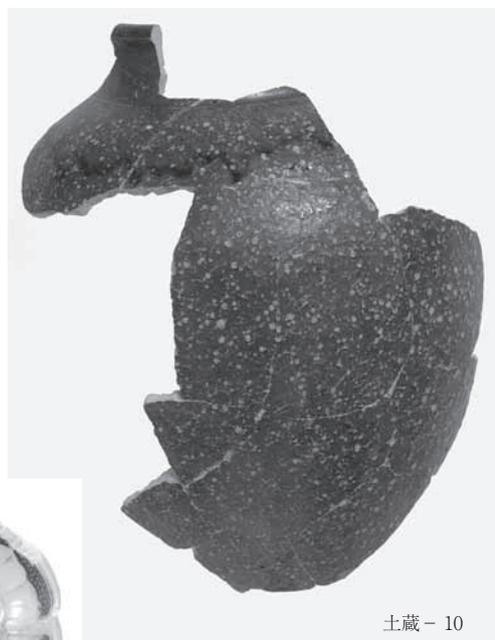
土蔵 - 9



土蔵 - 8



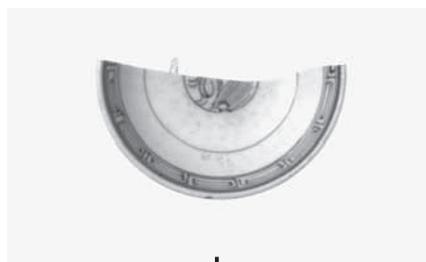
土蔵 - 11



土蔵 - 10



土蔵 - 7



土蔵 - 12



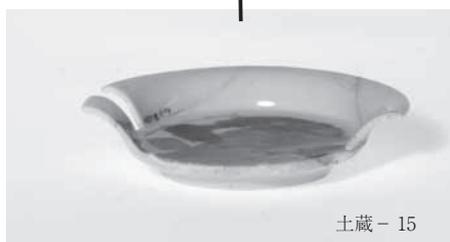
土蔵 - 13



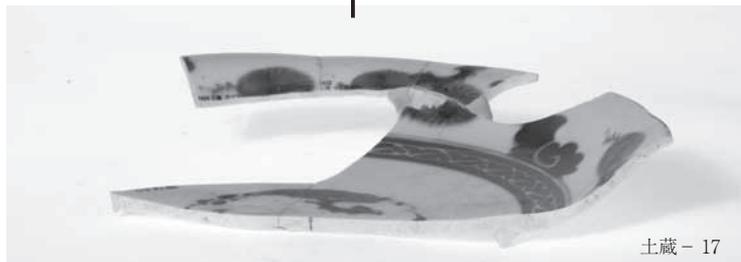
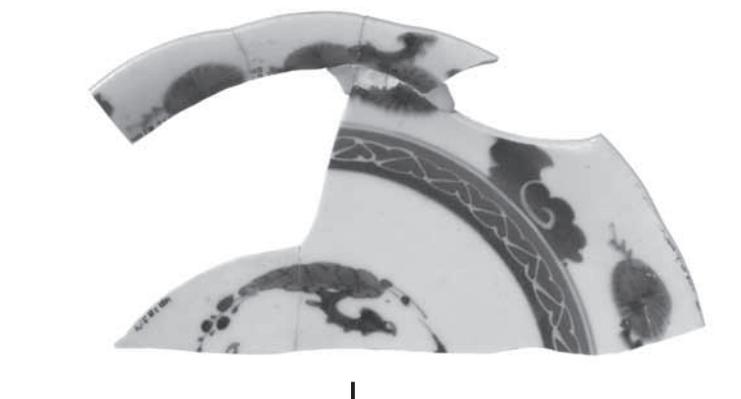
土蔵 - 14



土蔵 - 16



土蔵 - 15



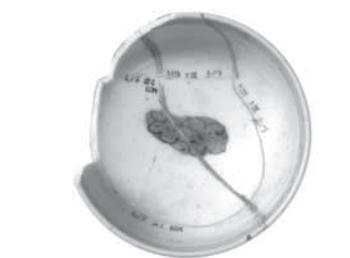
土蔵 - 17



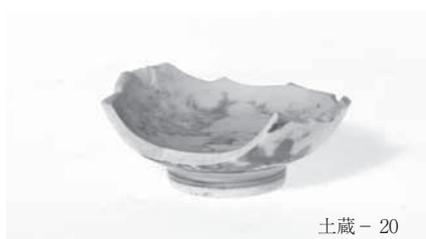
土蔵 - 18



土蔵 - 19



土蔵 - 21



土蔵 - 20



土蔵 - 22



土蔵 - 24



土蔵 - 23



土蔵 - 25



土蔵 - 26



土蔵 - 27



土蔵 - 28



土蔵 - 29



土蔵 - 30



土蔵 - 31



土蔵 - 33



土蔵 - 32



土蔵 - 34



土蔵 - 35



土蔵 - 38



土蔵 - 39



土蔵 - 36



土蔵 - 37



土蔵 - 40



土蔵 - 41



土蔵 - 44



土蔵 - 45



土蔵 - 46



土蔵 - 42



土蔵 - 47



土蔵 - 48



土蔵 - 49



土蔵 - 43



土蔵 - 50



土蔵 - 51



土蔵 - 52



土蔵 - 53



土蔵 - 54



土蔵 - 55



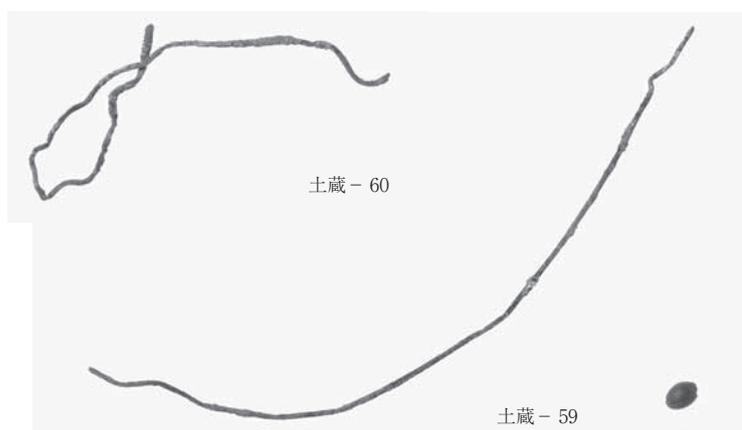
土蔵 - 56



土蔵 - 57



土蔵 - 58



土蔵 - 60

土蔵 - 59

土蔵 - 61



土蔵 - 62



近代建物 - 1



近代建物 - 2



近代建物 - 3



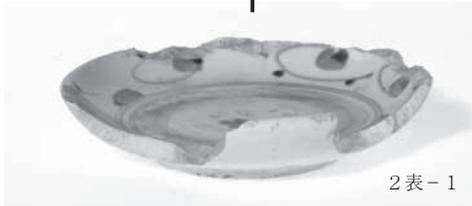
近代建物 - 4



近代建物 - 5



近代建物 - 6



2表 - 1



2表 - 2



3表 - 1



3表 - 2



全体 - 1



全体 - 2



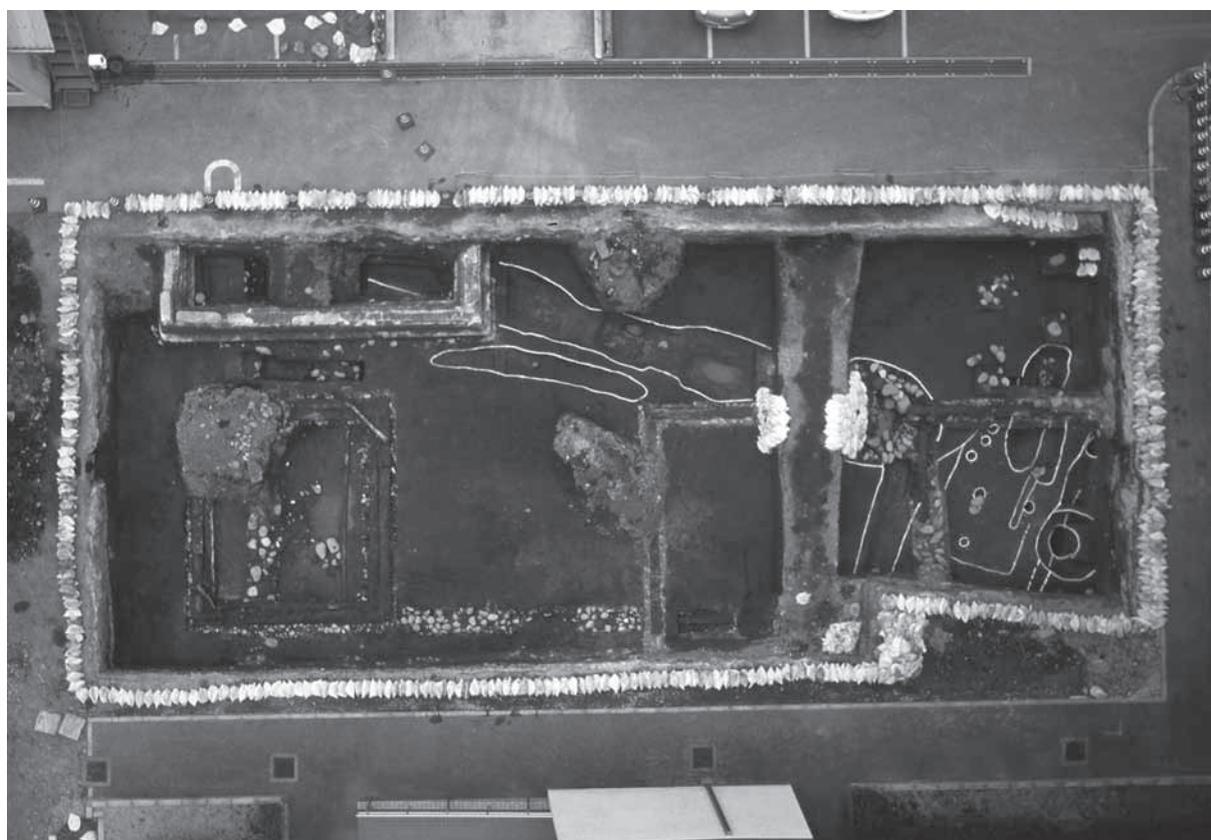
全体 - 3



全体 - 4



2区2面全景 (左侧西)



3区2面全景 (左侧北)



4号建物全景（3区、西より）



4号建物北列1号地形（3区、北より）



4号建物北列2号地形（3区、北より）



4号建物南列1号地形（3区、北より）



4号建物南列2号地形（3区、北より）



4号建物1号掘り方断面（3区、南より）



4号建物7号掘り方断面（3区、南より）



4号建部下層全景（3区、東より）



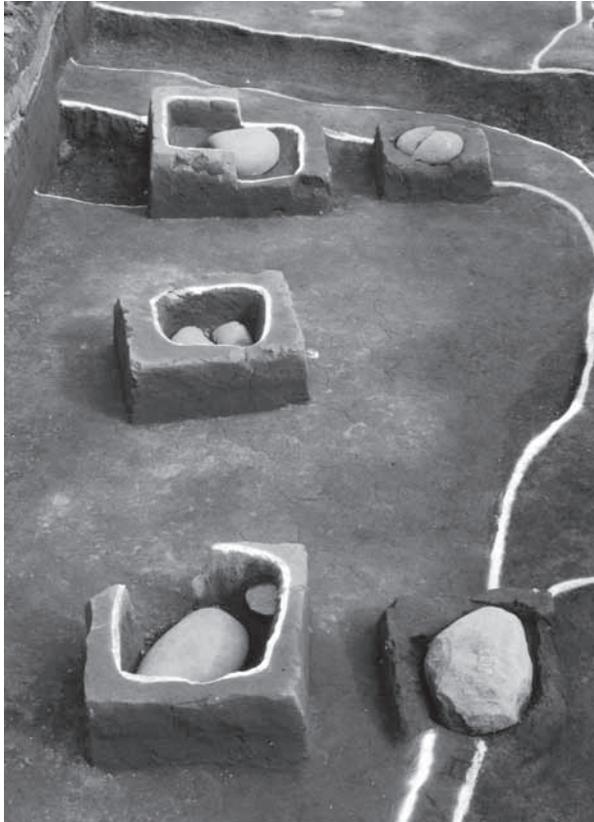
5号建物上層全景（2区、西より）



5号建物1号地形（2区、北より）



5号建物2号掘り方断面（2区、南より）



5号建部下層全景（2区、西より）



5号建部下層全景（2区、南より）



6号建物全景 (2区、西より)



1号溝全景 (2区、西より)



2号溝全景 (2区、南より)



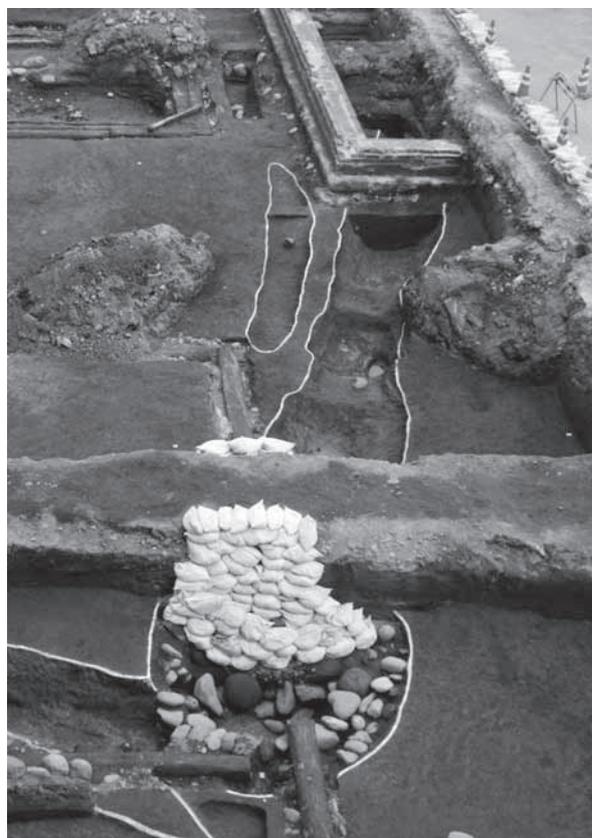
3号溝全景 (2区、南より)



4号溝全景 (3区、箱堀、南より)



4号溝全景 (3区、箱堀、東より)



5号溝全景 (3区、障子堀、南より)



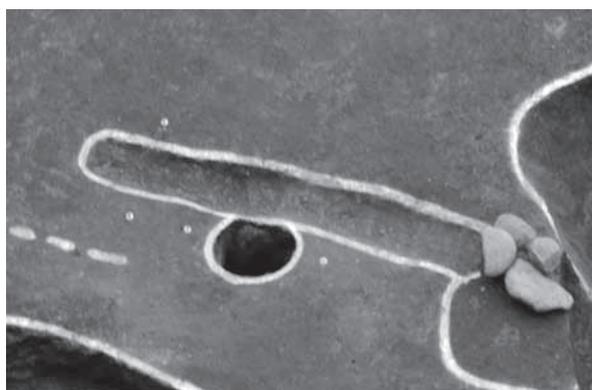
5号溝全景 (3区、障子堀、北より)



5号溝障壁 (3区、南より)



6号溝全景 (3区、南より)



7号溝全景 (3区、南より)



8号溝全景 (2区、北より)



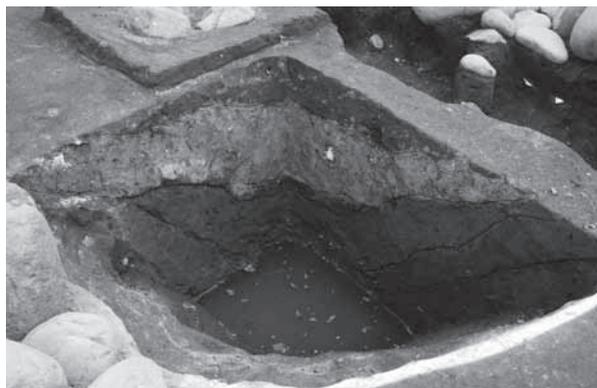
9号溝全景 (3区、西より)



1号竪穴遺構全景 (3区、西より)



1号井戸全景 (2区、南より)



2号井戸埋土断面（2区、北西より）



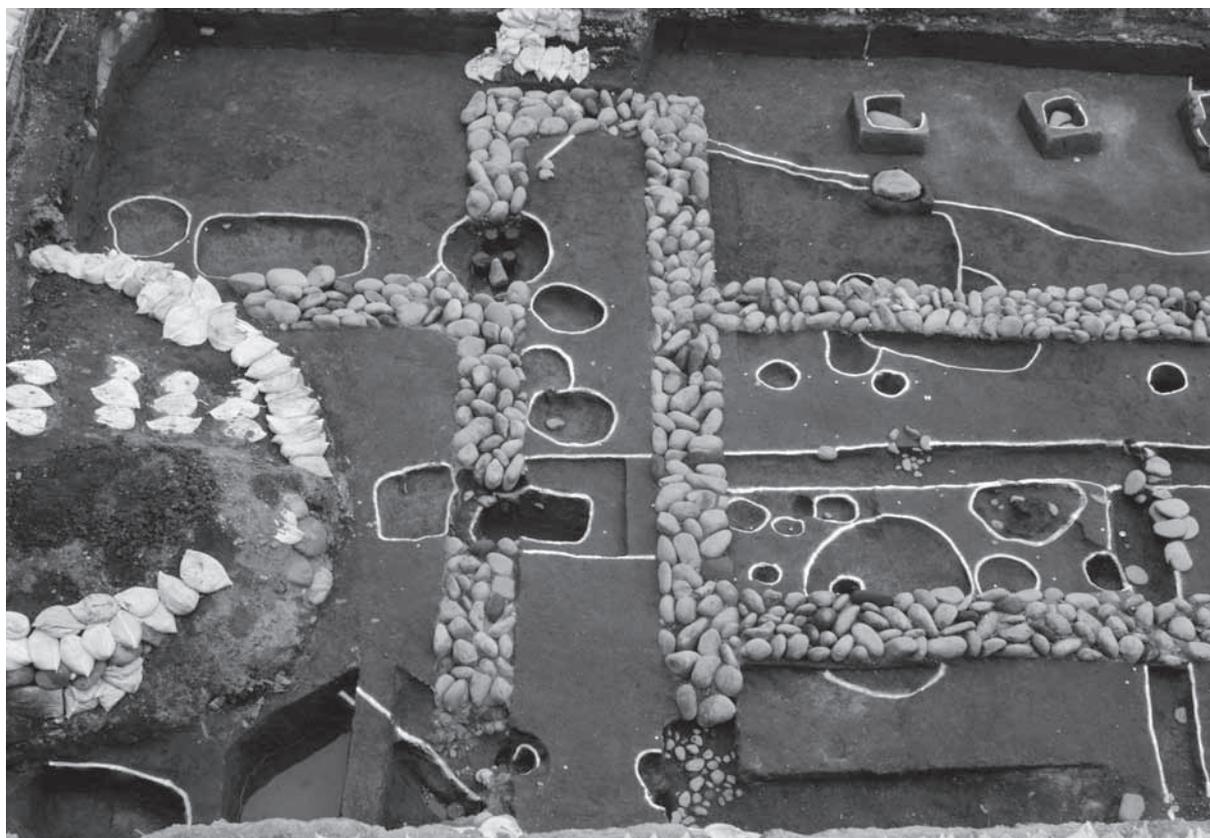
2号井戸全景（2区、西より）



3号井戸埋土断面（2区、西より）



3号井戸全景（3区、西より）



2区西部の土坑群（南より）



2区東部の土坑・ピット群 (南より)



1号土坑全景 (2区、北より)



3号土坑全景 (2区、北より)



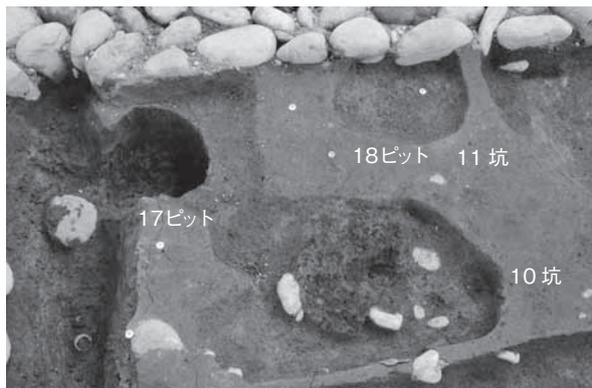
6号土坑全景 (2区、北より)



7号土坑全景 (2区、南より)



9号土坑全景 (2区、南より)



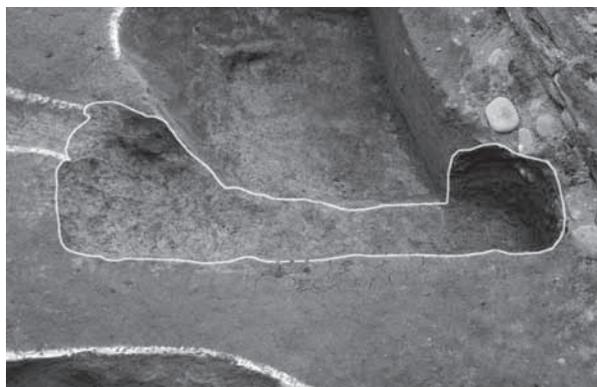
10号土坑及び17・18号ピット全景 (2区、北より)



15号土坑全景並びに土層断面 (2区、東より)



17号土坑全景 (2区、南より)



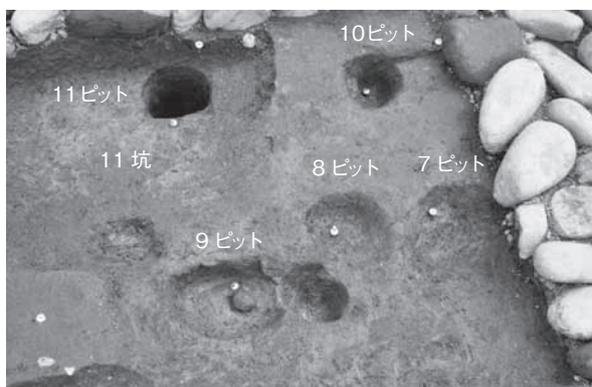
18号土坑全景 (3区、南より)



19号土坑全景 (2区、南より)



20号土坑全景 (2区、東より)



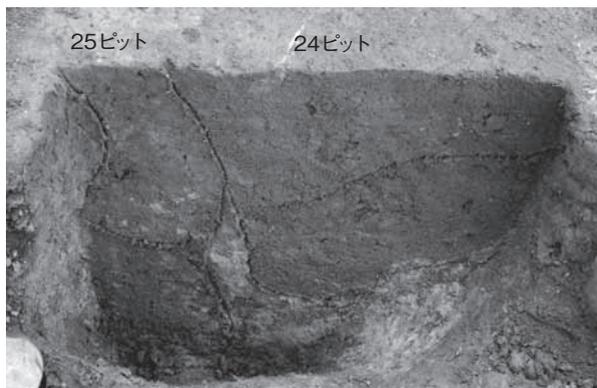
7～11号ピット全景 (2区、南より)



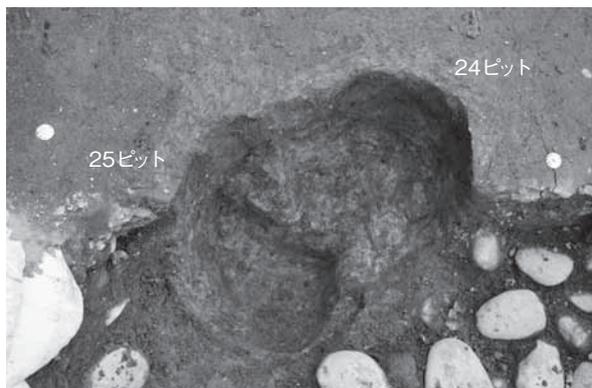
12号ピット全景 (2区、東より)



13・14号ピット全景 (2区、北より)



24・25号ピット土層断面 (2区、東より)



24・25号ピット全景 (2区、東より)



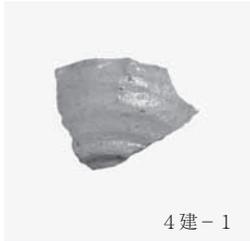
26号ピット全景 (3区、北より)



南北石列全景 (2区、北より)



中世水田全景 (2区、南より)



4建-1



4建-2



4建-3



5建-1



5建-2



5建-3



5建-4



6建-1



6建-2



6建-3



1



1溝-1



1溝-2



1溝-3



1溝-4



1溝-5



1



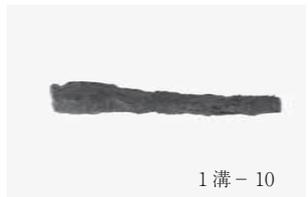
1溝-7



1溝-8



1溝-9



1溝-10



1溝-11



1溝-12



2溝-1



1溝-8



2溝-2



2溝-4



2溝-3



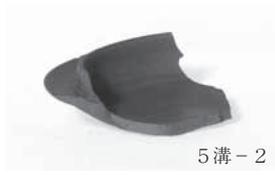
3溝-1



4溝-1



5溝-1



5溝-2



4溝-2



4溝-3



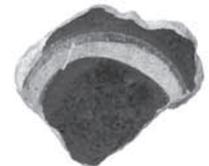
1



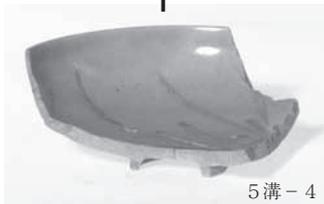
5溝-3



5溝-5



5溝-6



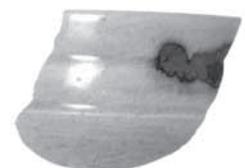
5溝-4



5溝-7



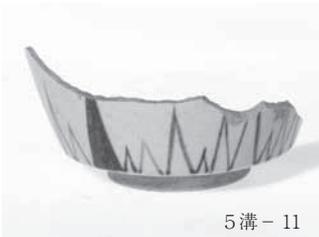
5溝-8



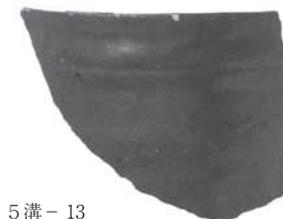
5溝-10



5溝-9



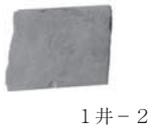
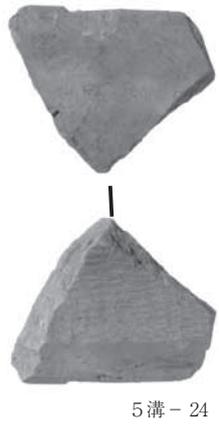
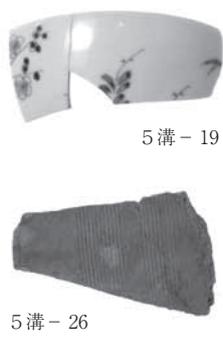
5溝-11



5溝-13



5溝-14





1井-4



2井-1



2井-2



2井-3



7坑-1



2井-7



7坑-2



2井-4



2井-5



2井-6



10坑-1



7坑-2



7坑-3



3井-1



2ピット-1



13ピット-1



17ピット-1



17ピット-2



17坑-1



竪穴-1



2区上層-1



2区上層-2



20坑-1



2区上層-3



2区上層-4



2区上層-5



2区上層-8



2区上層-9



2区上層-10



2区上層-6



2区上層-7



2区上層-11



2区上層-12



2区上層-14



2区上層-13



2区上層-16



2区上層-17



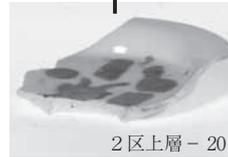
2区上層-18



2区上層-15



2区上層-19



2区上層-20



2区上層-22



2区上層-21



2区上層-23



2区上層-24



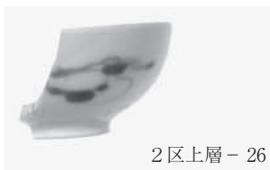
2区上層-25



2区上層-27



2区上層-29



2区上層-26



2区上層-28



2区上層 - 30



2区上層 - 31



2区上層 - 33



2区上層 - 37



2区上層 - 32



2区上層 - 34



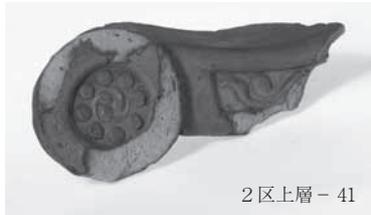
2区上層 - 38



2区上層 - 40



2区上層 - 35



2区上層 - 41



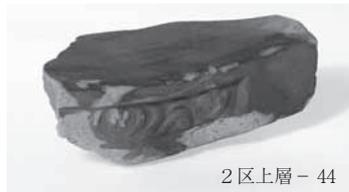
2区上層 - 42



2区上層 - 36



2区上層 - 43



2区上層 - 44



2区上層 - 39



2区上層 - 45



2区上層 - 46



2区上層 - 47



2区上層 - 48



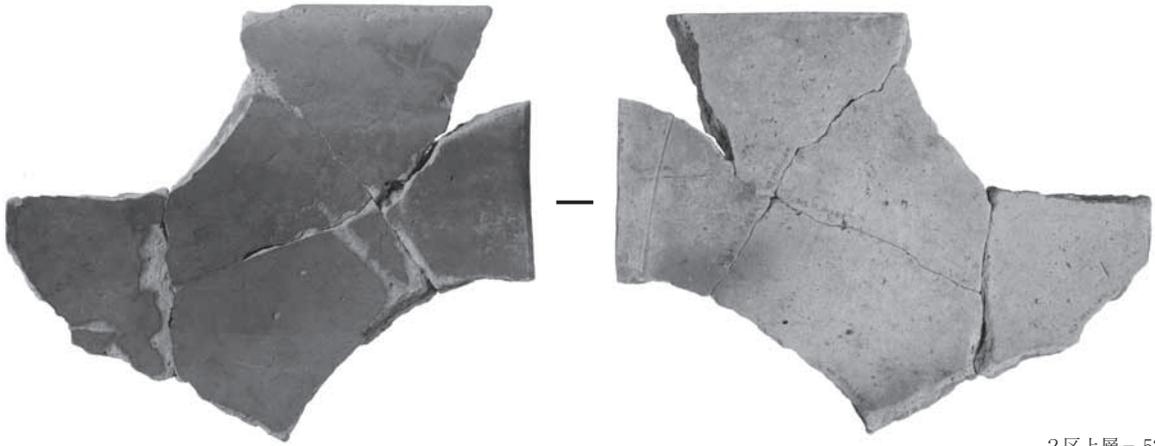
2区上層 - 50



2区上層 - 49



2区上層 - 51



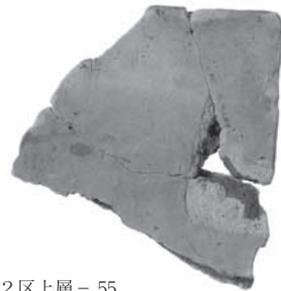
2区上層-52



2区上層-53



2区上層-54



2区上層-55



2区上層-57



2区上層-56



2区上層-58



2区上層-59



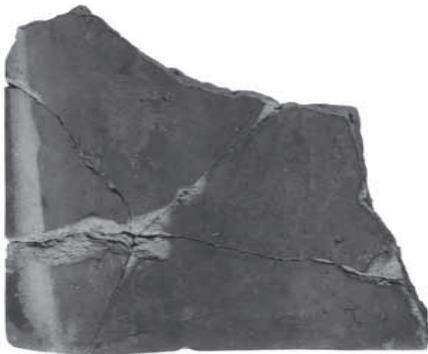
2区上層-60



2区上層-61



2区上層-63



2区上層-62



2区上層-64



2区上層-65



2区上層-66



2区上層-69



2区上層-67



2区上層-70



2区上層-68



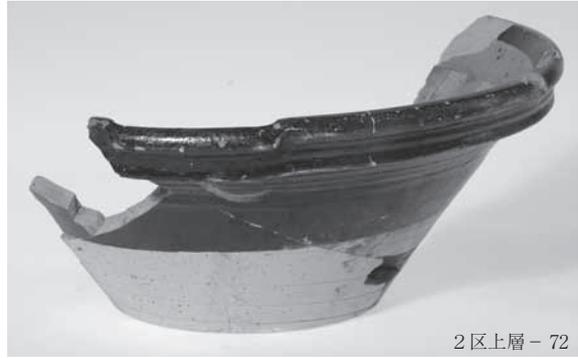
2区上層-74



2区上層-75



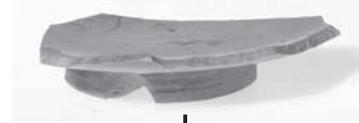
2区上層-71



2区上層-72



2区上層-73



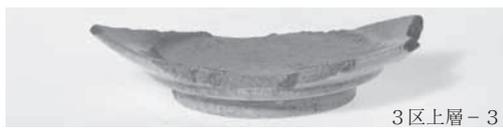
3区上層-4



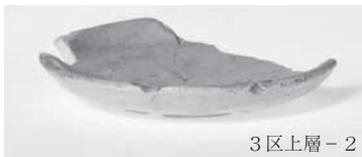
3区上層-1



3区上層-6



3区上層-3



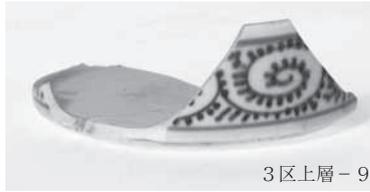
3区上層-2



3区上層-5



3区上層-7



3区上層-9



3区上層-8



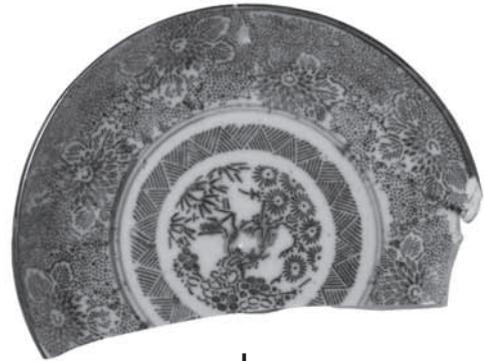
3区上層-10



3区上層-12



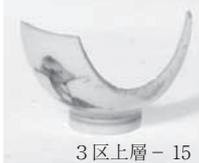
3区上層-13



3区上層-16



3区上層-11



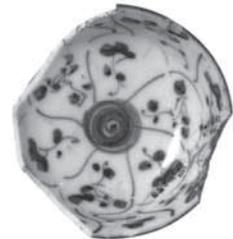
3区上層-15



3区上層-14



3区上層-17



3区上層-18



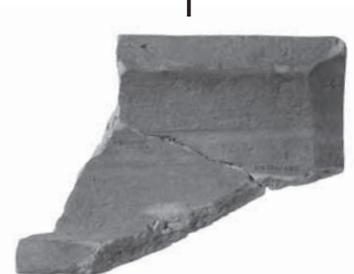
3区上層-19



3区上層-20



3区上層-21



3区上層-26



3区上層-22



3区上層-23



3区上層-24



3区上層-25



3区上層 - 27



|



3区上層 - 29



3区上層 - 28



3区上層 - 31



3区上層 - 30



3区上層 - 33



3区上層 - 35



3区上層 - 34



3区上層 - 32



3区上層 - 36



3区上層 - 37



3区上層 - 38



3区上層 - 39



3区上層 - 40



3区上層 - 41



3区上層 - 42



東部 - 1



2区上層 - 76

1面



集中 - 28



2区に於ける10号溝全景（西より）



3区中部の10号溝（北より）



3区北端部の10号溝（東より）



3区南部の10号溝（南より）

発掘調査報告書抄録

書名ふりがな	まえばしじょうさんのまるいせき
書名	前橋城三の丸遺跡
副書名	前橋地方・家庭裁判所増築棟建設事業に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第 424 集
編著者名	石守 晃
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	071228
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田 784-2
遺跡名ふりがな	まえばしじょうさんのまるいせき
遺跡名	前橋城三の丸遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししおおてまち
遺跡所在地	群馬県前橋市大手町
市町村コード	10201
遺跡番号	群馬県：前橋市 -00308（古代・中世）・00546（近世）
遺跡 ID (事業団)	1111
北緯(日本測地系)	362321
東経(日本測地系)	1390357
北緯(世界測地系)	362332
東経(世界測地系)	1390345
調査期間	20070101-20070228
調査面積	2797.86 m ²
調査原因	前橋地方・家庭裁判所増築棟建設
種別	城郭 / その他
主な時代	古代・中世・近世
遺跡概要	古代 - 溝 1+As-B 降下面 中世 - 井戸 1+ 水田 1- 土器・軟質陶器・石製品 近世 - 礎石建物 6+ 溝 8+ 井戸 3+ 土坑 17+ ピット 26+ 竪穴遺構 1+ 石列 1- 陶磁器・石製品・鉄製品 他
特記事項	近世前橋城外曲輪、再築前橋城三の丸の調査。 近世前橋城明和 5 年（1768）破却の近世前橋城に伴う障子堀。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 424 集

前橋城三の丸遺跡

前橋地方・家庭裁判所増築棟建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 19 年 12 月 19 日 印刷

平成 19 年 12 月 28 日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田 784 番地 2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／杉浦印刷株式会社

